

耶馬溪

29  
126

Ⓜ

026342-000-2

29-126

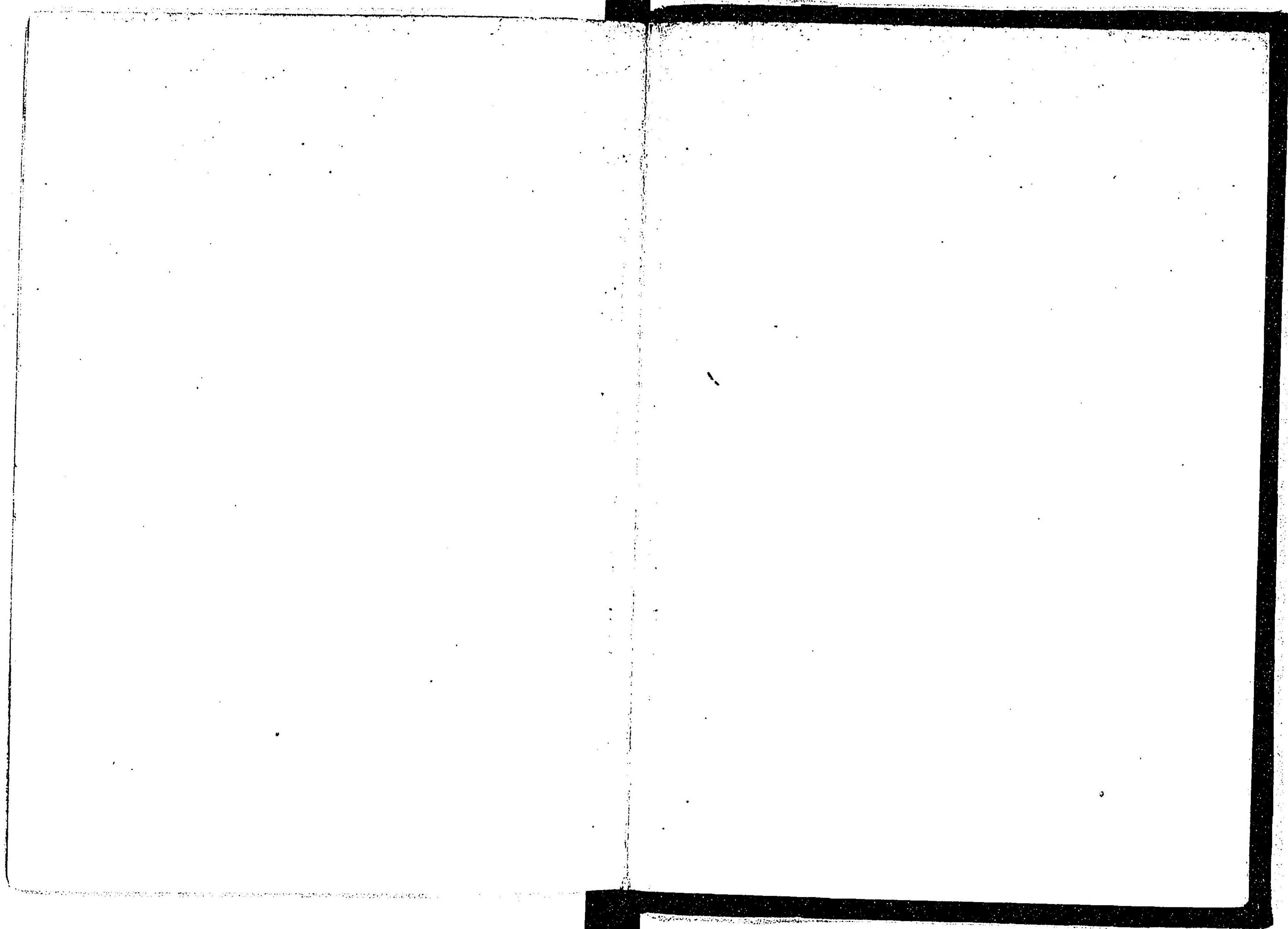
耶馬溪

大橋 乙羽生 / 著

M33

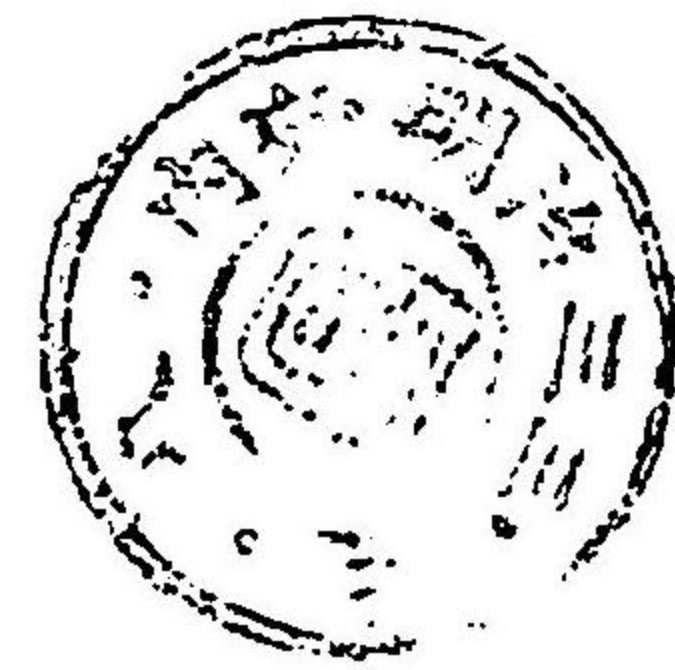
ADC-4128







馬溪

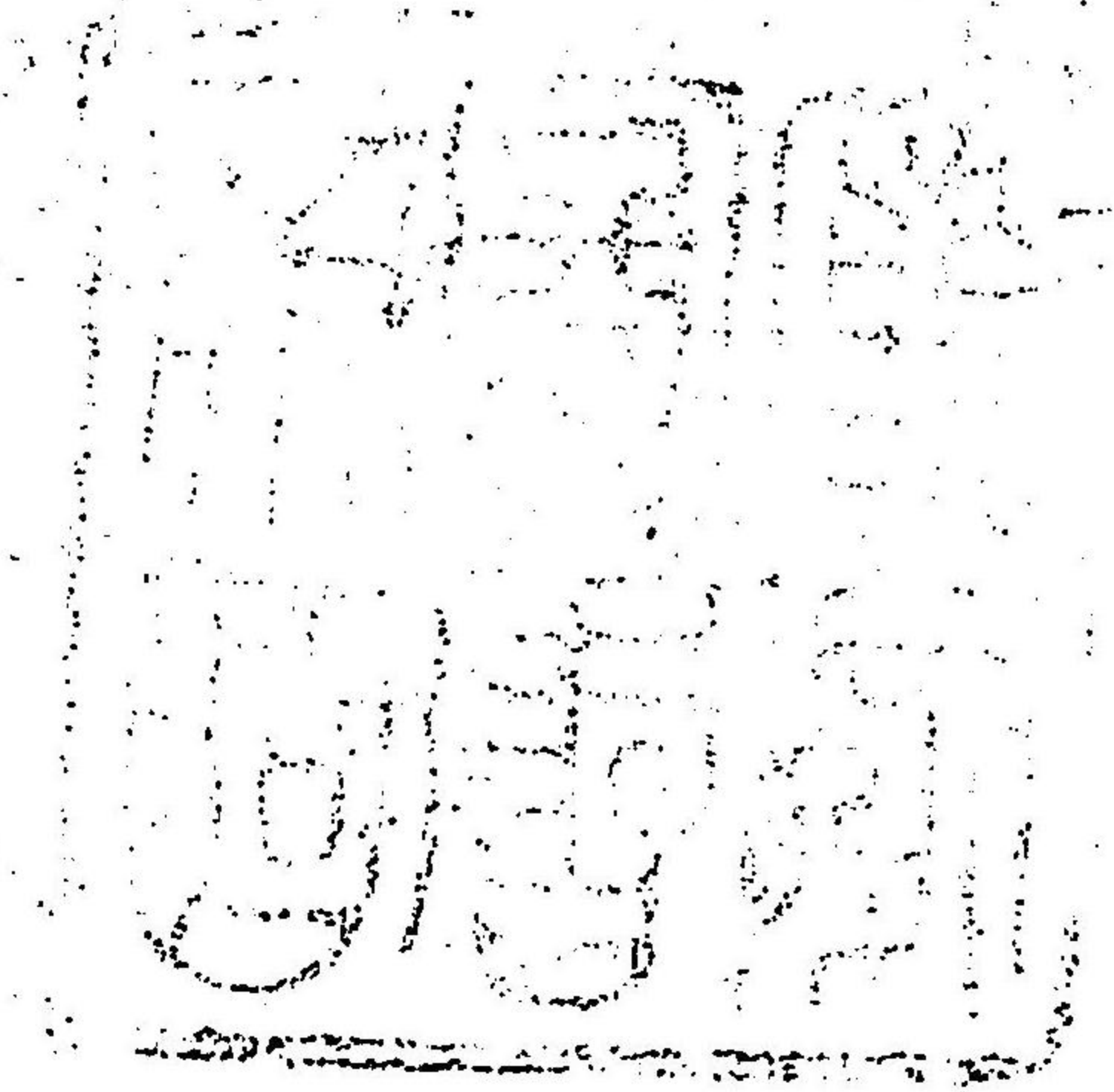


長安  
張氏  
印

是即真帖

青萍迂夫

駝馬之名聞于天下詩文之圖  
畫之者蓋嘗千百而能傳其真  
者則寥寥晨星矣友人乙羽子  
性好遊善文辭長寫真術名山



題耶馬溪寫真帖

青萍迂夫

耶馬之名聞于天下詩文之圖

畫之者豈啻千百而能傳其真

者則寥寥晨星矣友人乙羽子

性好遊善文辭長寫真術名山

大川勝區靈域一觸其目則化  
爲寫真飛布海內外今茲遊耶  
馬攀彥山寄其傲懷復化爲寫  
真五十餘葉因縹裝爲帖以公  
于世耶馬屬豐以予爲豐人之  
故子來請題數言嗚呼耶馬一

溪上下十三村遠達彥山有山  
有水有樹有石鷄犬相和老幼  
來往真桃源仙鄉矣此帖一出  
予知其真景始遍於一世然則  
前之詩文之圖畫之者可謂幾  
無顏色也

己亥臘月念貴族院會議告  
休予乃發京將赴輕井澤途  
宿高崎翌日早起無事因呵  
筆作此文以寄乙羽子

謙又識



田中 大掃製版



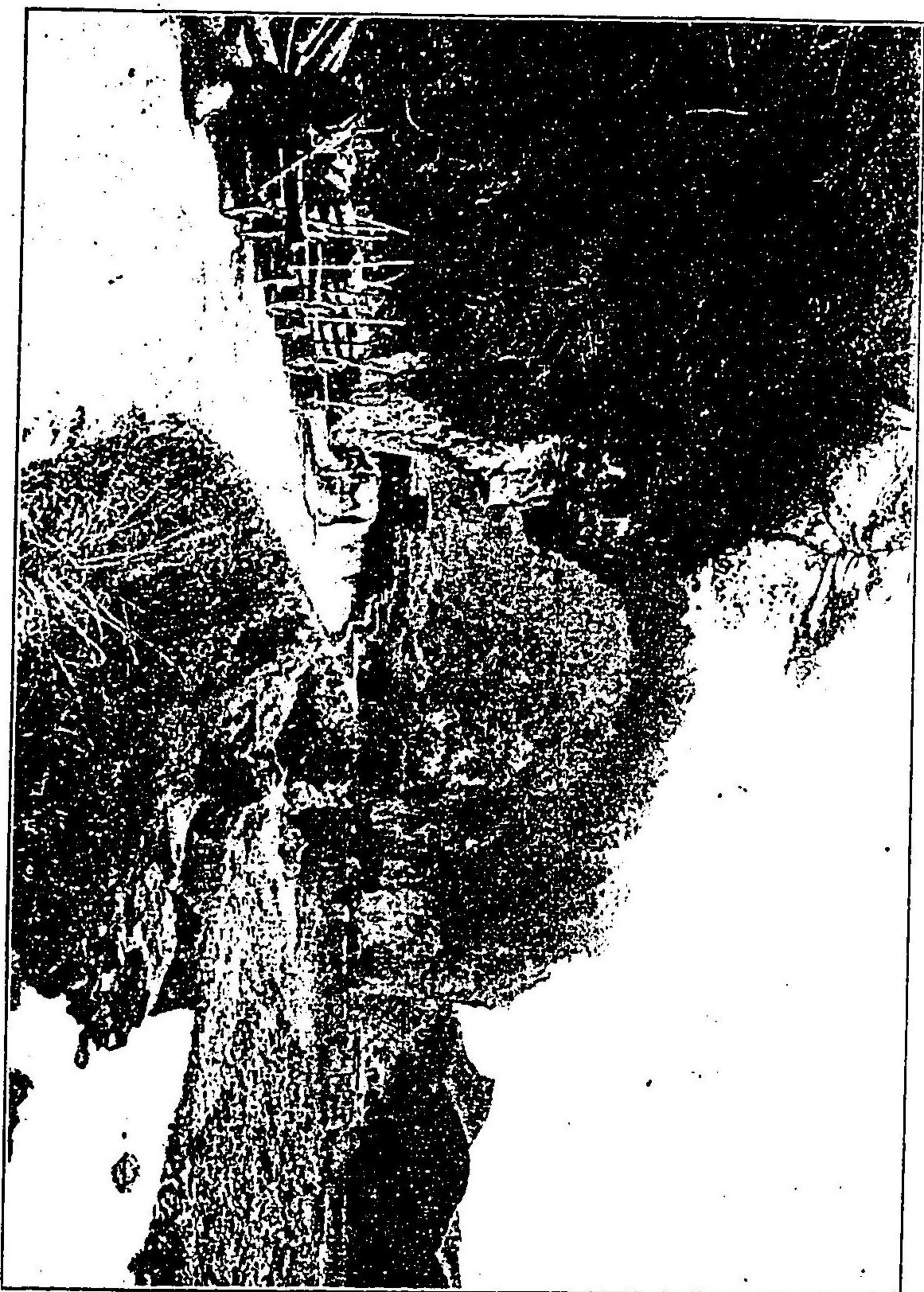
田中猪太郎製版

道岐道古新溪馬耶

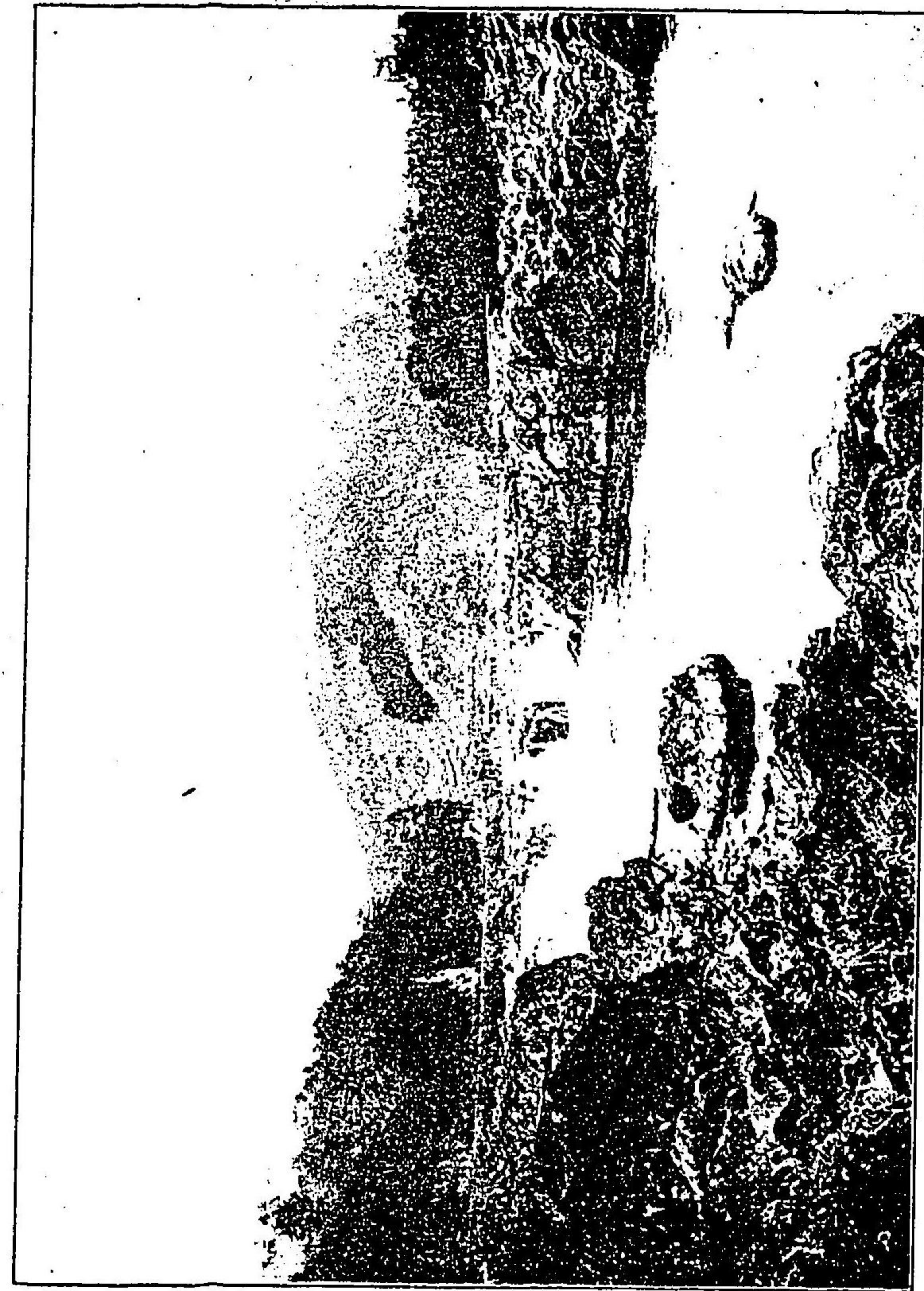
(一)

大橋乙羽生寫真





佛 坂 (三)

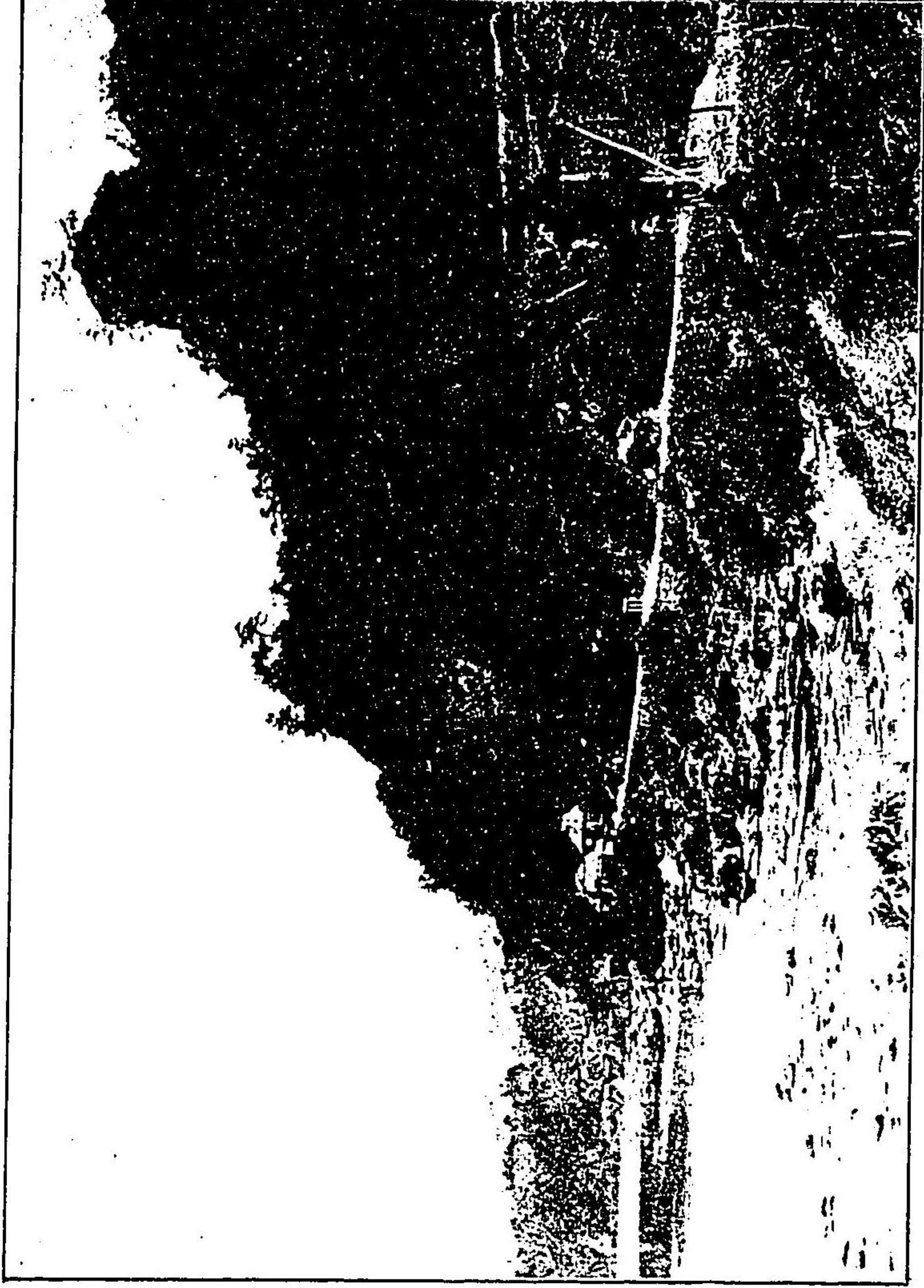


鐘 鐘 (三)

青村入口 (五)



樋田入口 (四)



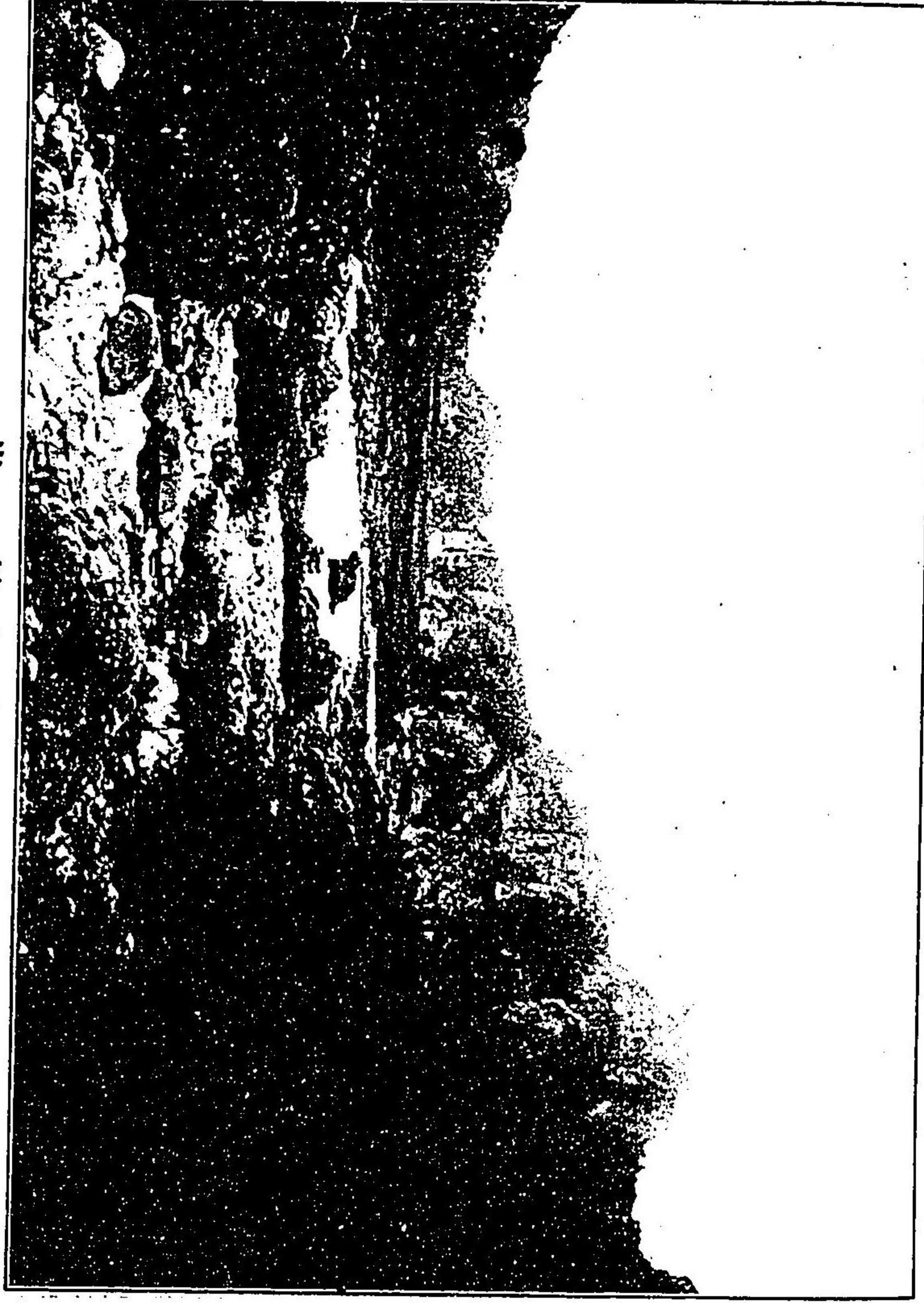
青 隧 道 出 口 (七)



管 水 村 對 岸 (六)

岩ノ蛇大川國山

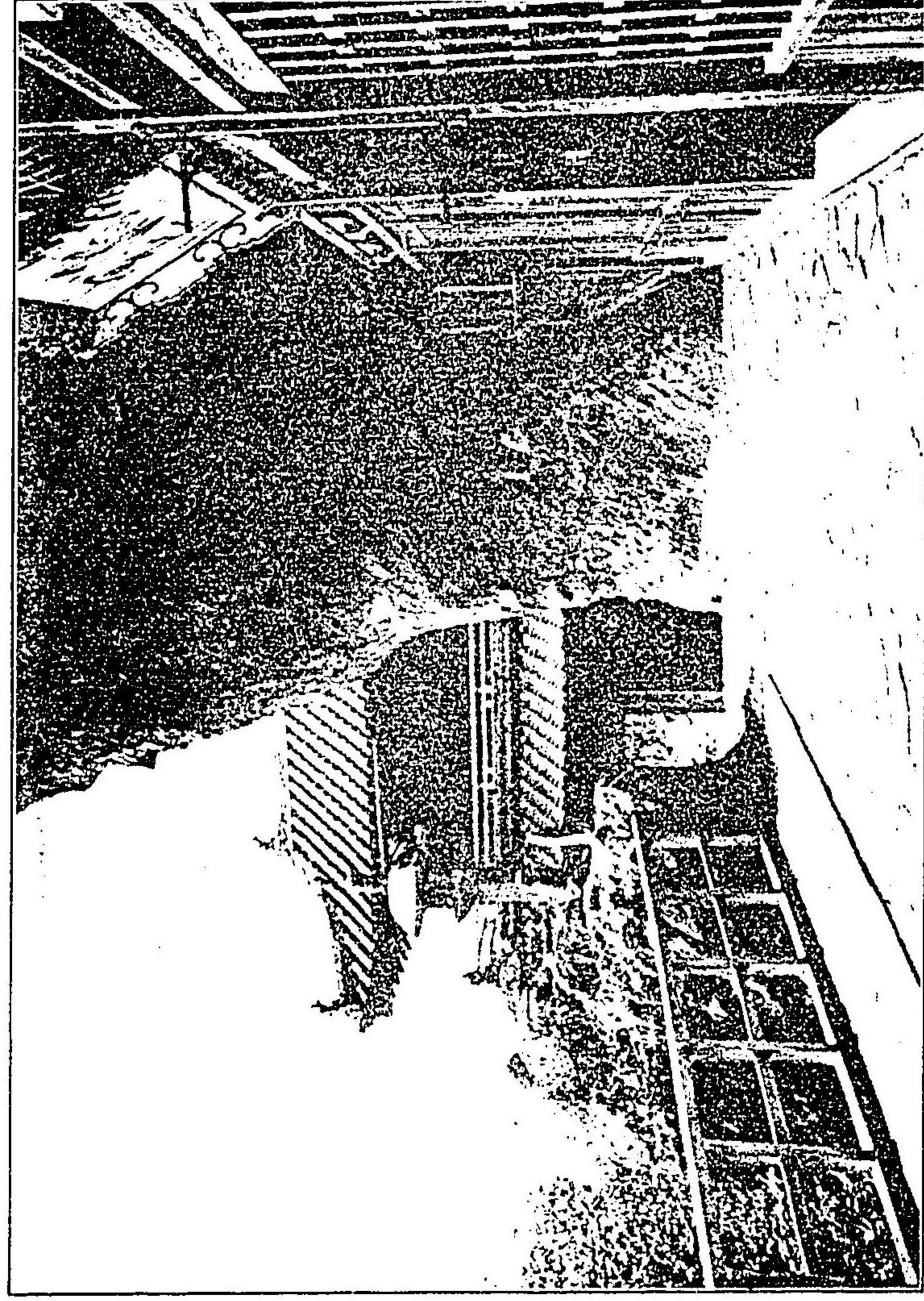
(九)



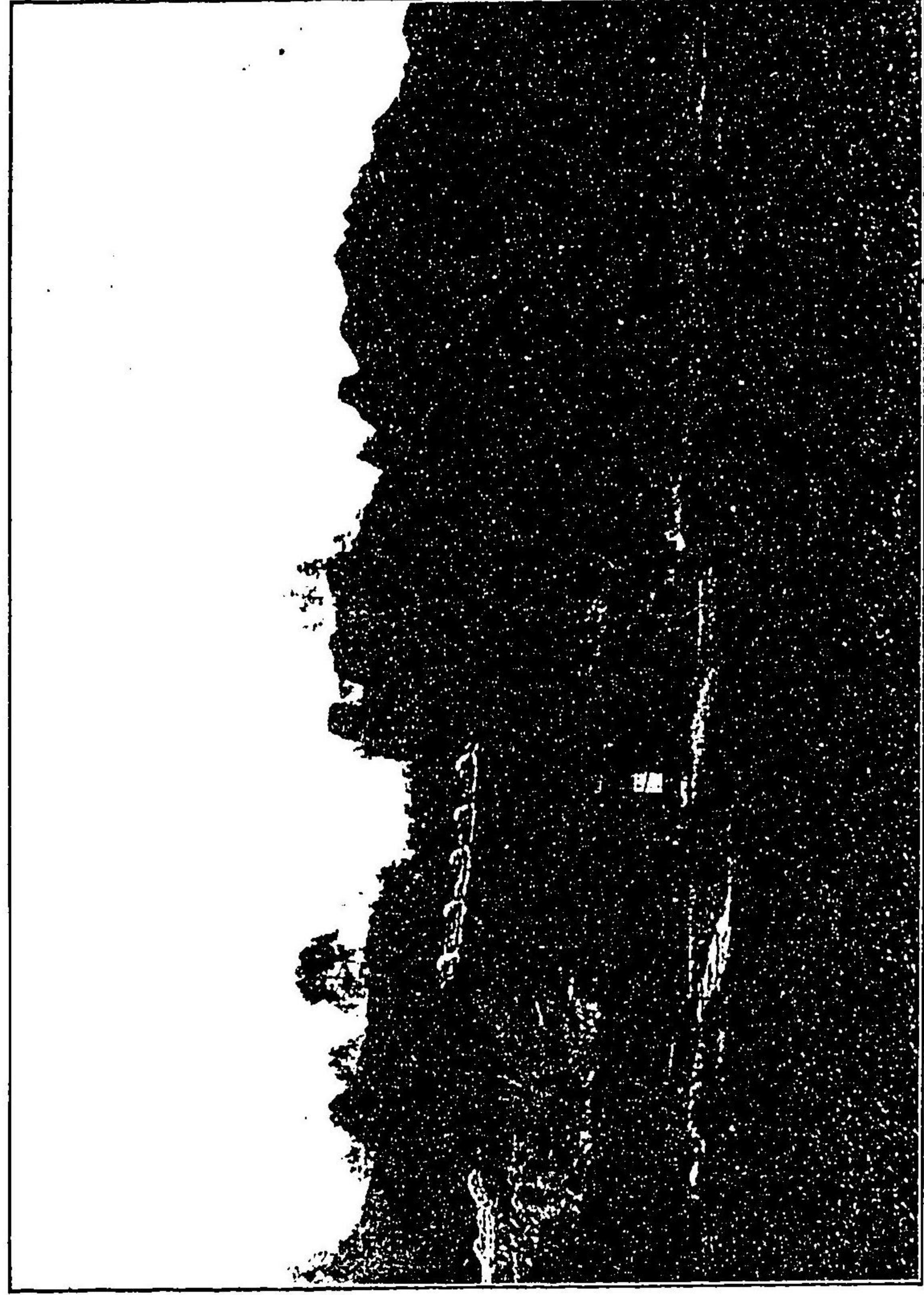
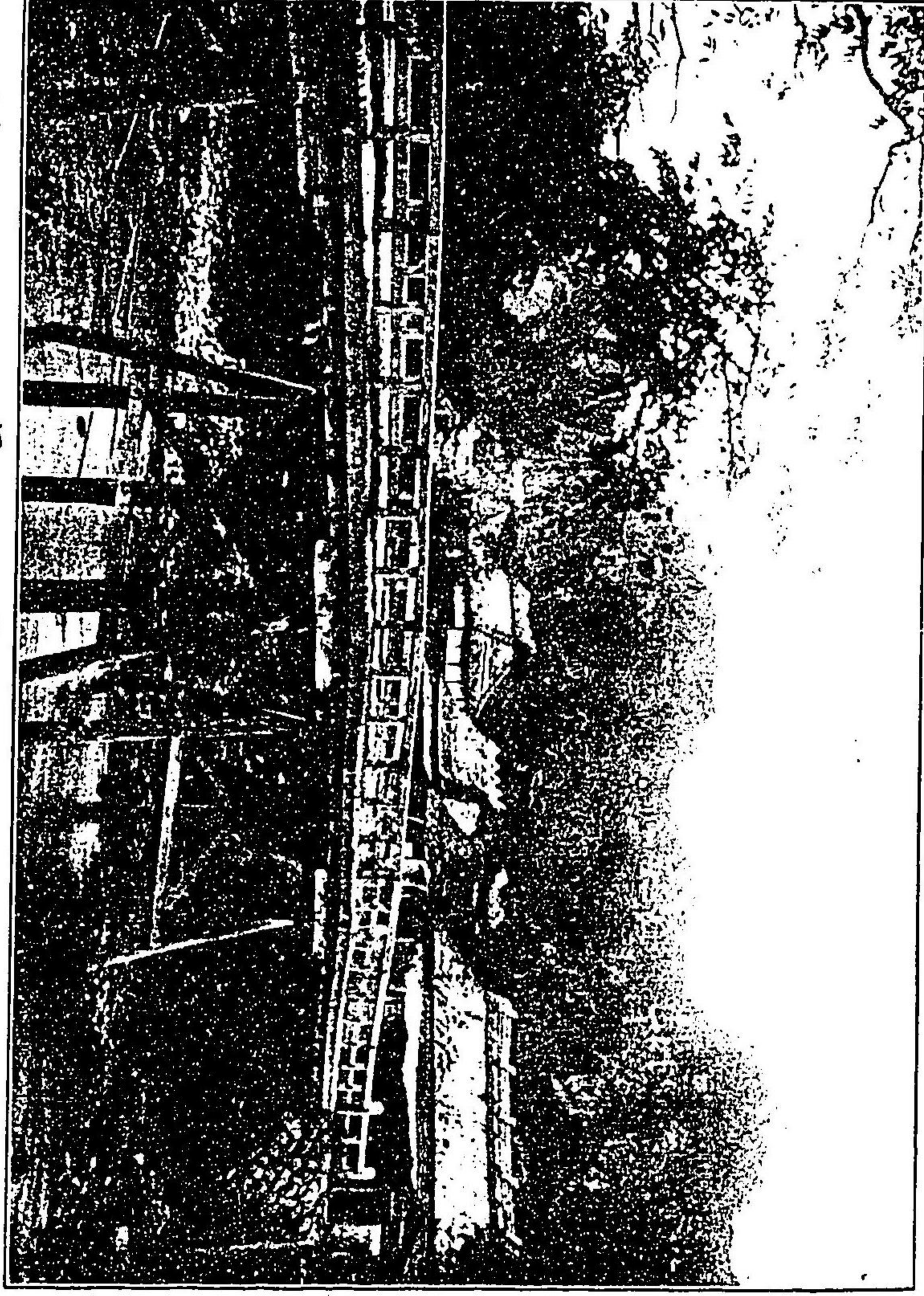
落村の青

(八)

羅漢寺全景 (十一)

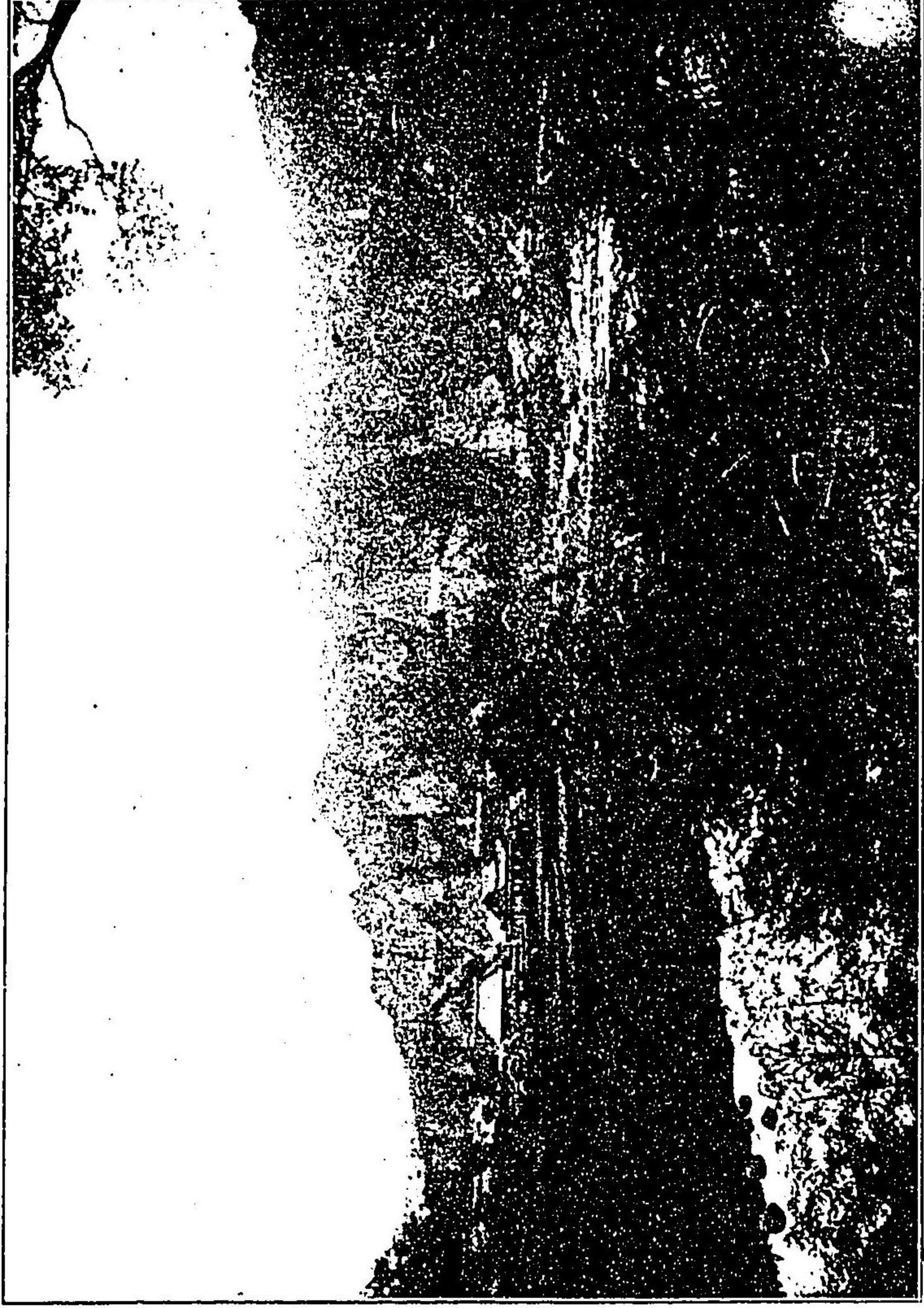
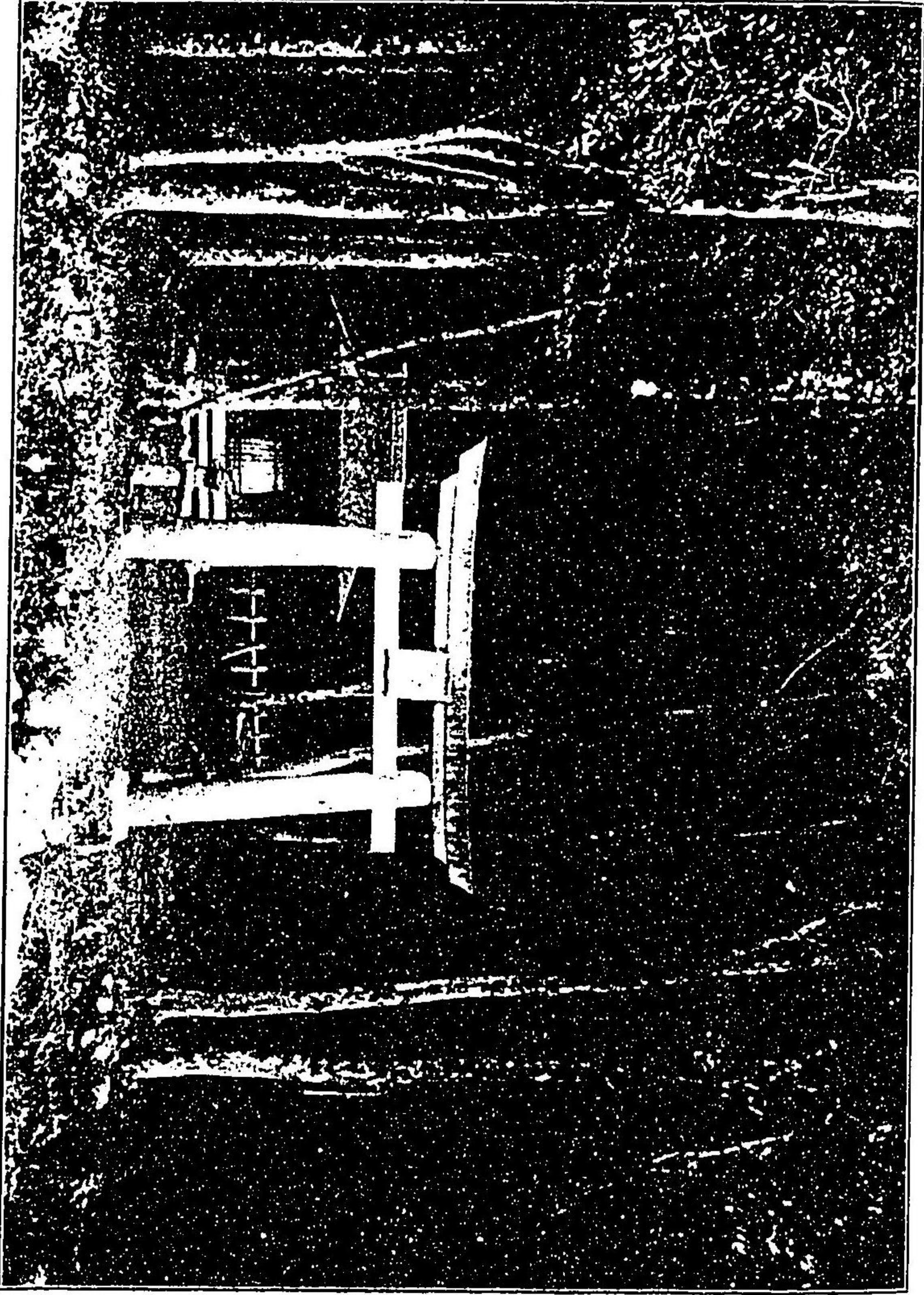


羅漢寺王門卜無漏窟 (十)

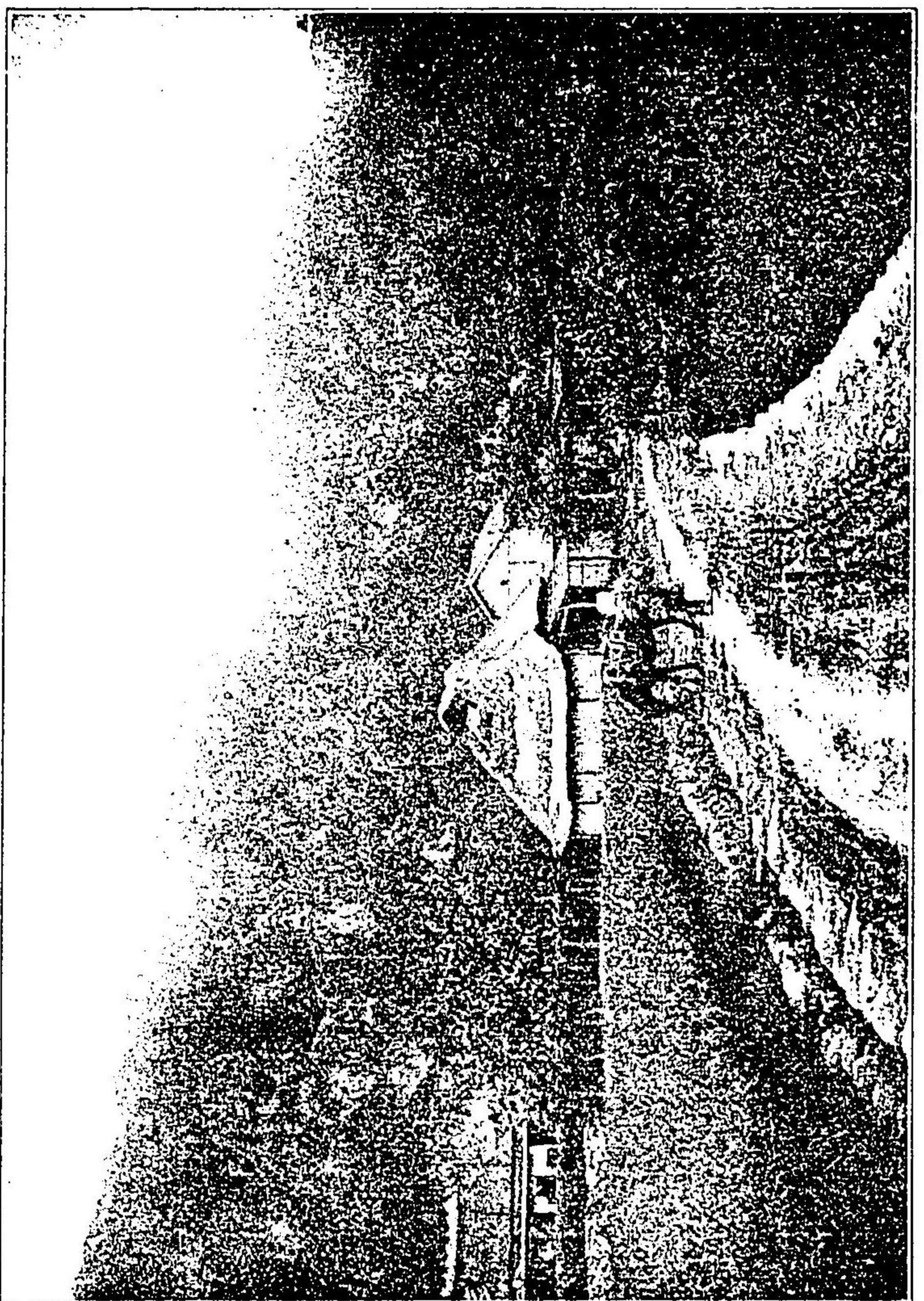


社ノ月日三

(五十)



洲長の木會 (四十)

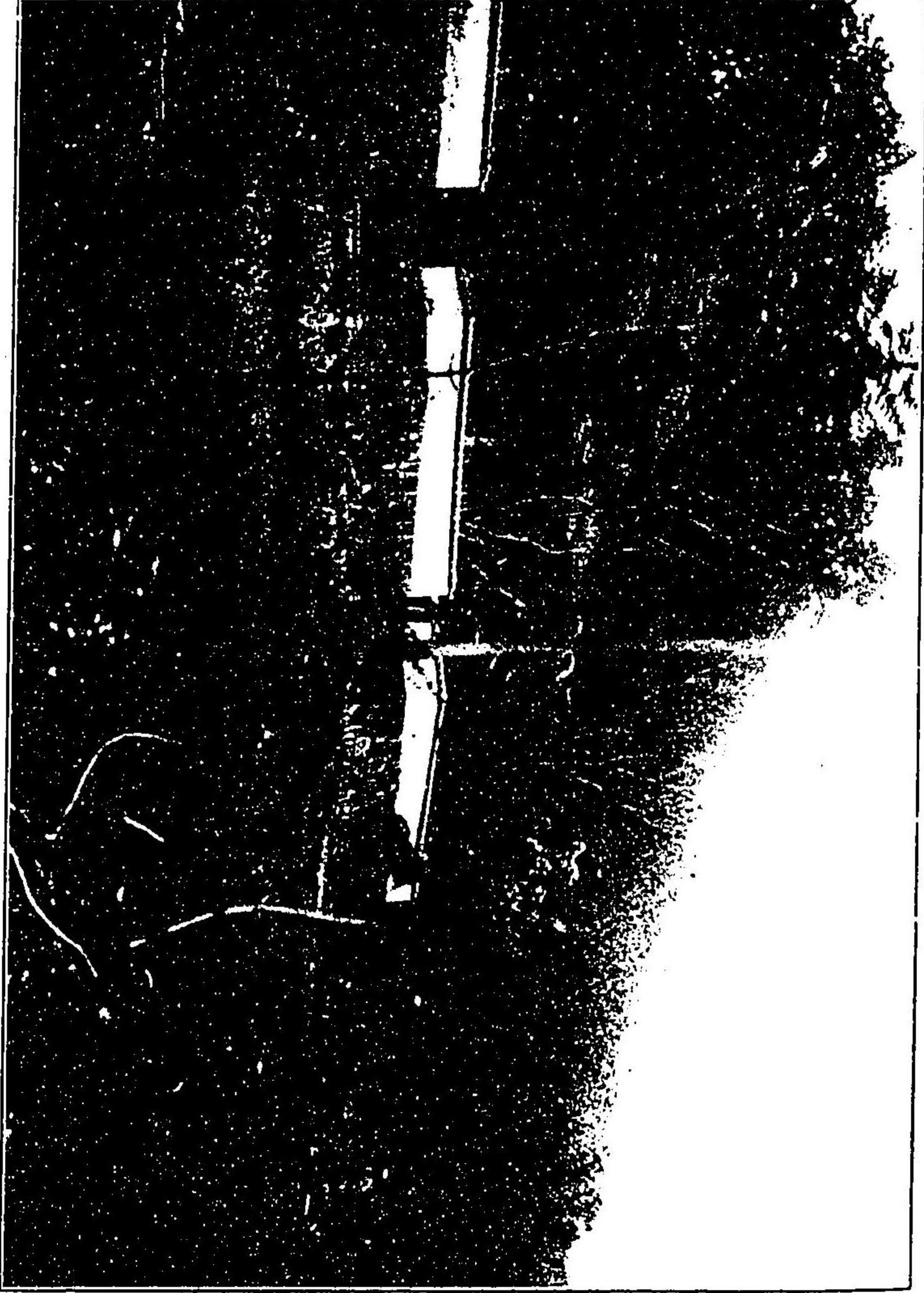




川見北 (九十)

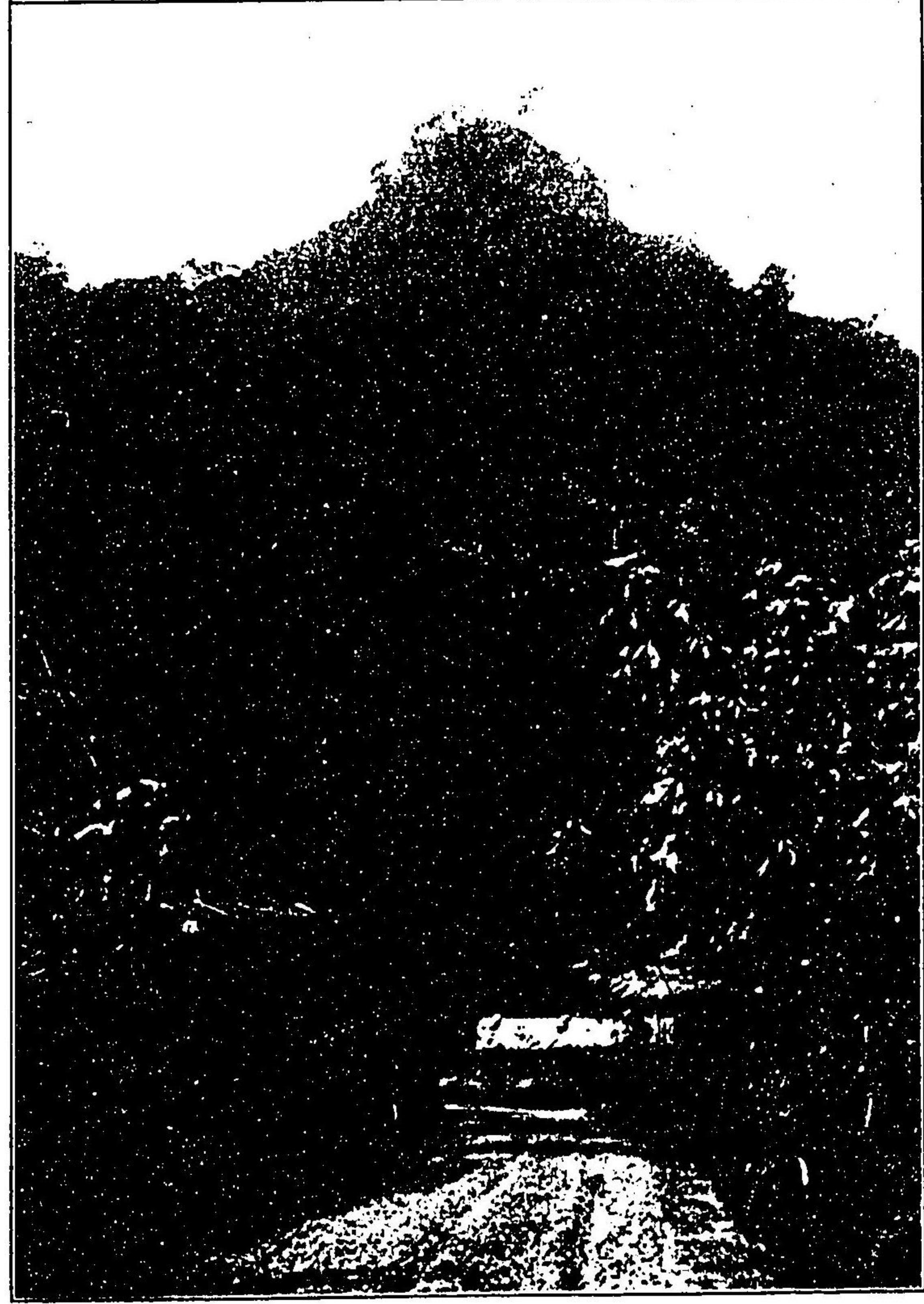


口入林ノ智屈 (八十)

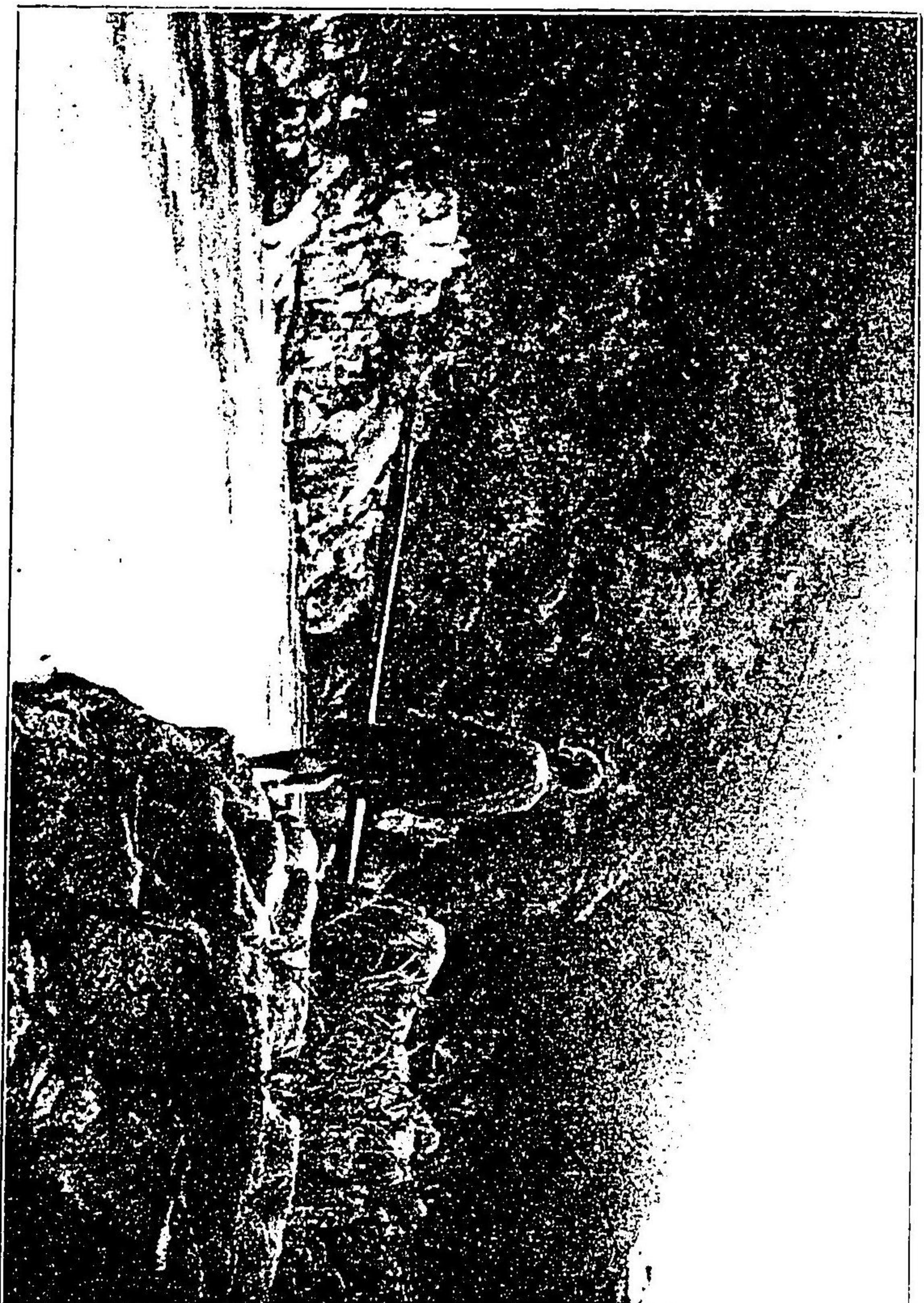


(所ま.せ寓の陽山)寺正善

(一廿)

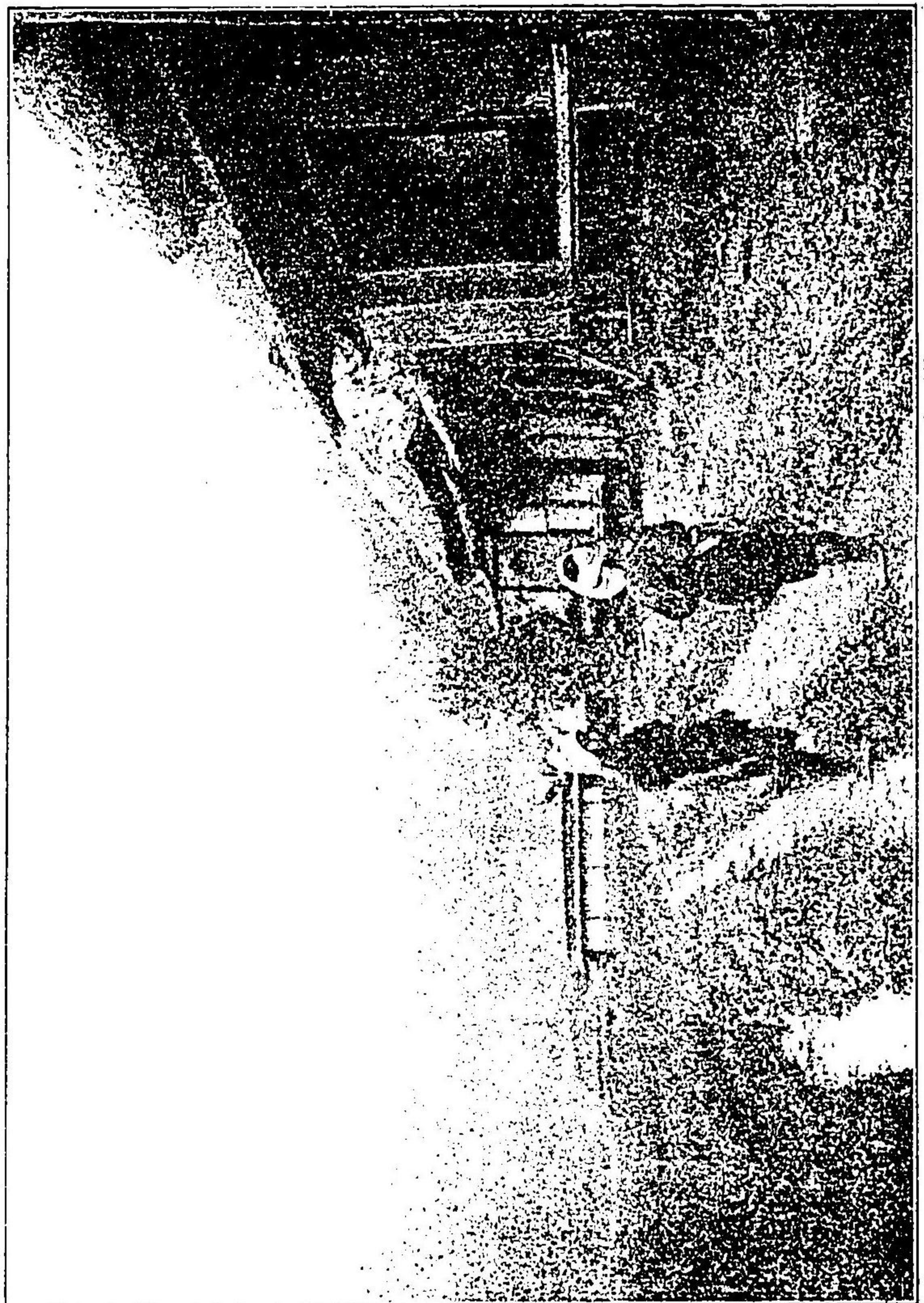


數 屋 大 (十二)



橋ツの坂柿

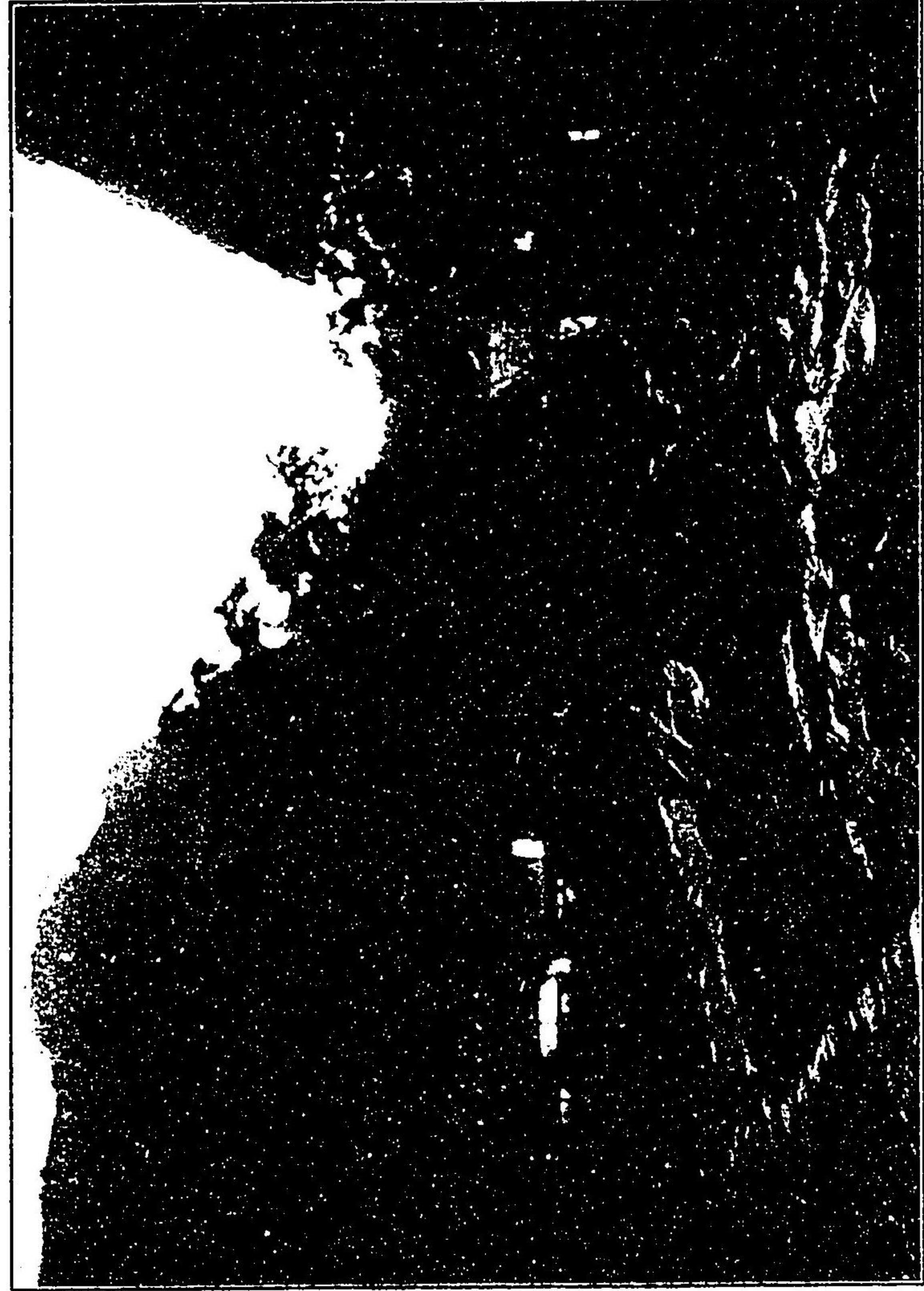
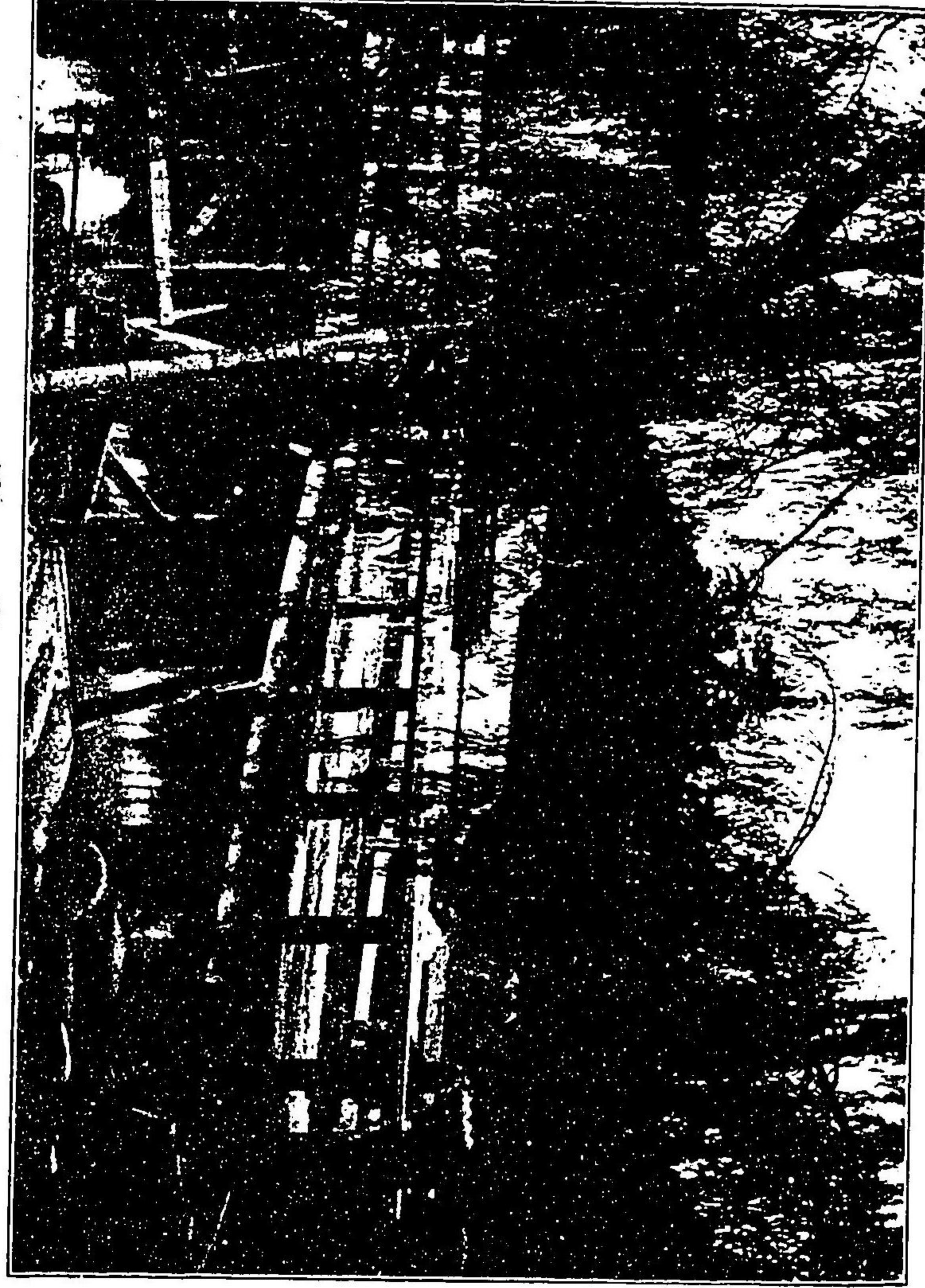
(三廿)



村坂柿 (三廿)

(廿五)

雲興橋

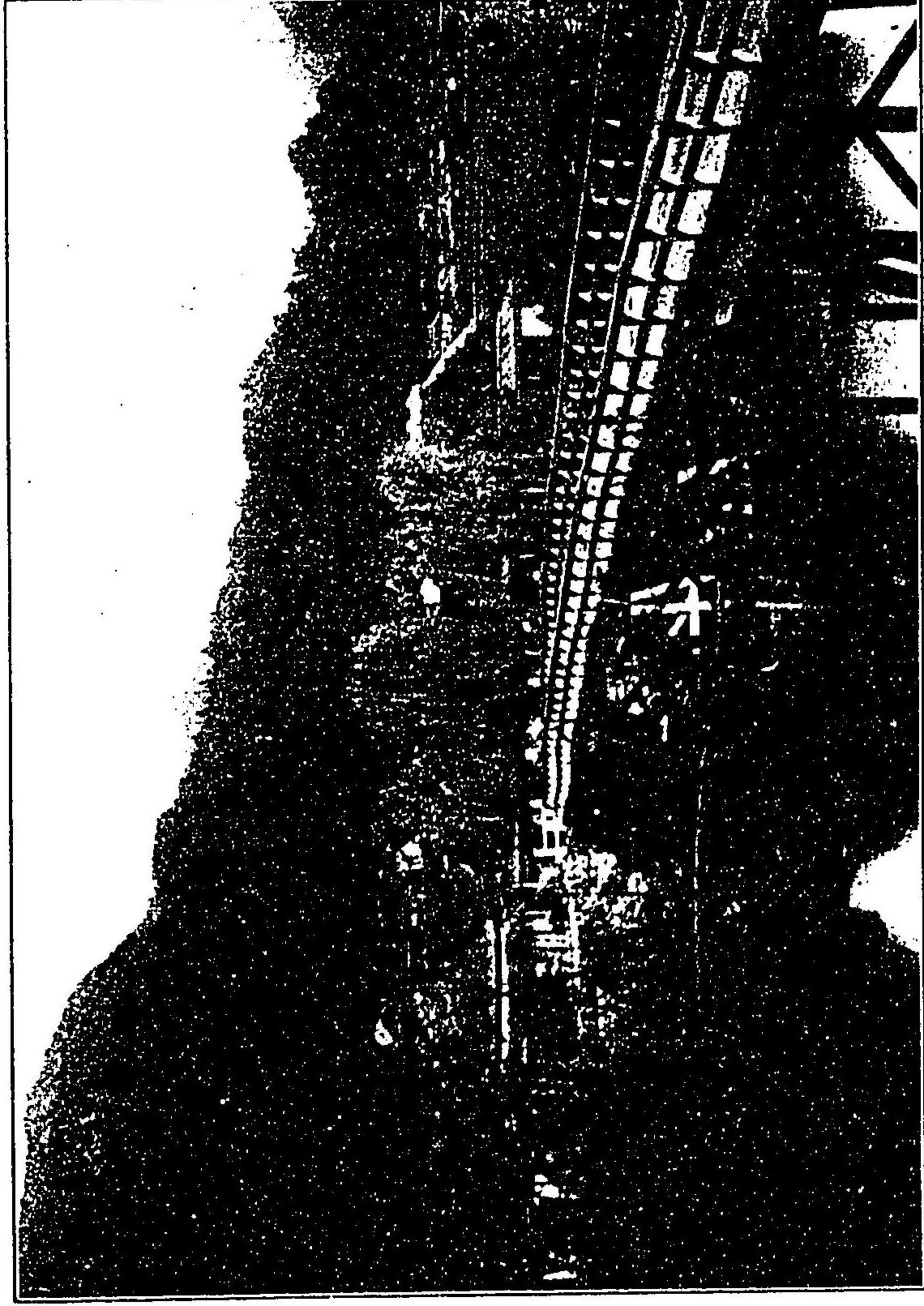
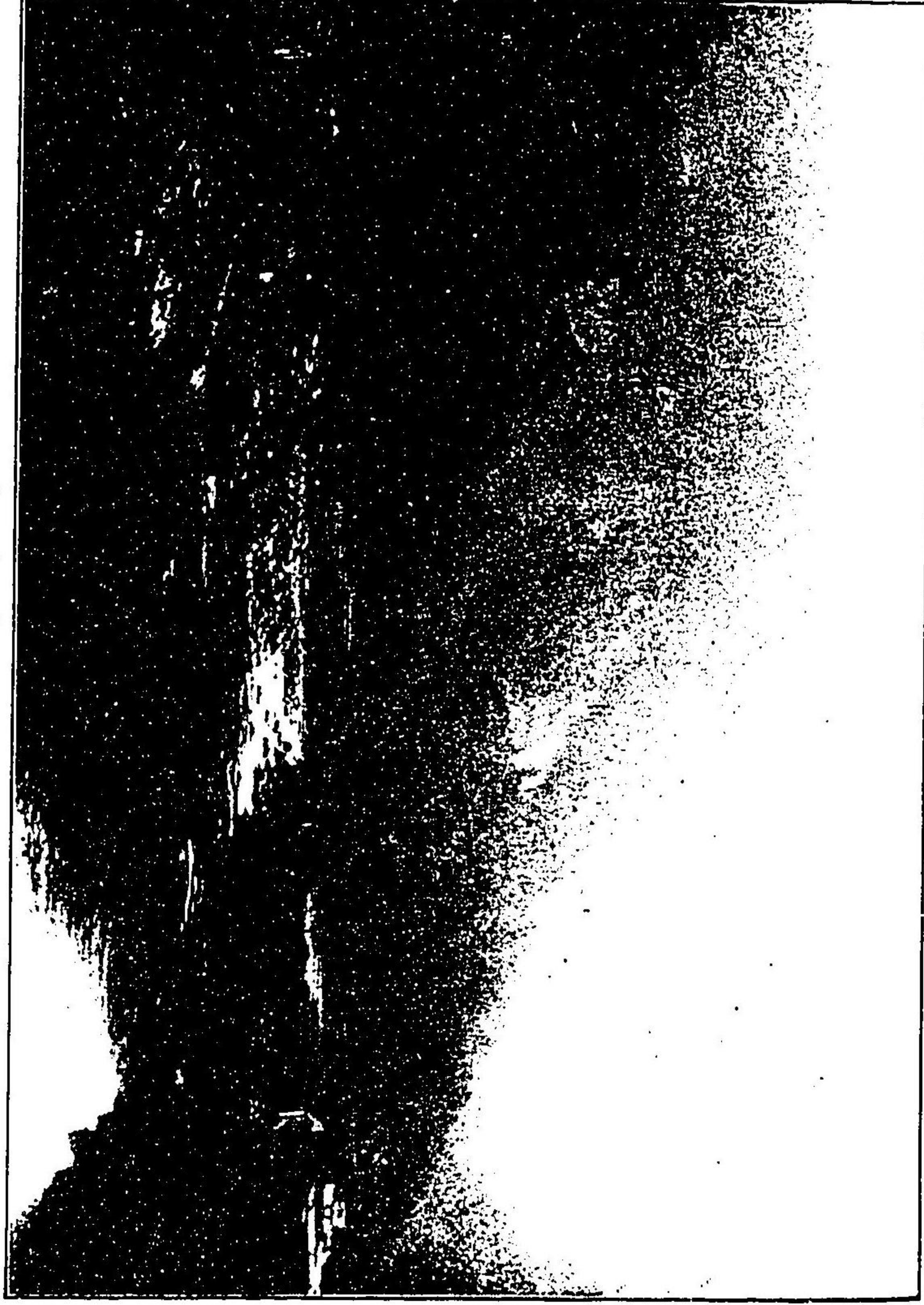


下城山(大鳴村)

(廿四)

山余村郷下

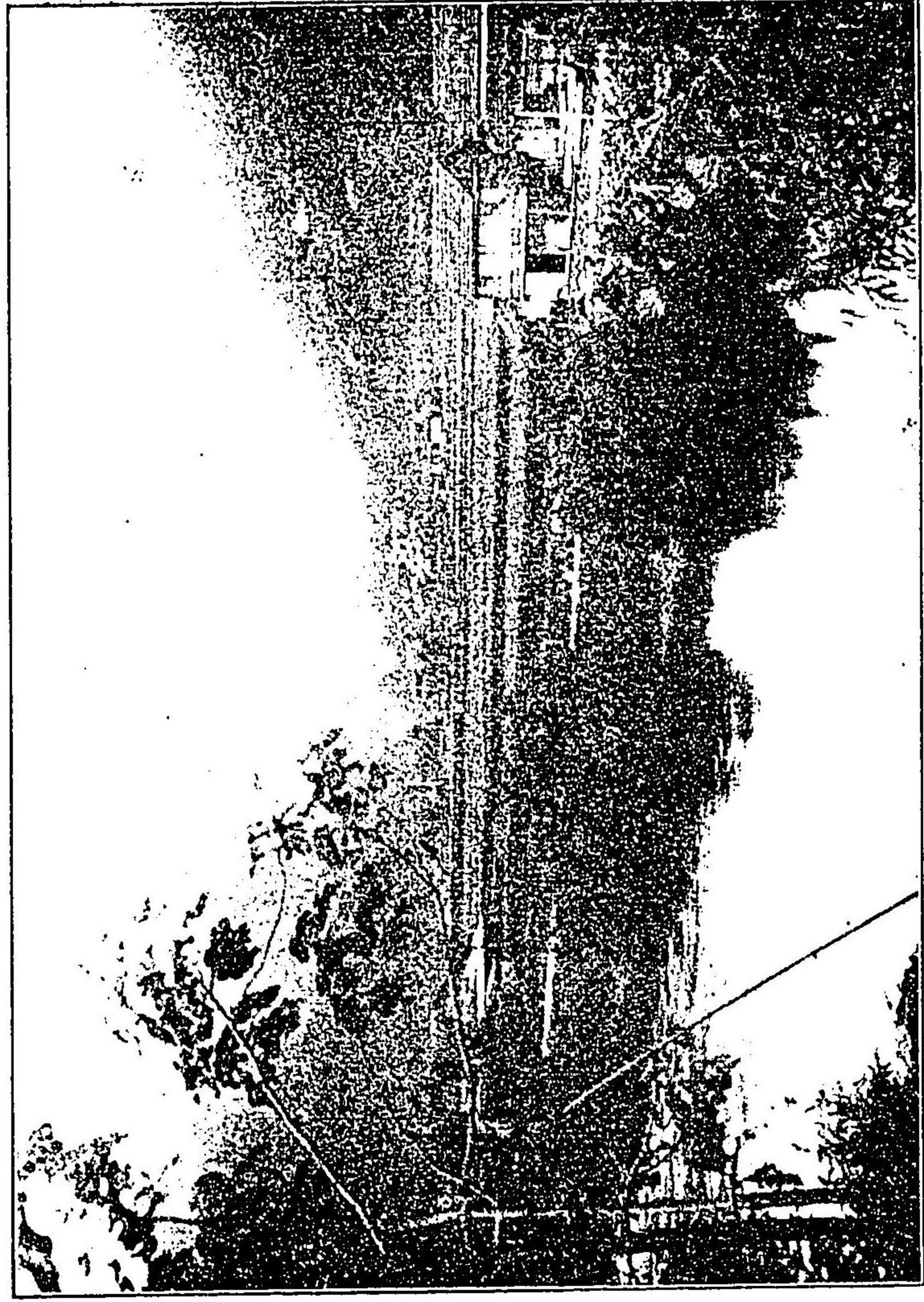
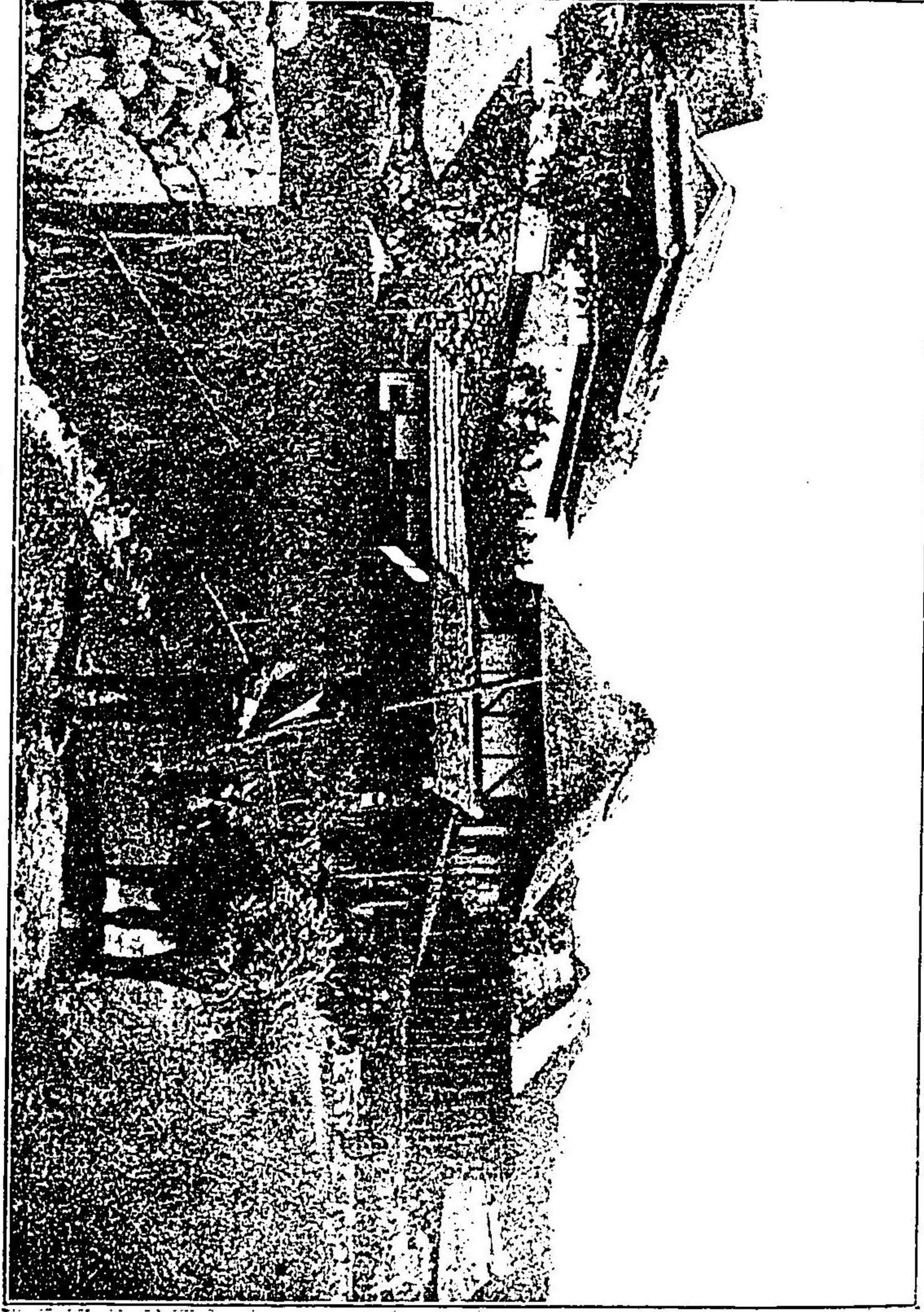
(七廿)



(六廿)

山 種 路

村 園 宮 (九廿)



山 桶 日 (八廿)

(甲一)

一 一 一 一 一



内社 幡入 雲 (十三)

村 會 宇

(三卅)

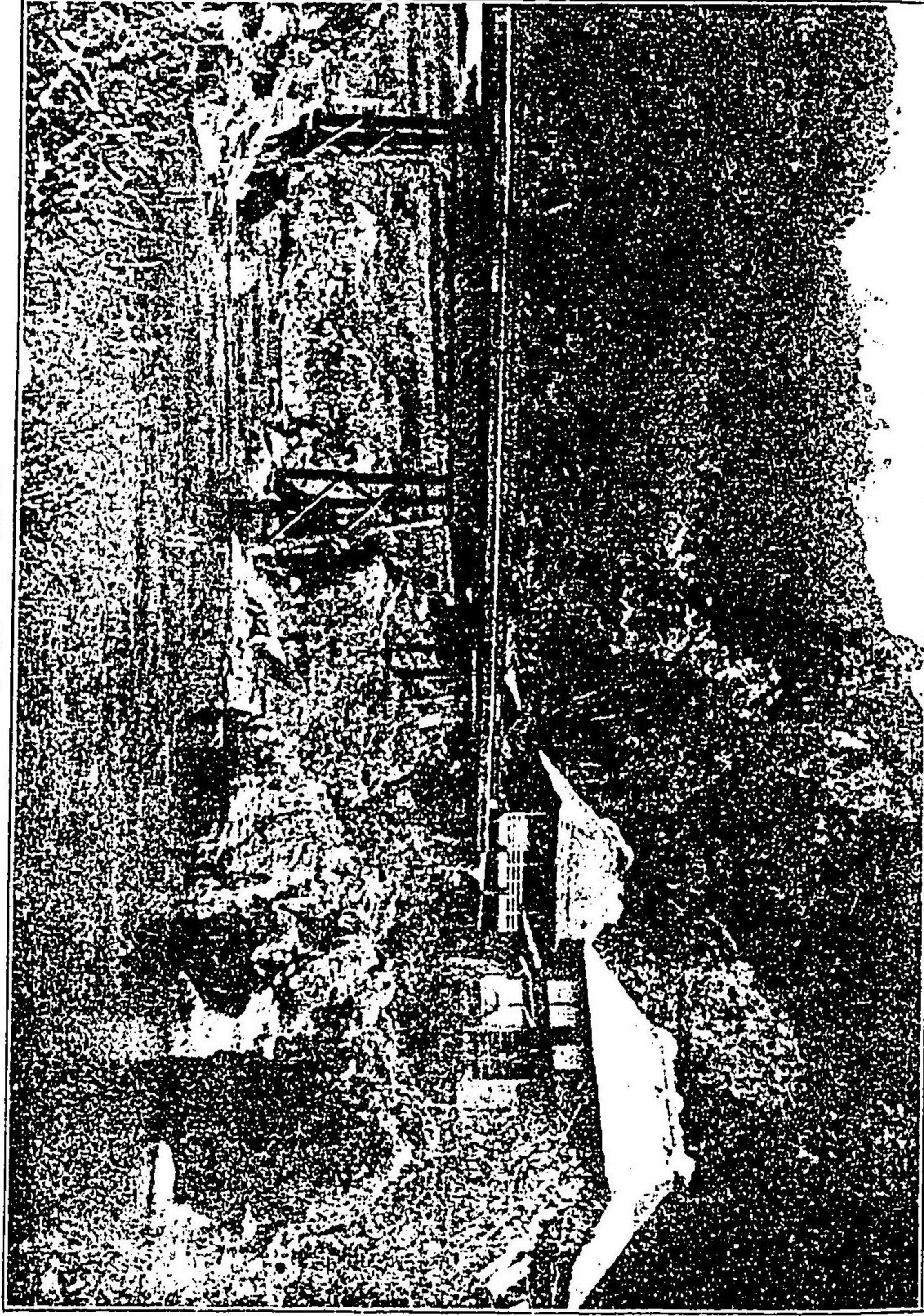


心望を摩中りよ道隣

(二卅)

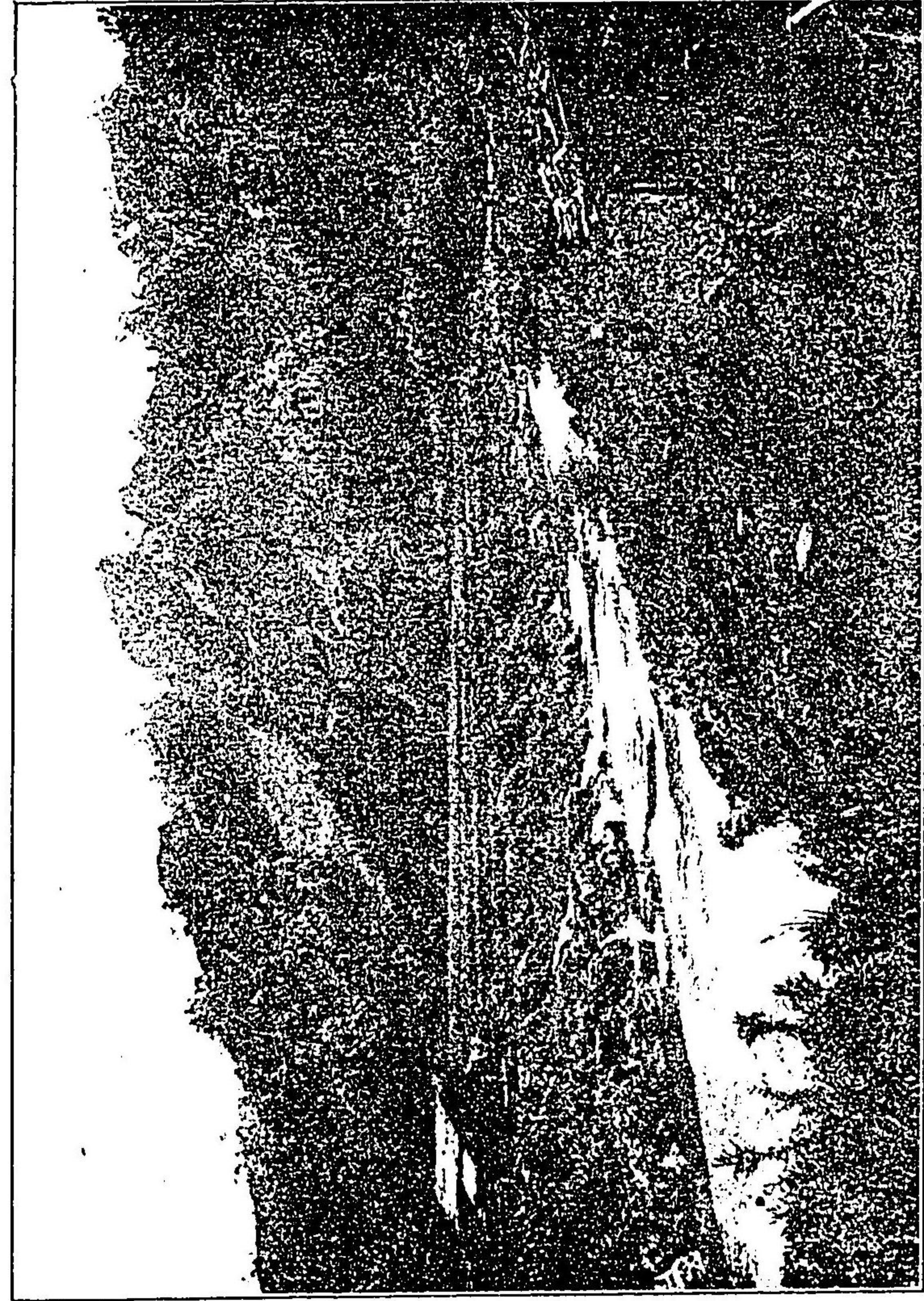






橋陽朝麓山本の日

(五卅)



(四卅)

三

郷

村

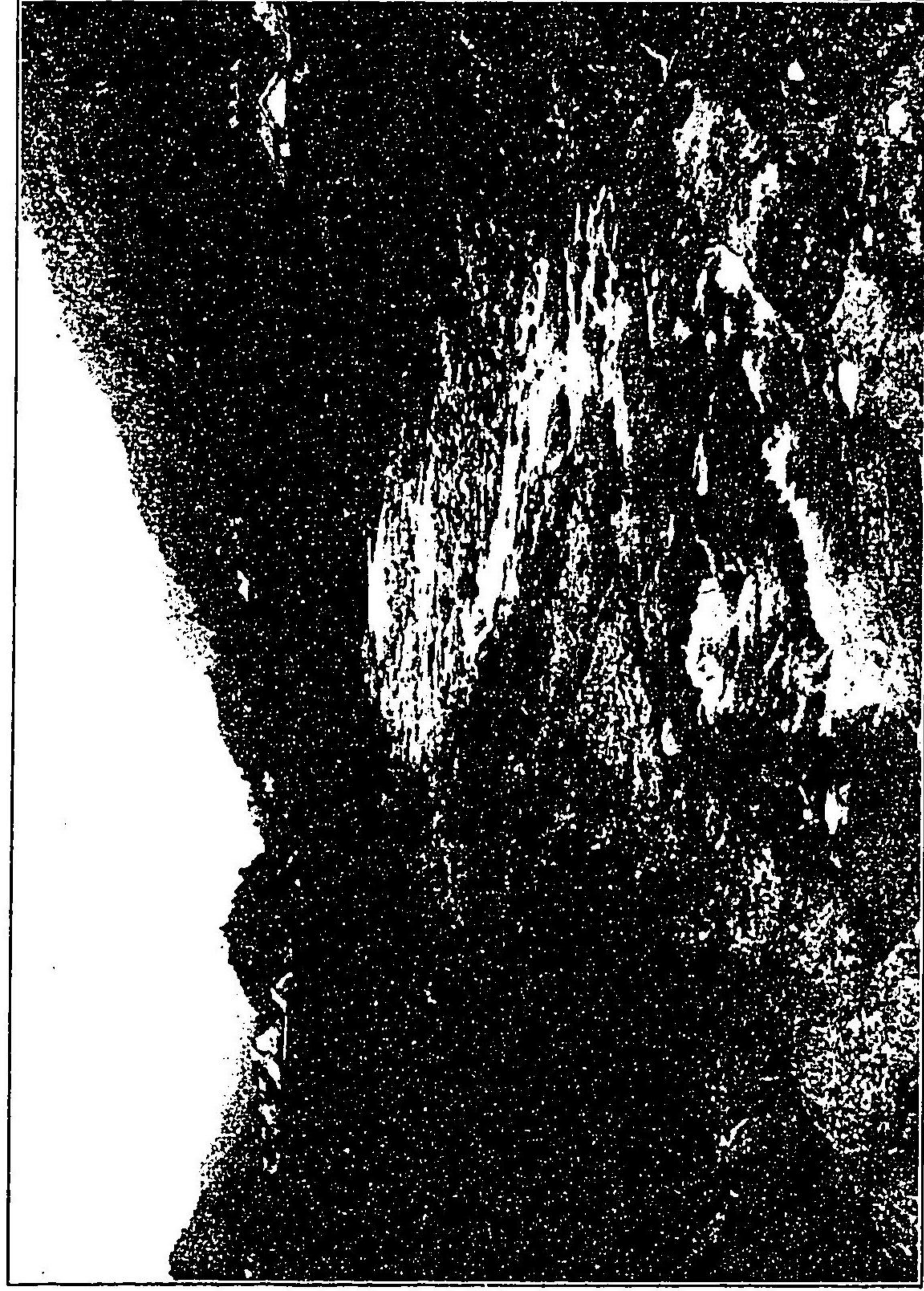
車水の流上川國山

(七冊)



望遠山彦りよ村實守

(六冊)



飛猿

(九卅)



本村念佛橋上流

(八卅)

外 村 谷 毛 (一十四)



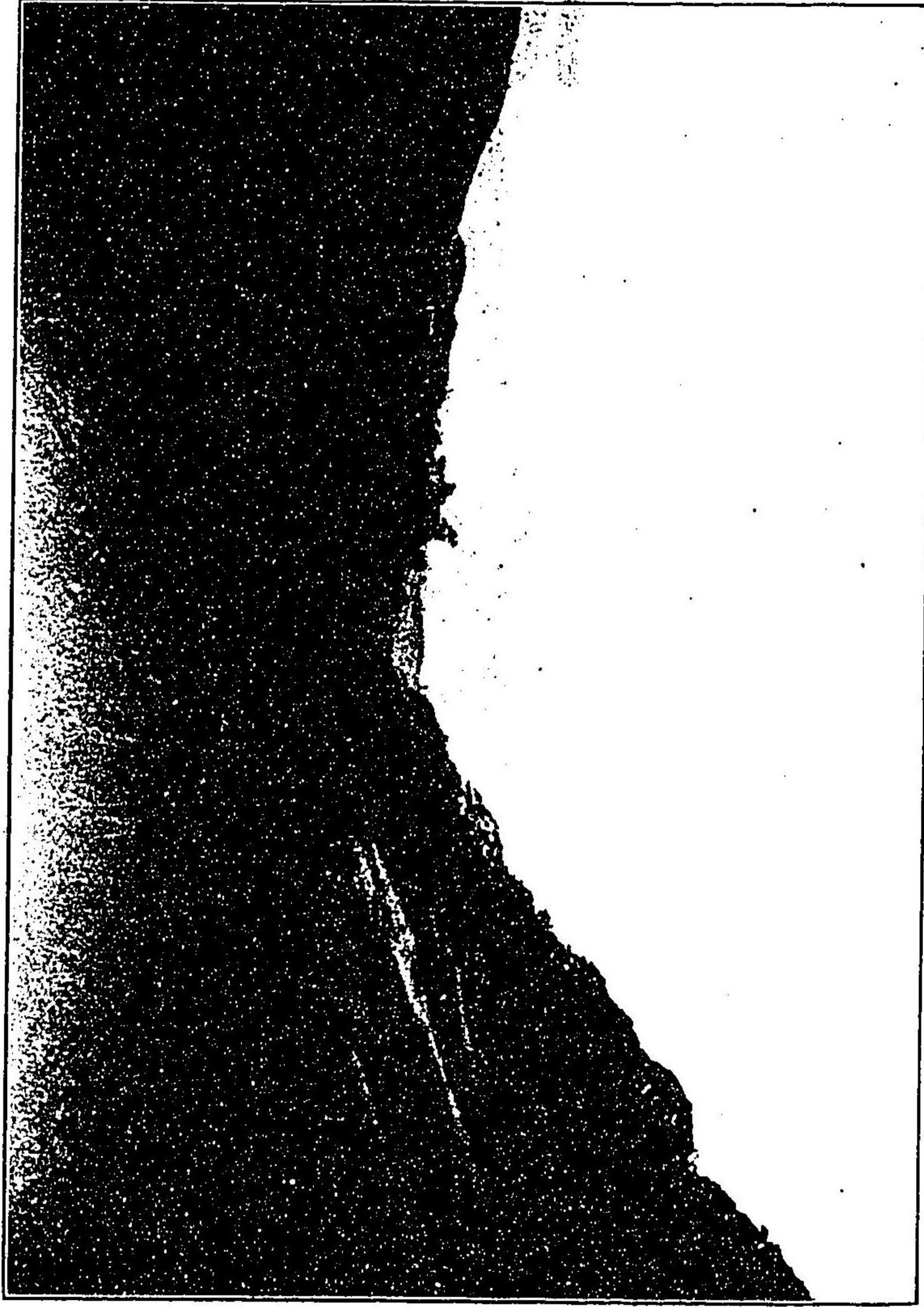
潭 深 の 流 下 泉 鳴 (十四)

源・水・川・國・山 (三十四)



道落の溪裏山彦 (二十四)

宗 師 塾 (五十四)

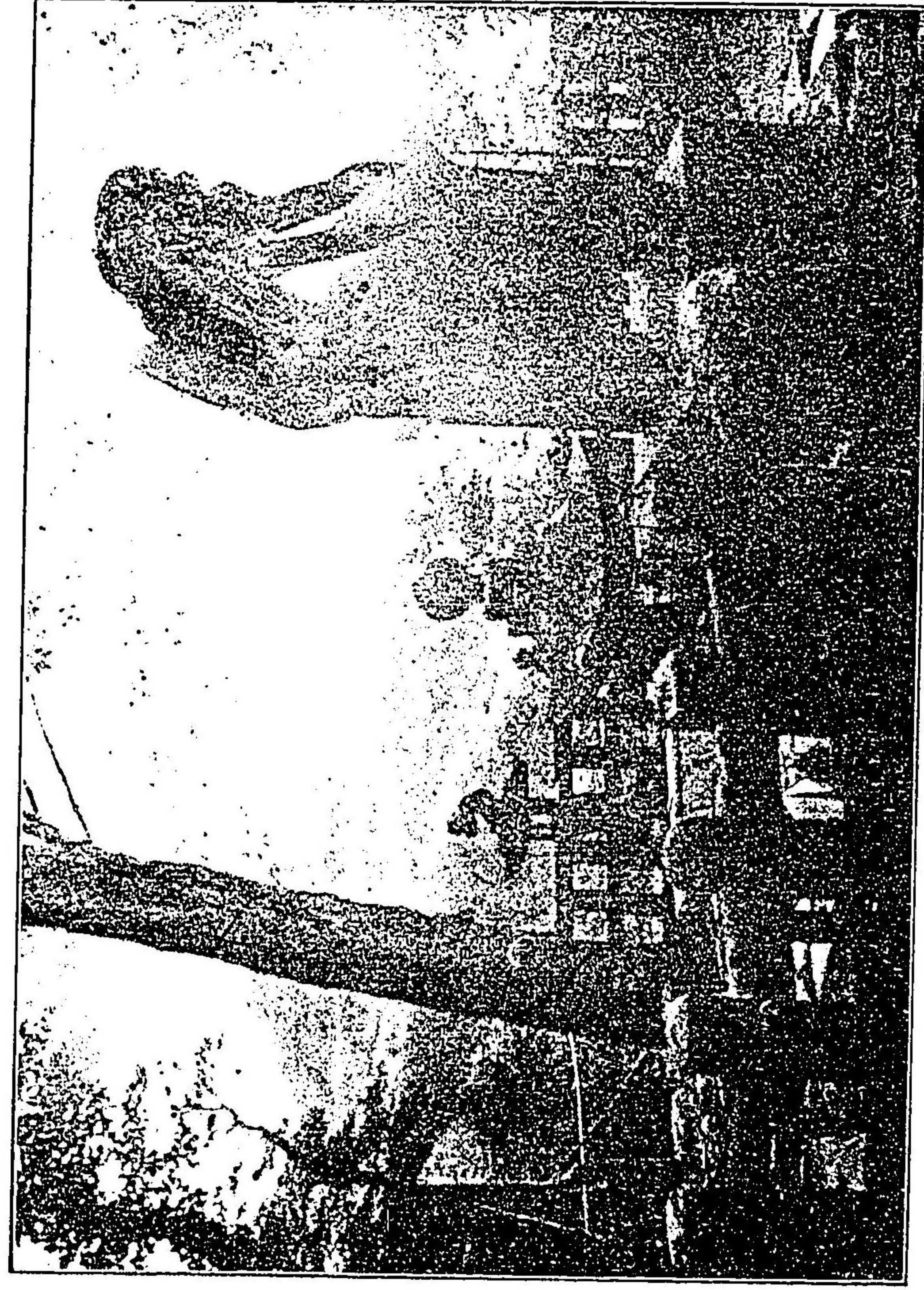


集 高 の 一 山 彦 (四十四)

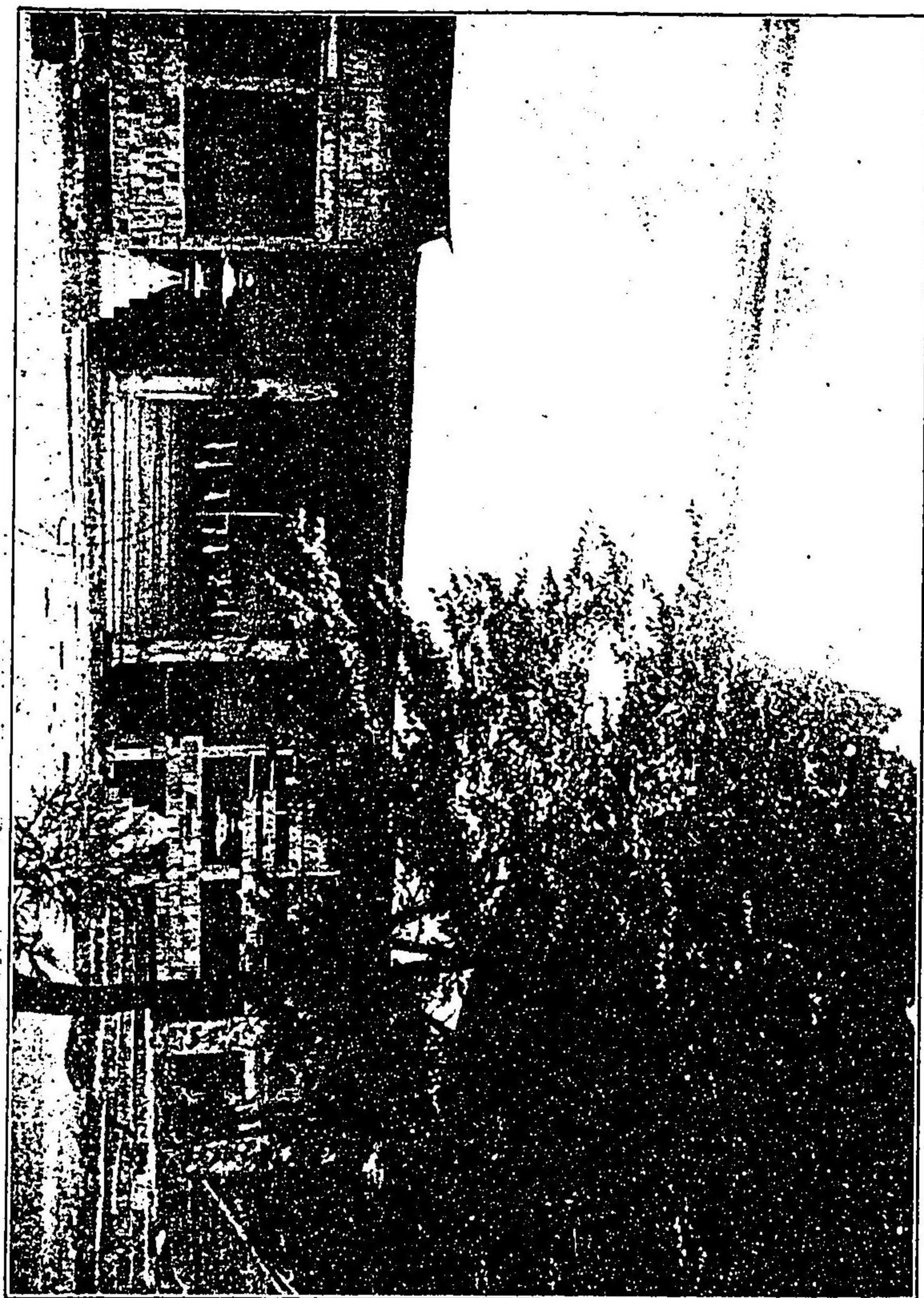




坊 前 豊 (七十四)



口 入 坊 前 豊 (六十四)



堂講山彦英

(九十四)



居鳥銅道本山彦英 (八十四)





### 耶馬溪圖卷記

賴山陽

余嘗讀昔人畫疑其山貌太奇峭恐非天壤  
 間所有畫人一時興到鼓舞其筆墨耳及觀  
 豐耶馬溪乃知造物奇怪畫手亦有寫不到  
 者也歲戊寅遊鎮西過海南望彥山於雲際  
 已覺其有異矣既經二肥薩隅還寓豐後隈  
 邑臘月五日入豐前遇一水北來蓋發源彥  
 山者沿焉而東數十里昏黑覺左右峰巒皆

二  
非凡山溪相迫處，鑿山腹爲道，又穿牖取明，余買炬以入，遇牖，窺見月在溪水朗然，宿民家，翌大霧待霽，乃發復沿溪東，愈東愈奇，群峯夾水攢竦，如春筍矗出，有土戴石者，石挾土者，全石者，全石破裂成洞穴者，兩石相鬪，其一欲仆者，石數層累成夏雲狀者，而樹自石罅橫生，縱生倒生而上指叢生蔽石，如與石爭勢而欲勝之，石又自樹中奮躍而出，而石陰皆苔紫綠相間，或沒石半面，或沒全身，

又如援樹攻石者，大抵峰勢石皴，如董巨刻意圖，時窮冬，多老木葉脫，槎牙瘦古，皆倪黃筆法，而苔枯蹙蒼渴者，王叔明也，古人筆墨不吾欺也，至柿阪，憩孤店，店面石壁數丈，飛泉懸焉，仰則更有高峯，不知其幾十丈，余急釋所佩酒瓢，命爨之，竈突蕭然，會一獵師新獲豪豬，割而煮之，肪脆如水，連引數大白，又行，溪又數曲，隨峰勢上下，或激雷噴雪，或渟膏凝碧，峰影爲之，或碎或全，似水妬山而亂

其影也。至屈智林溪稍開，有小村，過一橋，自此行溪北，開者益開，數十里，詣古城，正行寺，寺主舍公，余故人，竢余既久，余先詫曰：君州山水大奇，舍公曰：更有奇者，使子目之。居二日，與舍公南行，行田塍間，至仙人巖，巖石突立山頂，舍公指示余，余不甚賞，其明又經田塍，至羅漢寺，寺据山，鑿山作洞壑，橋梁狀安五百像，余復不甚賞，宿寺前，逆旅挑燈而談，余曰：山不得水，不生動，石不得樹，不蒼潤，所

四

以余賞馬溪，而不賞仙巖，至於羅漢，則人工耳，然皆馬溪之支裔矣。且馬溪溪山相迫，無田塍礙目，而其路坦夷，真可遊也。然爲二豐通道，過者慣看，况公等生長此土，宜不見其奇也。余則再遊不可期，將復溯之，以諦觀之。舍公奮袂與偕，早發，過一水，北出馬溪口，峰容樹色，忽覺迥別，自淺入深，自平入奇，泝前數曲者，一曲奇於一曲，比諸前遊，更可喜也。復至絕壁下孤店，店主識余面，驚曰：是前

五

喫猪客也、有何幹、再來此耶、余曰、欲看山耳、  
 曰、山有何好看、吾不禁子看也、遂席溪畔、與  
 含公傾瓢一醉、宿山寺、明雨、借轎西還、山峯  
 得雨、皆變幻作態、或前以爲一山者、分成數  
 峯、如群仙駢肩、露其半身、萬松振鬣、鼓濤於  
 雲中、又如廿五菩薩奏樂而至也、還至屈智  
 林、含公慮吾酒盡、預戒家僮、馱樽於馬來、取  
 醉、宿阿保村、翌歸寺、又三日辭去、踰海東歸  
 自海雲中、顧望鎮西山岳、其屬豐前者、皆有

別態、彥山其尤大者、耶馬山脈水理、蓋自彥  
 山發、故獨絕耳、余足跡幾半海內、弱冠東遊、  
 得妙義山以爲無雙、今馬溪百里、如妙義者、  
 不知幾十峰、謂之海內第一、或不誣也、己卯  
 之臘、肱橐得爾時寫山粉本數紙、戲以意接  
 屬之、爲橫長一卷、又記其由、併錄所得詩九  
 首、余詩文笨拙、不足狀其髣髴、况畫乎、後有  
 能者如董巨倪黃之流者、踢其境而補成之、  
 庶幾不負此山水、然目此山水、爲海內第一

者、乃自賴子成始、圖爲含公取去、備後故友  
橋元吉亦好山水、請爲寫一本、諾而未果、今  
茲已丑、護母至尾路、畱旬日、乃踐前約、而舊  
圖不在、尋諸胸臆、冥搜默運、覺山精水神、或  
來助我、遂能成此、屈指已十二年矣、憶當時  
歸帆外、豐山依依如相送者、今猶在目中、也、

### 乍序申之候

一 この耶馬溪の寫眞帖は、昨年九月予が親しく撮影せるを、今回一冊に蒐集したるものに候、これに附とたる文字は、東海、畿内、山陽、南海、四海、山陰諸道の一部を過ぎ、東山道を経て歸京せる、途上よりの通信を一丸と化したるもの、題名を單に耶馬溪と命じたるは、着眼點を重に其地方に注げるよりにて候、されば關の西にある山光水色は、これによりて略ぼ其一斑を知り得らるべくと存す候。

一 この書の標題なる「耶馬溪」の三字は、頼山陽の眞蹟を復寫せり、同溪山は全く山陽の筆によりて、其名を表自せられしことは、吾も人も異議無きものと自信し、斯くは櫻木に命と彫りつけたる儀に候。  
一 またこの書を世に出し候につきては、諸方より懇切なる書簡を賜はりたるが多き中に、末松男爵の「拜啓先口愚文差出置候分は、御受

了と奉存候、猶御咄しの舊作見付候間、ツマらぬながら左に録し候、  
 下耶馬溪、危巖怪石幾雲根、路盡時々過洞門、習々谷風殊不惡、斜陽淺  
 水十三邨、有之、また耶馬溪城井村の人新貝撫石氏が、拜啓未得拜  
 眉候へ共、貴下筆硯益々御清適之段奉賀候、陳者去秋は弊地觀勝之  
 爲態々御來遊被成下溪山之風光を江湖へ御紹介之勞を被爲採、御  
 周旋被成下候段感銘に不堪候、貴下御來遊之當時折悪しく他出仕  
 居、御拜眉之機に不接遺憾斯事に奉存候、爾來貴下監督の下に成る  
 太陽誌其他に於て、御撮影之寫眞并紀行文拜見仕り、當初頼翁に繼  
 て中興紹介者を以て任ぜらるる丈ありて、寫眞に文に溪山風光御  
 發揚を被勉、溪山の名聲をして、一層天下に高からしめんとの筆蹟  
 相見、溪中の者貴下の厚意を感謝不致は無之候、身溪山に住し日々  
 其風光に接せる生等、敢て溪山之爲に不計、實に汗顔の至に不堪候、  
 尙爾後一層溪山之爲御協力之程伏而奉懇願候、從て近々耶馬溪な

る高著御發刊被爲在候由、就而は頃日太陽誌其他に於て拜見仕候  
 寫眞版并紀行文に就て一二卑見申上候間、不惡御了承被下度願上  
 候、如仰溪山之涵養を多少受けし詩人多々有之申候、故人には廣瀬  
 淡窓旭窓青邨林外秋月橋門を始、五岳上人千原夕田長三州、存命者  
 には秋月天放谷口藍田吉嗣拜山等有之、素人角力之碑赤面之至に  
 御座候、然るに頼翁之碑は先年より思立居候も經濟之都合等にて、  
 未だ設立之運に不至居候、毛谷村六助之跡無之に候はず、現に昨春  
 菫墓石之欠損せるを憂ひて、新紀念碑を菫墓石之上に相建申候、其  
 眞跡に至りては、蹠躑と致て存不申候、御承知さは存候へ共、青村之  
 洞は往年越後高田之浪人在藩之折、同輩に殺害を加へ、當地に逃來  
 り、羅漢寺徒弟と相成、佛心發起、諸人慈善之爲、遂に同巖窟を獨力開  
 鑿致候ものにて、其工事中、曩の殺害うけし子弟復讐之爲に參り候  
 も、其佛心發起、美事に營めるを見て、遂に墨染之片袖を裂きて、遺恨

を雪けりき爲し、是亦數十ヶ月足を止めて、協力開通致させ候由目  
 際に残り、同洞門上に自刻之地蔵有之申候、同人釋之禪海上人申  
 候、中學世界第一號畫版中に、耶馬溪三勝之内柿坂村の寺院頼山陽  
 宿泊せし寺院云々は、案内者よりの誤聞なりしならん存候、同寺  
 院は妙泉寺と申頼翁には毫も關係無之、同寺院之手前なる善正寺  
 と申す頼翁之旬餘宿泊致せし處に御座候間、御正誤不相成は貴下  
 名聲に關し可申やさも被考候、今回御來遊に付案内者其人を得ざ  
 りじやに、乍失禮寫眞等に由り推察仕候、御承知之通り當地觀勝は  
 其位地如何に依りて、大に良否を現出し、往々觀遊者二人曳人力車  
 にて往復致候も、決して其眞美を何邊にも難求儀と存候、先年田能  
 村直入翁觀勝する事五旬稱や其眞を得るに被申候、左に乍失禮觀  
 勝好位地を試に列記可仕、流石の貴下でさへ此の好位地觀風被致  
 ざりじならむと推察罷在候、

一 風智林之全景は河向小友田より望むべく、同五瀧は三尾母より、  
 小友田一龍松は三尾母より眺望すべし、  
 一 風智林より柿坂に至る途中俗稱テイドカ岩屋は、柿坂方向より  
 眺望すべく、且つ同所は菫山塞の古跡に御座候、  
 一 柿坂の風致は木道には無之河岸に拙て、同所より前岸を仰見す  
 る山水を指すものに御座候、  
 一 柿坂はづれより左折玖珠郡に達する由道あり、二里餘に於て山  
 容奇々實に壯絶快絶之趣を有せる溪に至る、同所は通稱深瀬溪と  
 申、明治十八九年之頃發見致せる新景地也、此地入之を稱して新  
 耶馬溪と申候、  
 右に列擧せるは唯其一部分に不過候、如斯位地次第有之、失禮の申  
 分には候へ共、恐くは此位地御觀勝被爲遊ざりしならん存候、  
 就ては貴下寫眞匣中之物とならざる部分も多々可有之と奉存候

に付、今一應御閑暇之節御來遊被下度、その節は乍失禮生御前尋可  
 申上候、如此願上候、高著耶馬溪全部を拜見も不仕、彼是之旨相挿候  
 無禮の段多謝々々、御出版に誤謬なからむ様さの微意に出で候儀  
 に有之、不惡御了承之程奉願上候、時下嚴寒之候、御自愛被遊、斯道之  
 爲御盡力之程企望に不堪候、いづれ後日高著拜見之上亦々卑見可  
 申上候、先は貴意何度如此に候敬具、さこれあり、厚意感謝の至りに  
 不堪、予はこの深切なる好箇の案内者を得たるを喜び申候いたづ  
 らに序文緒言など附けんよりはさ、こゝにこの書簡を載せ申した  
 るにて候、江湖博雅の君子、今後なほ一層の御忠言を寄せられたく  
 前以て御願申上置候、頓首再拜。

明治三十三年一月

著者

# 耶馬溪

乙羽生著

拜啓

筆硯益々御多祥奉賀候、さて小生こと彼の山陽が、耶馬溪山天  
 下無と絶叫せし一句に惚込み、トウ／＼今夜その耶馬溪の門前と  
 もいふべき所まで着致候。旅窓寐られぬまゝ御音信申上候。  
 京を出で、十八日ばかり、乃ち九月九日の夜東京表を出發致した  
 るにて候、その翌朝五時頃静岡に着き、賤機山に登り、曉の富嶽



を望み申候、紺碧の玉瑠璃寔に美事に御座候、轉じて久能山に登り申候、途中の風景、竹あり、小橋野水あり、物賣の女の頭に竹の籠をいたゞける態など、京都の山端邊の景色に似て居り申候、さてお山は繪にかいた須彌山のやうな形に御座候、日光などを見たる目にてはツマラぬものなれど、されども徳川様の御威光は、流石に豪らうおますと上方訛をつかひ度なり候、此夜は岐阜に泊り申候、十一日朝名古屋に入り、轉じて伊勢參宮と出かけ申候、二見浦は一寸好き所に候、此夜古市の油屋に泊り申候、伊勢音頭は俗又俗に候。

翌十二日午後津市に参りて、川喜田久太夫氏を訪ひ、それより龜

山を經、關西鐵道の箱根ともいふべき山中を通り申候、風景頗る幽妙、此夜笠置山下に泊り申候、夜は更けたれど、湯に入り、名物の鮎、鰻などにて一杯を傾け候に、女中の曰く『こゝは月夜ハンの晩どすとホンマによろおます』と、その辭の通り實に絶景に御座候。

十三日は笠置山に登り、それより河内四條畷に泊り申候、畷ホテルといふ立派な旅宿有之候、小楠公の墳墓にも參詣、古戦場の明月を賞して小酌一番仕り候。

十四日は大坂に入り申候、時しも高津宮千五百年祭あり、予は大葉、小川、杉山三氏と中の島の銀水亭にて小酌、それより小舟を

穢して櫻の宮まで上り申候。煙火は東京のより美事に御座候、流  
 石に難波津は水の都、酒の都、川には生洲とて舟料理あり、酒は  
 灘、伊丹、池田、好む儘に有之候、此夜備後町盛文館に泊り申候。  
 十五日は梅田より坂鶴鐵道に乗り移り申候。中山寺の觀世音は西  
 國三十三所の一、美事に御座候、寶塚の鑛泉、生瀬の鑛泉など、  
 三層五層の樓臺を設けて、美人浴後欄に凭るの光景妙に御座候、  
 此夜は寶塚に岸本榮七氏と共に一泊仕候。  
 十六日は劍山、舟坂、白水川など云ふ地獄變相圖を、正の物で見  
 るやうなる名所を過ぎて、有名なる有馬に參り申候、噂に聞きし  
 程には快からず、箱根熱海など見たる目にて是が日本一とはチ

と請取難く存候、此夜六甲山の鳴動、大震小震五六度有之候。  
 十七日は駕籠にて六甲山頂を超え、住吉に下り申候、神戸に出て、  
 光村利藻氏に泊り、武井、江見二君を訪ひ申候。  
 十八日光村、泉谷、八木三氏と共に大阪に遊び、中橋氏を松島に  
 訪ひ申候、その折の折の日記にいふ、「われは是れ九州に行く雁、難波  
 江のよしあしは兎もあれ、二三日は「お上りさん」と、ケツタイ  
 なる名を呼ばるゝも、旅は氣散じなるこそ好けれど、親しき友の  
 云ふがまゝに、有馬からの戻り駕籠を住吉の社頭にすて、神戸  
 より上り來る汽車に乗り移れば、約を違へず清峰氏一行の在るも  
 嬉しく今越して來た六甲の山を、白列車の窓から覗けば、天窓は

元<sup>ハ</sup>げて、襟<sup>えりもと</sup>元に<sup>ハ</sup>バラ／＼と松<sup>まつ</sup>の疎<sup>むら</sup>生<sup>は</sup>え、藥<sup>やく</sup>罐<sup>わん</sup>に湯<sup>ゆ</sup>氣<sup>け</sup>の雲<sup>くも</sup>の峰<sup>みね</sup>、崩<sup>くづ</sup>れかゝる邊<sup>あたり</sup>にこそ、北<sup>きた</sup>の坊<sup>ぼう</sup>はあるべしなど、昨<sup>ゆうべ</sup>夜の宿<sup>やど</sup>の心<sup>こゝろ</sup>地<sup>ち</sup>快<sup>よか</sup>りし事<sup>こと</sup>ども語<sup>かた</sup>合<sup>りあ</sup>ふ中<sup>うち</sup>に、梅<sup>うめ</sup>田<sup>た</sup>にぞ着<sup>つ</sup>たる。道<sup>たう</sup>頓<sup>どん</sup>堀<sup>ぼり</sup>近<sup>ちか</sup>くに知<sup>し</sup>れる家<sup>いへ</sup>のあるに宿<sup>やど</sup>かり、洋<sup>やう</sup>服<sup>ふく</sup>を染<sup>そめ</sup>浴<sup>ゆ</sup>衣<sup>かた</sup>に脱<sup>ぬ</sup>かへて、細<sup>ほ</sup>紐<sup>ひも</sup>の伊<sup>い</sup>達<sup>だて</sup>結<sup>むす</sup>び、月<sup>つき</sup>明<sup>あか</sup>く、風<sup>かぜ</sup>少<sup>すく</sup>しあるに、冷<sup>ひ</sup>えましてはど、内<sup>ない</sup>儀<sup>ぎ</sup>が心<sup>しん</sup>切<sup>せつ</sup>に、後<sup>うしろ</sup>から打<sup>うち</sup>かけ呉<sup>く</sup>れしは、名<sup>な</sup>も元<sup>げん</sup>祿<sup>ろく</sup>を其<sup>その</sup>儘<sup>まま</sup>なる、丹<sup>たん</sup>前<sup>ぜん</sup>とは江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>で云<sup>い</sup>ふ「ドテラ」なりき。難<sup>なん</sup>波<sup>は</sup>は酒<sup>さけ</sup>の都<sup>みやこ</sup>、醉<sup>ま</sup>うては伊<sup>い</sup>丹<sup>だみ</sup>の劍<sup>けん</sup>菱<sup>びし</sup>、蟲<sup>むし</sup>拳<sup>けん</sup>、狐<sup>きつね</sup>拳<sup>けん</sup>と、色<sup>いろ</sup>々の藝<sup>げい</sup>を仕<sup>し</sup>盡<sup>つく</sup>して、興<sup>きやう</sup>に入<sup>い</sup>る通<sup>つう</sup>人<sup>じん</sup>衆<sup>しゆ</sup>を、白<sup>はく</sup>眼<sup>がん</sup>で見<sup>み</sup>る男<sup>おとこ</sup>山<sup>やま</sup>、無<sup>む</sup>藝<sup>げい</sup>なればこそ、持<sup>も</sup>ちたる箸<sup>はし</sup>の放<sup>はな</sup>されず、刺<sup>さ</sup>身<sup>み</sup>は鯛<sup>たい</sup>の生<sup>い</sup>作<sup>づく</sup>り、そのツマも子<sup>こ</sup>も皆<sup>みな</sup>にして、椀<sup>わん</sup>もり、煮<sup>に</sup>肴<sup>さかな</sup>、とり肴<sup>さかな</sup>あるが儘<sup>まま</sup>に食<sup>く</sup>らひ盡<sup>つく</sup>し、

便<sup>べん</sup>々<sup>々</sup>たる腹<sup>はら</sup>を胡<sup>あ</sup>坐<sup>くら</sup>に載<sup>の</sup>せて、燭<sup>しよく</sup>臺<sup>たい</sup>の彼<sup>か</sup>方<sup>た</sup>に輪<sup>わ</sup>に並<sup>なら</sup>びたる、藝<sup>げい</sup>子<sup>こ</sup>ハソを見<sup>み</sup>奉<sup>たてまつ</sup>れば、舞<sup>まい</sup>子<sup>こ</sup>が幽<sup>い</sup>禪<sup>ぜん</sup>の振<sup>ふり</sup>の袂<sup>たもと</sup>、花<sup>はな</sup>とうつらふ火<sup>ひ</sup>影<sup>かげ</sup>に、厚<sup>あつ</sup>化粧<sup>けいざう</sup>の魔<sup>ま</sup>神<sup>じん</sup>、臙<sup>べい</sup>脂<sup>じ</sup>を濃<sup>こ</sup>くさし、かき眉<sup>まゆ</sup>美<sup>うつく</sup>しく、露<sup>つゆ</sup>も滴<sup>した</sup>るかと思<sup>おも</sup>ふばかり艶<sup>つや</sup>やかなる髮<sup>かみ</sup>に、花<sup>はな</sup>簪<sup>かんざし</sup>をさしたり、名<sup>な</sup>を問<sup>と</sup>へば伊<sup>い</sup>丹<sup>だみ</sup>幸<sup>かう</sup>の千<sup>ち</sup>代<sup>やぶ</sup>鶴<sup>つる</sup>、八<sup>やち</sup>千<sup>せん</sup>代<sup>やぶ</sup>、鸞<sup>らん</sup>鳳<sup>ほう</sup>は雛<sup>ひな</sup>よりその聲<sup>こゑ</sup>秀<sup>すく</sup>れたる。やゝ年<sup>とし</sup>數<sup>すう</sup>の上<sup>うへ</sup>の姉<sup>あね</sup>株<sup>かぶ</sup>、目<sup>め</sup>のバツチリしたるは、伊<sup>い</sup>丹<sup>だみ</sup>幸<sup>かう</sup>の千<sup>ち</sup>代<sup>やぶ</sup>、これ南<sup>なん</sup>地<sup>ち</sup>一<sup>いっ</sup>番<sup>ぱん</sup>の尤<sup>い</sup>物<sup>ぶつ</sup>とぞ、次<sup>つぎ</sup>は三<sup>さん</sup>榮<sup>えい</sup>の梅<sup>うめ</sup>菊<sup>きく</sup>、愛<sup>あい</sup>嬌<sup>けう</sup>とぼるゝ口<sup>くち</sup>元<sup>もと</sup>、團<sup>だん</sup>洲<sup>しゅう</sup>の愛<sup>あい</sup>娘<sup>ぢやう</sup>實<sup>じつ</sup>子<sup>こ</sup>に似<sup>に</sup>たるも妙<sup>めう</sup>に、あどは玉<sup>たま</sup>、若<sup>わか</sup>久<sup>ひさ</sup>、米<sup>よね</sup>鶴<sup>つる</sup>、曰<sup>いは</sup>く何<sup>なに</sup>、曰<sup>いは</sup>く何<sup>なに</sup>、流<sup>りゅう</sup>石<sup>せき</sup>にこゝは難<sup>なん</sup>波<sup>は</sup>江<sup>え</sup>の蘆<sup>あし</sup>邊<sup>べ</sup>にちなむ鶴<sup>つる</sup>の名<sup>な</sup>多<sup>おほ</sup>く、テコ鶴<sup>つる</sup>、ヒキ鶴<sup>つる</sup>、お裙<sup>すそ</sup>が濡<sup>ぬ</sup>れる、われは借<sup>かり</sup>着<sup>ぎ</sup>のツンツルテン、柔<sup>ろう</sup>よく剛<sup>がう</sup>を制<sup>せい</sup>したる、お

蝶内儀が鶴の聲に、ハツと立ちたる大姉株、お勇と云へば此地での元老、舞に合はする三味の手は、こも富田屋のお國とて、お勇と並ぶ西の關、妙舞天樂、神に入るとはこの事なるべし、今宵は駕籠の疲勞もあり、こゝらが恰度切上げ所と、獨り酒宴の席を遁れて、道頓堀の夜の景色を、三龜の二階から見渡すに、未だ浪花座は木戸を閉めねば、天の與と一幕覗くに、我當の由良之助、品位と云ひ、性格と云ひ、出來居らぬこそ恨みなれ、總じてこゝの芝居は、仕打コセくして、勇士、義人などの大役に、貫目の無きが多くあり、一ツは土地の人氣にも因るべけれど、繪の名人は、墨を惜むものなるを承知あらば、それにて事は足りぬべし。

ツマらぬ儘にそこを立出で、月面白う巷に人の影を落すに、また千日前をそゝろ歩き、播重に女義太夫を聴きに入れば、繁昌は客の蒸餾、隅の方に屈んで、一トくさり聞きたれど、こも亦ツマらぬまゝ、的無しの放矢、何處ともなく歩を移して、只ある橋のたもとにかゝる。川は兩岸の彩燈を落して、紅、白、金色、水は種々の影を蘸せば、折節は小舟の來りて、生洲に棹を止むるもありき。酔は醒めたり、興も盡きたり、いざ宿に歸らんとて、また道頓堀を通れば、高島屋が櫛玉の廣告燈に、往來の人の影も讀まるべくなりて、夜は更けぬらむ、家に歸れば、老妓若妓未だ居残りて、われを旅籠に歸さず、かて、加て化物屋敷に案内せよと云ふ、

今は重圍に陥りたる身の、止む無く諾して、其處に行けば、陰雲  
慘澹、實に千日前ならでは見られぬ不思議の興行物なれ、枯尾花  
に髑髏の風俗したる番人の、小暗き隅に在りて、道を教へ呉る、  
儘、場内悉く見めぐりたるに、その物凄き、言語の外なり、見  
れば何時の間やら、護衛の舞子を見失ひぬ、われは始めて籠の  
鳥の危難を遁れて、無時に宿に歸りぬ」など、即興の筆を走らし  
たるも可笑。

十九日中秋看月の夜なれば、紀州和歌の浦に遊び申候、風光の美、  
金澤八景の大なるものにも似て、それより美しく候、生憎の  
雨、花開いて風雨とやら、兎角儘ならぬ世と、夕暮の海を小舟に

十

て、葦邊の茶屋に着き、淺酌一番して、空しく歸り申候。

二十日は道頓堀に再び芝居を見物いたし候、橋三郎は大坂仕込、  
江戸ッ兒には向き不申候、餘りコセ／＼して人品下り、所謂名人  
の小刀細工とでも可申か。

二十一日は神戸に歸り申候、この夜光村氏邸にて、玉突き、蓄音  
機、それより寫眞の話などに、夜を更かし申候。翌早朝兵庫に抵  
り、牛場山陽鐵道總支配人と、河合氏とに逢ひ申候、その厚意感  
謝の外無之候。

二十二日須磨、明石、姫路を過ぎ、岡山に一泊致候、その日の手  
帳に記したる漫筆に曰く「旅の衣はこれにても事は足れりと、フ

十一

ロツクを着た切雀の、お宿は何處と定めなく、立ちては泊り、とまりては、立つ鳥の蘆のまろ屋に秋風吹いて、身は落人の、難波の津を背後になし、松に時雨る、須磨明石を、近く見やりて、朝嵐の嚏に、昨日買ふたる辻占の、戀を辿りつ、淡路島はツイ其處に、通ふ千鳥のさゝら波に隠るゝなど、土佐繪をその儘なる景色に見惚れて、失神となれるも嬉し、姫路は優にやさしき名の、松にも城の残れるを眺めて、有年てふ驛に着くまでは、夢なりしも妙なりき。こゝよりは米點の山つゞきて、海には遠く、水流れて危橋を架せり、兩行の峰多くは兀げて、裾に小松をあしらひ、竹は村をつゝみて、鶏犬の聲をおくるなど、倪黃の筆ならでは、寫

し難き繪巻物の中を、汽車の走りて、岡山にぞ着きたる。こゝには知れる友の多くあるを訪はんとて、赤帽を呼び居る間に、乗り込めるは小室屈山君なり、君が従者と物語れるを、餘所ながら聞けば、志賀矧川君の、昨日しもこの地を辭して、東都に歸れりと云ふに、われはいたく落膽したれど、なほ親しき人の、數あるを頼みに下車して、山陽新報社に主事其他を訪ひ、新田静灣君の今し編輯事務を了へりしと連れ立ち行きて、中國民報に北村三啞君を誘ひ、拳車をつらねて後樂園にいたりぬ、朝日川を渡り、野に出づれば、雨後の翠色四方に溢れて、白雲搖曳、峰の晴れぬも面白く、路の傍には手腐の花紅に、青田の縁を彩りて、秋の眺望に

一點の朱を注げるも美しく。されどこの花、その色のいと麗はし  
 きに似もやらで、毒草にして、手腐りの名に背かず、祇れば必ず  
 死すといへり。されば異名を狐花、死人花など唱ひ、三田尻にて  
 は入道花とも稱すとかや。車をすて、園中を徜徉するに、平庭な  
 がら苔古びたり、竹の一村に城の天守の高く聳へたる、中の島に  
 鶴の來りて、池の魚を覗く態など、實に延養の亭主ならぬと、こ  
 の長閑なる景色を見ては、流石に壽命も伸びさうなり。惟心山、  
 茂松庵、榮唱亭、流店など、數奇を凝らしたる造りさま、寂びた  
 るは、星の數の積りてにや、池より岩、岩より築山、築山より上  
 は、自然の水村山郭を園中の物にして、鳥の遠く雲に入るなど、

幽趣窮り無きも妙なりけり、頓て小雨のそぼ降るを、われは母衣  
 をもかけず、市街そこ此處と見めぐり、岡山ホテルに洋食を味ふ  
 ては、恵比壽ビールの社長なる馬越氏は、この縣の人なる事を聞  
 き知り、日本一の吉備團子とて、未だ母の乳房を舐り居る頃より、  
 その名を知りたる名物も、この銘産なる由を聞きぬ、食果て、  
 宿に歸れば、土地の豪商柿屋の主人、訪ひ來りてわれと三啞青灣  
 二子とを、錦園に招きて夜宴を張れり、この家の庭は後樂園に次  
 ぐべき結構にして、築山泉水の設け、茶室門牆の數寄、古色掬す  
 べき所あり、昔時はこゝを三芳野花壇と云ひて、名園の一ツと算  
 へたりしも、故ありて名義のみを他に譲りてありけるが、ツイ七

八日前より再興して、また割烹の業を創めしといふに、われの知遇せるも不思議なりし、老妓糸子がわれの爲に、岡山訛の唄を三味に合して、謠ふを聞けば、「岡山言葉で、いかれ、見られ、せいぢやアけんど、づどほんぼつこ、おゑんぞな、そのときや、わつきも、じんとするほど、けうとかつたど、ごろんぢやい」、通辯無ければ、その何んの譯やを知らず、夜は更けぬ。翌日は三時半といふなる發車に、酒を大抵に切り上げ、停車場前の宿に歸りて、四市布圍を三人で引ッ張り合ひ、男ばかりの雜魚寐の、興あるを笑ひ轉げて、木曾殿ならぬ背中合せは、備前法華に安藝門徒、その宗教の話も途切れて、玄の又玄、あとはムニヤ〜の境に入りたる

も、旅は恥を捨鉢叩いて、また行脚の僧となれるも可笑。

膝を抱いて獨り禪に入る夜長かな

など放言いたし候、後樂園は前にも申候如く、實に自然の山水を園中のものでして作りたるもの、乃ちパンラマの裙に、眞物の樹木あるが如く見受られ申候、しかし泉水築山の具合など、流石に日本の名園に御座候。

廿三日は宮島紅葉谷に一泊仕候、山陽鐵道沿道は、譬へば南宗畫の繪巻物の如く、明石以東尾の道以西を除きては、米點の山聳へ、淡彩の川流れて、危橋あり、小舟あり、人馬豆の如き光景など、その風光の美は、他に得易からざる勝地に富み居り申候、宮島は



江の島の大なるもの乎、たゞ磯馴松に鹿の群れ居る、紅葉澗に水のちよろ／＼流るゝ、晩潮來りて、長者の萬燈の水に浮びたる、夕陽落ち、千疊敷てに鳩の巢に籠るなど、實に美事に御座候、殊に雨景の面白き、歸舟の蓬窓より眺むれば、五重の塔先づ靄に隠れ、さては松の影、瓦の色を押つゝみて、頓て大鳥居の一つのみ、海上に嚴と残りて立てるなど麗はしき眺めに候。

廿四日午後四時頃周防の徳山に着く、見るべき程の市街ならず、夜十一時四十分山陽鐵道連絡の新造汽船豊浦丸にて出帆致候、一等室の心地よき、中には洋食あり、和食あり、酒と菓子と果物とは、好むが儘に賣りありて、直行五時間些の退屈を見ざる所、重

寶此上無しといふべく候。

廿五日期五時前豊前門司に着き申候、葛葉村に三好末郎氏を訪ひ小憩後、直に汽車に上りて、小倉に森林太郎先生を訪ふに、昨夜福岡に行かれしとて在らず、止む無く市街を一見するに、不潔驚くべく候、たゞ六尺男子の鈴を打振り行くを、何ぞと問へば、これは市中用達にて、如何なる家の用事をも、即座に辨ずべき使丁なりといふ、妙なもの而已が進歩したるものに候、又夜汽車にて中津に參り申候、これより耶馬溪に入らんとてなり、風俗の淫靡なる、藝妓の宿屋に泊り込むは、殆ど公然の秘密、所謂默許の姿になり居申候由片腹痛き事に御座候。

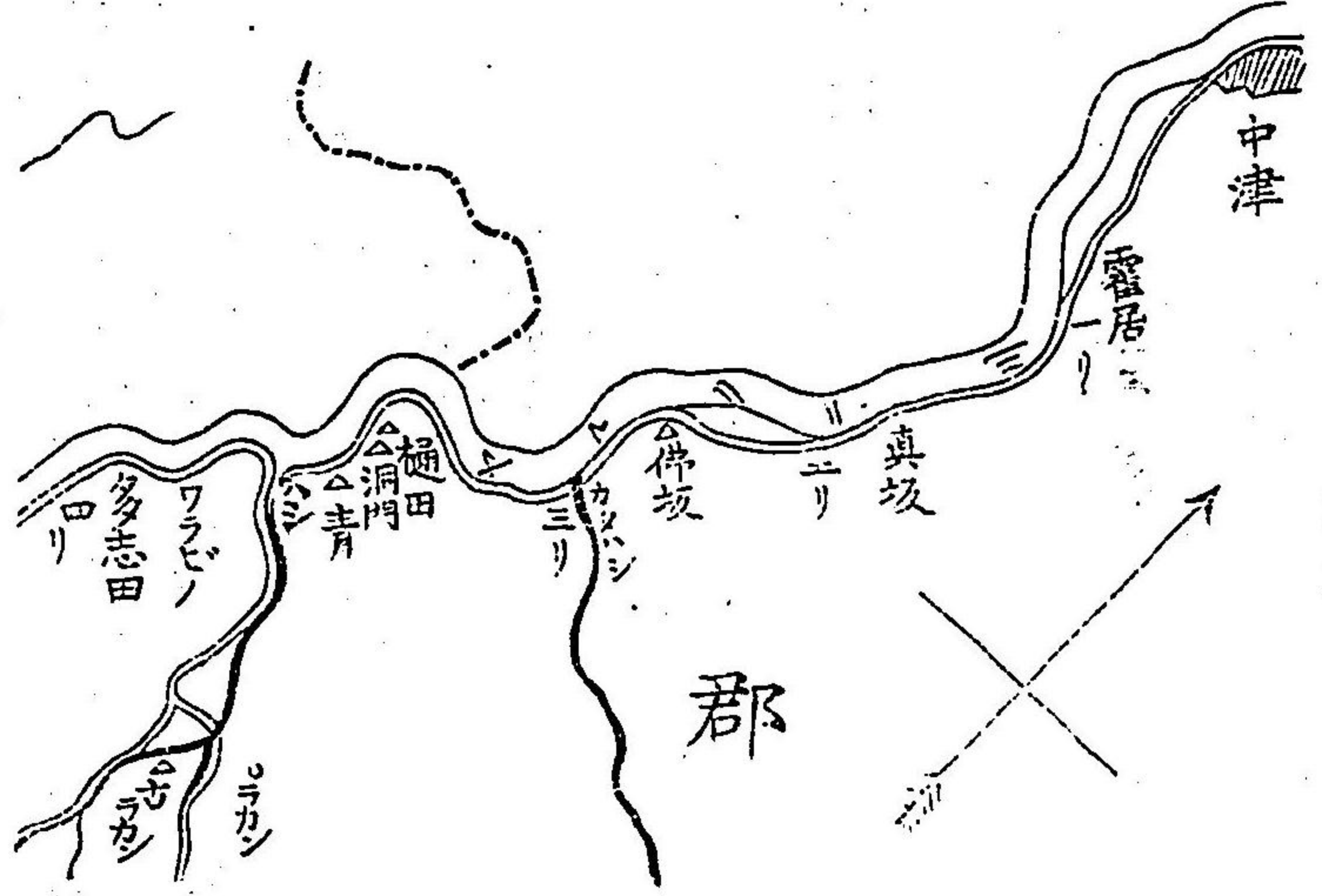
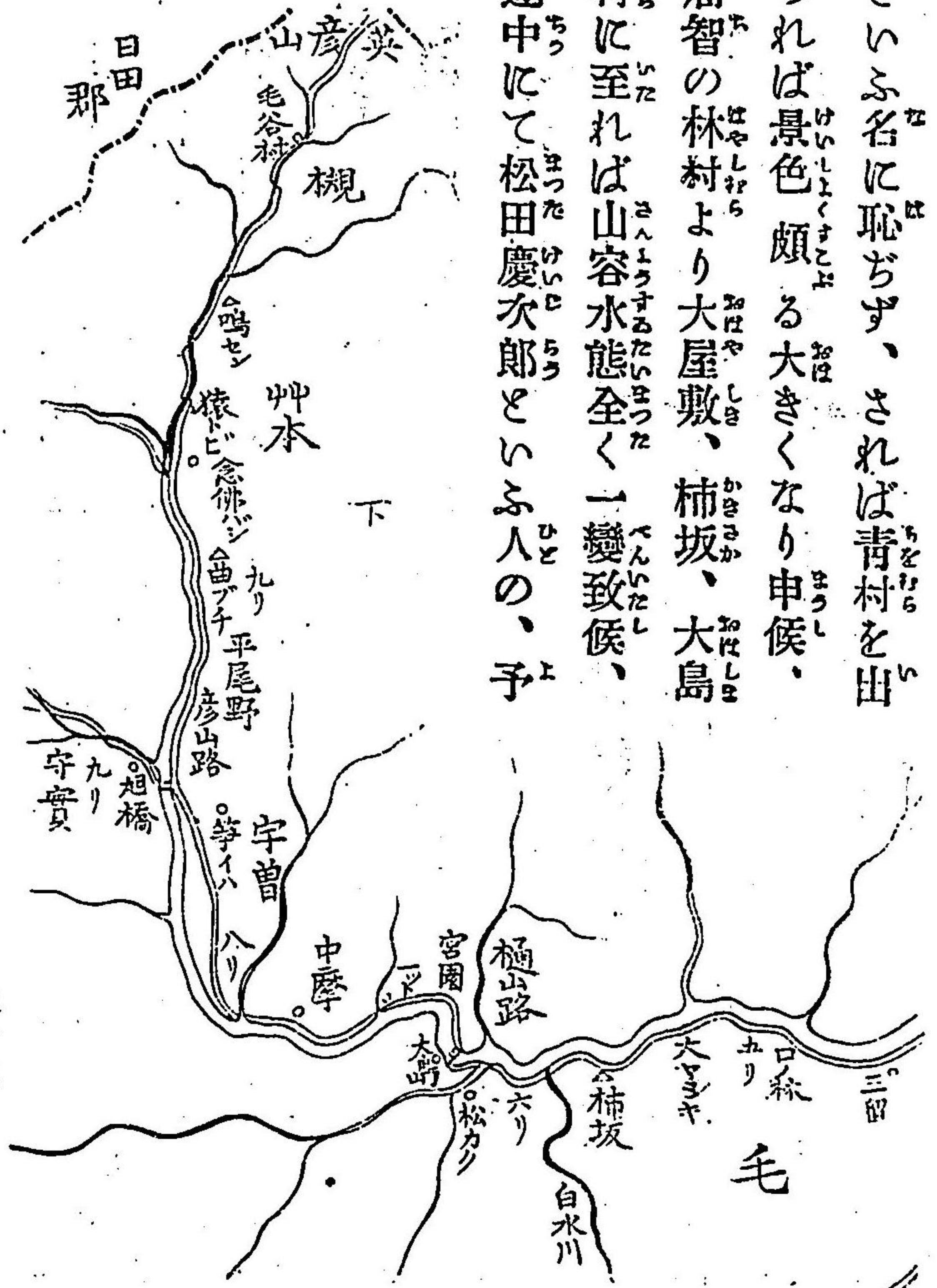
廿六日野依曆二氏其弟と従者とを伴ひ、予を案内せられ候、同勢  
 四人徒歩にて、耶馬溪探勝の途に就き申候、中津を離れて三里、  
 鮎歸といふ所より、一段々々美景に相成申候、佛坂、樋田、青の  
 トンネルに差かゝり申候へば、慥に耶馬溪の凡ならざる風景の一  
 斑を知り得らるべく候、それより支道ながらも羅漢寺に登り候得  
 ば、一層山光水色の雄大なるを認め得られ候、明日はなほ山深  
 く分け入り可申候、今夜の旅宿は青村の山國屋、乃ち山國川を前  
 に控へて、滔々の水勢夕の夢を破り、後は蛾々たる断崖刀して削  
 る如く轟峙し、麓の虫の音の切々たる、流石に旅の哀を掬まれ申  
 候、殊に室むさくろしく、夜の器の物の香のする、蚤や蚊や燈に

寄る虫や、枕を搗ぐれば車夫も馬子も、一つ蚊屋なるもおぞまし  
 や、都會を二三里も離るれば、諸事がこの通りに御座候、さりな  
 がら山陽は文を以て耶馬溪を開拓し、小生は寫眞を以て、中興開  
 山の祖と仰がれんと欲するまゝ、大抵な不自由不愉快は、辛抱す  
 るつもりに御座候、明日は今日より一層鄙の山家に泊るべく、雨  
 さへ降らずば、明後日の夕刻には彦山まで登りつめ可申、それよ  
 り豊後の日田に出で、漸次熊本長崎などへ巡回可仕候、御不沙  
 汰のお詫まで如此に御座候、敬具。(豊前下毛郡城井村青の山國屋にて)

拜啓、去月廿六日夜豊前耶馬溪青  
 村より出したる書面、已に御披見  
 の事と奉レ察候○

乃ちその廿七日は同村を出發徒  
 歩、荷物は村夫一人を雇ひ、山深  
 く分け入り申候、耶馬溪は鮎歸よ  
 り起り、彦山の麓まで十八九里の  
 間を爾かいふにて、その形苞の如  
 くは御座候、底と口との狭き割合  
 には中腹の廣きと、實に「山國」

といふ名に恥ぢず、されば青村を出  
 づれば景色頗る大きくなり申候、  
 屈智の林村より大屋敷、柿坂、大島  
 村に至れば山容水態全く一變致候、  
 途中にて松田慶次郎といふ人の、予



を出迎はるゝに會し大に便宜を得申候、これは江藤直純とてこの村より出られたる士の、今は東都に弘報堂といふ店を開きて、その名は村閭にまでも聞え居らるゝが、予を知れるよりして、右の松田氏に前以て報じ置れしより、この仕合に御座候、大島村の予が旅宿は山國川に臨み、雲與橋に對し、嵐光水色檻前に落ち來るなど大に愉快を感じ候。

廿八日は綱引きの腕車にて進み申候、途中山陽が野猪を煮たる所、寄寓せる寺など見やりて、守實村朝日橋まで参り候、然るに彦山千尺雲を劈き立てる景色、畫もなり難く、俄に登山の念勃々禁ずる能はずなり候まゝ、結束して前進仕候、松田氏と車夫二人と参

り申候、車をすて、猿飛の絶勝を探り、毛谷村に入りては、六助の墓の有無などを問ひ、山の麓にかゝり申候、それより三里餘の上り道、落道といふ所より道も無氣に相成申候、幽谷を涉り深林を出づれば、山は一面の花薄、風吹く毎に打靡くさま女浪男浪の寄せ來るが如くに候、一の高須といふ嶺より折れて、一上一下、豊前坊てふ山まで登り候所、日は落ち暮色蒼然と四方を裏み申候、飢えたるまゝ、酸味ある村醪を掬み、板の如き飴を舐りて、前進、夜の八時頃彦山の町家に泊り申候、この町恰も妙義町の摸樣有之候。

廿九日は母の命日に候、早朝宿を立出で、四十二町登りて英彦山

の第一峯に上り、耶馬一帶の山川を夢の如く廻かに眺望いたし候、下りて豊前坊まで間一里許、悪路峻峻、言語に絶したる、一生涯始めてに御座候、途中大雨に遭ひ帽も洋服も絞るばかりになり申候、坊に着きても雨霽れぬば、菅笠など蒙りて下山し、毛谷村にて夜に入り、三里ばかり夜道を急ぎ申候、雨の耶馬溪風流過ぎて寒、骨に徹るを覺え申候、此夜は守實村の豪農熊谷直義氏方に頼みて一泊、實弟矢野君大に好意を寄せられ候。

卅日は腕車にて出發、途中朝吹英二氏の實家同苗謙三氏宅に晝餐に招かれ、それより急ぎに急ぎて青村まで参り候ところ夜に入り申候、中津町に着きたるは夜の十時、土地の企業家豪商野依曆三

氏等訪ひ來られ、夜更くるまで酒掬みかはし申候、その折諸氏に物語せる、予が耶馬溪所見の雑談は、左の通りに御座候、「世の丹青家を以て自ら任ぜん程の人は、徒らに一室にばかり籠居して、所謂閉戸先生となり、粉本をのみ捻くり廻はして、これを能事とする如きは、決して名家達人のせぬことと思ふ、どうしても健脚千里、天下の名山靈水を片ツ端から跋渉して、それを一つの活畫圖とせいで、ならぬといふことが、予が此度の旅行に於て、大に其然るべき事を發見したのである。古人が一宗一派を開いて畫道の祖と仰がれたのも、決して法もなく術もなく、只龍と雲ばかりを抹つて、自ら喜んで居る空想家などが爲し得るものではある

まい。其中には必ず自己の踏襲し、遍歴した山川湖海、其他種々多様の景物によつて、自然に自覺し得た上に、漸く一派なり一宗なりを立てたのである。若し春の日の麗かなる頃に、奈良の古都からかけて大和あたりに吟杖を曳いて見ると、奈良朝當時の建築物や、其他種々の遺跡も、大方は今湮滅し去つて、多くは其係を止めて居るものは少ないけれど、その古も今も猶かはることなき山のたゞすまい、水の流れ、木の葉の茂み、草花の香ひ、その自然に人の眼孔に感觸する物色といふものは、どう見ても全然彼の土佐畫を其儘の傍である。

等しく五畿の内ではあるが、山城は京都の洛中洛外の山水風俗等

を見ると、これはまた恰も住吉派の粉本を見る様な心地がする。勿論京都も降つては東山風の瀟洒たる美術となつたけれど、古くは平安朝時代の如きは、何んぞなく住吉具慶の物した、洛中洛外の圖を、正のもので見る趣があるのである。

さて又道を丹波丹後の方に取つて行くと、また多少異つた趣を呈するので、即ち圓山應舉は自己の生れ故郷を、寫生したのではないかと思はれるばかり、何んぞなく四條圓山を丸る出しの形がある。

又谷文晁は江戸に於て、尤も名聲が高かつた。その筆端に霸氣のある所などは、或は上毛あたりの山水を基礎として、寫したので

はないかと思はれる程、何處となく關東の山光水色を描いてゐる。即ち彼の妙義山などは其一例と云つてよからう。

然らば彼の南宗の畫は、支那からの傳來であるけれど、我國に於て其畫道を開拓した連中で、田能村竹田などが與つて力多いので、俗につく芋山水と呼ばれてゐるものは、抑も那邊より出で來つたかと思ふと、これも矢張り竹田などの郷國に近い、彼の豊の耶馬溪あたりから出たものであるといふことが、旅行をして見ると發明せられたのである。古人の所謂「居は氣を遷す」といふことは、如何なる名手達人の上にもあるべきことで、全然一室に引籠つて架空の筆をのみ弄するといふことは、出來得べからざる

事實の様に考へられる。耶馬溪の如き絶景は若し倪黄などの筆を假つて、仔細に寫さうものなら、必ず天下を驚かすに足るべき名畫を得ることであらうに、如何せん、近時の南宗畫と稱せらるゝものは、文人畫の眞髓ではなく、不文人が一枝の筆の戯事に過ぎないので、其畫に氣韵と云ふものが整はぬ。で世人よりはツク芋山水と冷評されて、その畫流も憐むべき有様に立ち至つてゐる。誠に惜むべきことではあるまいか、予は這般の旅行に目のあたり耶馬溪の絶景に對して、大に遺憾の念に堪えなかつたと同時に、其所謂つくいも山水を、正のもので見るといふ程奇絶快絶なる、斷崖絶壁の多いのに一驚を喫したのである。

さて耶馬溪は山陽の筆に見えたる如く、豊前中津町より豊後日田町に達する間を云ふのが通常である。その日田といふ町は廣瀬淡窓、田能竹村田、近くは僧の五岳などの出た土地である。極めて山村僻陬の地ではあるが、詩人の稱して所謂詩人郷とも云はれる所であるから、九州の様な遠國にある風景としては尤も此耶馬溪あたりは名高いのである。殊に山陽が一度其紀行文に、椽大の筆を揮つた以後といふものは、實に耶馬溪は天下絶無といふ程に詩人の稱讚を得てゐるのである。

で耶馬溪を探るものも、多くは前に云つた日田町から中津町までの間を探るので、これがもう耶馬溪探勝の關の山であるのだ。し

かし予はこの限られた境界よりも、猶一層深く、奥の奥の、畢竟は耶馬溪の水源を極めたので、裏山から進んで彦山までも、登陟の快を擅にしたのであるから、敢て耶馬溪を談ずるに於ては、一步も他人に借さない権利を、保有するものと、少しは天狗も云ひたくなるのである。

餘談はさて置いて耶馬溪の勝は、中津より三四里計の所に鮎歸、佛坂、青、羅漢寺等の風景を一見すれば、大抵はそれで吟杖を返へすのである。然し、山陽も耶馬溪の勝を稱した所は、猶此邊よりも奥であつた、今の世人の通常一見して、耶馬溪の名勝と稱する羅漢寺や、青などの邊は人工を假りた所が多いので、猶未だ



天然至妙の絶景として讚美することは出来ぬと思はれる。

耶馬橋から進んで屈智の林、柿坂、大島、一ツ戸、朝日橋、猿飛、毛谷村等の景色に至つては、既に造物者が、能ふる丈の技術を振つたかの如く、天然自然の風物は、洵に神工鬼斧と謂つべしで、観者をして不覺快哉を絶叫せしむるのである。

勿論山陽が耶馬溪を賞したのも、この自然至妙の山水を謳歌したので、故更に人工を加へた痕跡ある風景の奇に驚いたのではなからう。で此自然の山水の手輩が呼んで以て絶妙と稱する所は、寧ろ多くの世人が見て以て妙と叫ぶ彼の羅漢寺より、更に更に奥深き所に在るのである。就中猿飛の景色など、云つたら、愉絶快絶

といはんよりは、實に悽絶愴絶を極めたもので、畫にも描き難く、寫眞を以ても其眞を穿つことが、とても出来ないのである。

それから歩を轉じて毛谷村の幽境に這入つたが、聞きし武陵桃源の郷も、斯様な所であつたらうかと、思はずも手を拍つて躍如とした。さてこの毛谷村といふのは、諸君も御承知の、彼の彦山権現靈驗記に有名な毛谷村六助の故郷である。予は此の村に入つて直ちに六助の遺跡の有無を質したが、郷人の云ふには、六助の跡は今何處と分らぬとのことであつた。しかし不思議なことには、此村には、代々無双の強力者を出すと宣傳へて居る。でそれならば何故東京の本場所へ出て来て、力士界に横綱でも張らないので

あるか、と冷評半分の間を試みると、郷人の言草が可笑しいのである。

郷人の云ふには、それはいかぬことだ、此村に強力は多いけれど、それは滅多に力を現はさない、何故と云へば其證據には此村に日の下開山と意張る力士でも來たならば、忽ち六助様の靈が乗移つて、其自稱力士を打ち挫くのだといつた。流石は山深い人情の質朴な愛嬌が見えて、一笑を買ふの値は慥かであつた。

序であるから、その角力のことについて、一つの話柄を齎らして來たのである。一躰耶馬溪といふ所は、山と川との間の溪間に三々伍々人家があつて、それが覺束なげの幾村をか形成つて居るの

であるから、郷人の娛樂といふものは、中々芝居や寄席といふ様なことは夢にも知らないのである。其代りに田舎角力所謂地角力が非常に流行する。予が耶馬溪に這入つてから、尤も不思議に思つたのは、何處の村にもこの素人力士の墓碑が、立派に村はづれなどに建てられてあることであつた。例へば狐川の墓、猫又の墓、といふ様に、何ヶ所も同一様の石碑を見たときには、自分は或は日清戦争に戦死した徵發力士の墓でもあることかと尋ねて見ると、何がさて田舎力士が病没した、その碑であるとのこと流石に驚いた。これでも角力の流行する所といふことが承知されるのである。

やがて大島村といふ所に宿をとつた。家は雲與橋畔風光絶佳の所である。其日も暮れて旅の夕暮の物淋しさに、窓外に頭を延ばすと、橋を越えて、向ふの鎮守の森の方にあたり、轟々たる人聲がするので、何事かど、土地の有志家の一人に問ふた所、今夜は鎮守の祭禮で、素人角力があるとのこと、それは面白からう、今日も道すがら石碑の銘に氣を驅られて居た、早速見物に出掛けやう、と夜露の道芝を踏み分けて、八幡社の境内に行て見ると、廣前に土俵が設けられて、今や角力の初まりである。茅ぶきの拜殿の前に群集してゐるのは、この近郷近在のものである。一家を擧げて、娘も孫も一團の家族は喜色を満面に溢らして、一二升も入

るらしいといふ白丁を前に置き、茶碗酒に景氣をつけて、角力を見物してゐるのである。予も土地の有志家に擁せられて、拜殿に昇り、暫らく角力を見てゐると、土俵の東西に集つてゐる力士は、皆この無名の素人力士である、夕暮までは野良に出てゐたものもあらう、水車の番小屋にゐたものもあらう、いづれも此等の無名の力士だから、何山何川と屹とした名乗りが付いて居るでもない、最初は所謂烏合の衆の寄合で、その力量を比較する爲めに、躰格の甲乙なきものを引合せて、これに行司が勝手の名をつけてとらせるのである。で、最初の幾十番は、頬冠りをしたもののやら、頭巾様のものを被つたものやら、我勝手にその力を出し

てゐるのを見た。

さていよく誰彼は誰彼の好敵手であるとき、略ぼその敵手方が分ると、いよく東西に立分れて、初めて何山とも何川とも名乗が附いて、土俵に立ち現はれるといふ様である。その中にて餘程風變りの習慣と見たのは、見物人より一勝負毎に、纏頭を土俵の中へ雨霰と抛げる、これを呼び出し奴が一々取り上げて、聲高々と金幾錢、何村何兵衛様より御最負の何山に下ださると讀みあげるのだが、さてその纏頭の金高はといふと、これも驚くべきもので、二錢三錢といふはした金で、拾錢とまとまつたものは殆んどないのである。けれども其一勝負毎におひねりの花は、はらくと降

り來りて、景氣の好さは限りない。予も餘りの面白さに、花の金高を側に居た娘に聞くと、一錢から以上は何程にても御心任せなれば、何んでもどし／＼おまきなされ、わたしが包紙をもつて來て上げませうと、東の溜りの水桶に結付けてあつた口拭紙の、一束をもつて來て呉れたので、少しは晩酌の機嫌もあつたことにて、頻りにおひねりを製へては抛げたのである。然るに予のひねりには、名前も書いてない白紙であるので、呼出しが四方を眺めて、只今の花は誰方様でござると聲を揚げると、予の前に居た二三十人の老幼男女は、一齊に顔を向けて此人であるといふと、満場の視線は皆予一人に向つてくるので、角力を見物する此方が見

物、されるといふ形勢、これはたまたまらぬと逃げ出せば、後方に呼び出しが聲高々と、旅の御方より金何錢、何川に下さると讀み上げるのを聞き流して、旅におかしき物好きを、我とおかしく宿に歸つた。さて其翌日角力の本場ほんばの毛谷村けやむらに行つて、遺跡ゐせきは無ないといふけれど、六助むすけの昔むかしを忍しのんだのも、奇縁きえんといはゞいふべしである。

これに就いて予は思ふに、土地の風とは云ひながら、譯もない素人力士の石碑を立て、これを永遠に残さう程のことがあるならば、何故に耶馬溪の山水を天下に紹介した一代の文豪、山陽外史の紀念の碑を建てぬのであるか。しかし實際其土地に入つて見れば、

我々が山陽の耶馬溪の記に、涎を流して有難がる程、土地のものは有難がらぬのである。兎角世は金びら切つての旅人が、宿屋やせやに厚くせられると全おなじごと、貧文士ひんぶんしの一山陽さんやうが、當時とうじに重おもぜられなかつたも、猜うせられる次第である。されど予は山陽さんやうと等しく、一個の寫真しゃしんによつてこの耶馬溪やまがせの山水を謠歌うたして、開拓者かいたくしやの一人とならうと思ふ。それで繪畫えいさの上にも、寫真しゃしんの上にも、深くこの山水さんすいを研究けんきうして、耶馬溪やまがせの耶馬溪やまがせたる所以ゆゑんを、いよく發揮はつぱいさせやうと思ふのである。「など、大氣焰たいきえんを吐き散らし申候。

明くれば十月一日、朝早く宇佐驛うさえきまで汽車きしやにて急ぎ、八幡宮やまぐちに參詣けんぎ仕候しこう、社やしろの結構莊嚴けつこうそうげんにして、自づと頭つぱりも下り申候まをし、歸れば又

場を出づるに、夜は暗く、雨は細く、いづれの家も起き居るは無  
きに、詮無ければ停車場に戻りて、共同椅子に二時餘り轉寝せる  
も、旅なればこそ出来得るなれ。

五日未明巡査の聲に呼び起されて、汽車に乗りうつり、先づ八ッ  
代まで行き申候、肥後は米の名所、肥前筑前邊の稻の未だ青葉交  
りなるに、八ッ代にては稻を蒔り盡くして、田の面に案山子の一  
ツだもなし、氣候の差もあるなるべしなど、窓外を眺めやりて興  
に入り申候、八ッ代には征西將軍の社あり、參拜了つて、古城  
趾に上り海上遙かに天草島を眺め申候、島原は近く左にあり、三  
角の山碧に、海に突き出でたり、沖には白帆の往き來ふも見え申

候、時は正午、煙は蓬窓に横はるの趣無之も、予も亦萬里舟を  
泊する客たる資格は可有之と存候、熊本はその日午後三時頃着、  
直に水前寺乃ち成趣園に赴き申候、それより熊本城を見、長崎次  
郎氏を訪ふ、令息庄八氏在りて予を旗亭に招ぎ會飲せらる、また  
夜汽車に上りて例の鳥栖に三四時間休憩し、翌朝上車して若松港  
を見物致候、途中の景色、實に天下の奇觀に御座候、こゝより汽  
船にて玄海灘を渡り候に、日落ちて碧旻水に浸り、風起りて奇雲  
宙を走るの光景、形容するに辭を不見候、門司港は淫靡輕薄、予  
は一時も長居するを厭ひ申候、殊に旅館の不埒なる、一旦客を宿  
引したる後は、袋の鼠ども思ひ候てにや、言語同斷の待遇いた

もや懇親會などありて、土地の別嬪も多く見申候。

二日一番汽車に乗遅れ候まゝ、停車場前の茶屋に、琵琶法師を呼び、一段聞き申候、江州の司馬ならざるも、就中涙尤も多かりしは、流石に旅の哀れを知れる予と自信仕候、行橋といふ所にて九州鐵道に乗換へ、小倉を経、此日香椎にて下車、宮に參詣し、それより名島に渡りて、三韓征伐の帆柱石など見申候、千代の松原を過ぎ、箱崎八幡に參り候に日暮れ申候、此夜は博多中島の積善館を訪ひ松島屋に一泊仕候。

三日東と西の公園を見物いたし候、白河文學士九州日報主筆として在博あるを幸ひ訪ふに、午後より某亭に送別留別の宴を開かれ

申候、外園兄も來られ、絹篩の藝妓も一見いたし候、此地は石炭の餘徳、客に暴に金を遣ふが如く、藝者の指には金環の、四ツも五ツも嵌め居候者を見申候、夜行にて長崎に向ひ申候。

四日朝無事長崎に着仕候、直ちに石橋忍月兄を訪ふ、兄も亦予が寓所に訪ふて夕刻圓山の大鶴といふ旗亭に酒宴を開かれ申候、池田工學士と豪商松延氏と予と四人、尤物も數人參り候、然るに言語不通、唐人の寝言を聴くの思ひ有之候、その音や、チャン音を帯び居候點など、日本の人とも思はれず候。又夜行にて熊本に發車す、雨になりて人は少なし、鳥栖といふ驛にて汽車を乗換ふるに、二時餘の間もあり、宿屋に着きて休憩せんと思ひて、停車

場を出づるに、夜は暗く、雨は細く、いづれの家も起き居るは無きに、詮無ければ停車場に戻りて、共同椅子に二時餘り轉寝せるも、旅なればこそ出來得るなれ。

五日未明巡查の聲に呼び起されて、汽車に乗りうつり、先づ八ッ代まで行き申候、肥後は米の名所、肥前筑前邊の稻の未だ青葉交りなるに、八ッ代にては稻を蒔り盡くして、田の面に案山子の一ッだもなし、氣候の差もあるなるべしなど、窓外を眺めやりて興に入り申候、八ッ代には征西將軍の社あり、參拜了つて、古城趾に上り海上遙かに天草島を眺め申候、島原は近く左にあり、三角の山碧に、海に突き出でたり、沖には白帆の往き來ふも見え申

候、時は正午、煙は蓬窓に横はるの趣無之も、予も亦萬里舟を泊する客たる資格は可有之と存候、熊本はその日午後三時頃着、直に水前寺乃ち成趣園に赴き申候、それより熊本城を見、長崎次郎氏を訪ふ、令息庄八氏在りて予を旗亭に招ぎ會飲せらる、また夜汽車に上りて例の鳥栖に三四時間休憩し、翌朝上車して若松港を見物致候、途中の景色、實に天下の奇觀に御座候、こゝより汽船にて玄海灘を渡り候に、日落ちて碧晏水に浸り、風起りて奇雲宙を走るの光景、形容するに辭を不見候、門司港は淫靡輕薄、予は一時も長居するを厭ひ申候、殊に旅館の不埒なる、一旦客を宿引したる後は、袋の鼠ども思ひ候てにや、言語同斷の待遇いた



し候。

六日の夜十一時再び山陽鐵道連絡船豊浦丸に搭じ、翌七日早朝徳山に着き申候、船中と云ひ車上と云ひ、流石に此社の待遇は日本一心地快く感じ申候、徳山より岩國までは海傳ひ、風光明媚に御座候。

七日午後一時岡山に下車、新田、西崎、北村、鳥越、久城の諸氏に招かれて一富士に小酌し、それより當地三大樓の一なる豊崎樓に開かれたる宴會に臨み申候、縣會議員高山祐士氏予の爲に特に高意を向けられ候、こゝにて舊友高階氏の此地に獨逸語の講師とし在るに逢ひ申候、これは偶然に御座候。

八日朝一富士の大廣間に一同會食、諸氏予を中島に送りて、小豆島行の餞け被致候、予は十一時朝日川を下りて、途中關西中學の短艇競漕を舟の中より眺め、三幡港より小蒸汽船に乗りて、先づ高松に参り申候、海上の風景また一入の眺めに御座候、五劔山の奇なる、屋島の凄なる、奇絶凄絶、志度浦、壇の浦、そこには繼信の墓もありて、平家蟹もなほ存せるなどいふことを聞きつゝ、船高松に着く、白聖の古城海上に浮び出でたる處、屋氣樓とはこれなるべし、直に琴平行の汽車に上り、夜九時虎屋といふ大旅館に泊り申候。

翌九日朝參詣、午後一時發車、夕日城の松が枝に落つる頃、小豆

島行の船ありといふに、急ぎ乗り移りて、海上にて夜に入り、土の庄町といふ、この島での都に着きたるは午後八時なりし、今宵の宿はしかもいと心切に取扱ふに似ず、蚤に蚊にせられ、一睡も致さず候。

十日朝早く起き出で、腕車を急がして、下村といふ寒霞溪の麓まで行きぬ、途上海に傍ふて進むのなれば、眺望いと麗はしく覺え候、八幡、池田、那古などいふ幾漁村を過ぎ、下村に至りて結束し、中桐氏を訪ふに不在、仍て獨り寒霞溪に上り申候、五十町の登り道、予より案内の車夫の汗になれるも心地よし、水には乏しき山なれども、流石天下の名山なり、然れども到底耶馬溪の勝に

は若かずと存じ候、時少しく紅葉には早く、今二十日も過ぎなば、一番の見ものなるべく存じ候、見了つてまた土の庄に歸り申候、途中池田にて夜に入り候に、六日ばかりの月は朧に、松の影は黒ふして遠き島影の杳々無からんとする景色など、實に本土を離れたる洋中の孤島、山に入り水に下りて車を走らせ行くに、心細さ自づから涙も下り申候、八幡の一本松まで來れば、漁村の燈影ちらつきて、實にこゝは人里よと喜ばしきまゝ、車を飛び下て、後押などして手傳ひ、漸々舟宿に着きて今宵出づべき上りの舟ありやと問へば、俄の大風にて一杯も立寄らずといふ、さらば明朝早くあるかと聞けば、それもよくは判りませずといふなる顔の憎

くかりし、詮方無ければ便船あるまでと波止場前の一つ家に泊りて、夜の嵐波の音に、夜一夜夢も結び得ず候。昨日車上の發句一二左に御披露いたし候。

汐の來て枯蘆二三本夕日かな

船に焚く火ばかり赤し秋の暮

けふもまた新佛あり枯尾花

初時雨屋島に一つかゝり舟

海暮て洲崎の火影時雨來る

○  
など淋しきまゝに苦吟いたし申候、以上。○十一日朝讃州小豆島土の庄舟宿にて

○  
拜啓、さる十一日朝、小豆嶋土の庄より出したる書狀、最早御覽の事と察入候、その折も申上候如く、瀬戸内の海金魚をも放つべくなど申されし方も候ひしが、波荒れてはなか／＼左様な譯に參らず、御存じの通り海淺く候故、少しにても暴風と見候ては、定期の船すら、小さき島などには立寄らず候、それは坐礁とやらを恐れてと存じ候、乃ち土の庄にて日和を待つこと一晝夜、十一日の午後は天氣も好くなり候まゝ、若松丸といふ五十噸ばかりの汽船に乗りて、岡山の三幡港に着き申候、船中にて岡山の質屋某の娘子四人を伴ひ、金比羅參詣の歸り路の方と同船、その方々の船

に弱きを見て、氣の毒に感じ申候、三幡港より朝日川に沿ふて上り、また岡山城下に入りて、三啞、静灣二子と淺酌、錦園に一泊致候。

十二日、上車、舞子の濱にて車を下り、垂水驛まで徒歩、途上の風景を貪り申候、その夜再び神戸光村氏に泊りて、主人と洋食を會食いたし候。こゝにて豪商坪井氏と懇意になり申候。

十三日は光村氏と共に、その寫眞暗室に入り、一百餘枚の乾板を現像いたし候。氏の熱心斯道に盡瘁せらるゝの精神、たゞ感服の外無之候。この夜氏は從者泉谷八木中尾三氏と共に、須磨の別墅に月見の宴を開かれ申候、固より紅粉の氣のあるにあらず、携ふ

る所の行厨を開きて、白沙青松の間に、半輪の月を賞し申候、波静かにして海は熨すが如く平に、鹽屋の岬は黒く突き出で、淡路島の一角、淡々影無からんとす、折ふし月前の金波を亂して、黒き影を波に印するものは、一葉の小舟に、漁夫の乗り居て、蛸壺を水に投ずるにて候、其他は犬の遠吠え、あるは草庵の琴の音、それより外は淋しき氣色のみに御座候、別墅の留守を預れる老爺の、今日しも三の谷奥にて採れる松茸を、田舎風に炊き呉れたるなど、何より嬉しき饗應に有之候。

十四日正午三の宮より上車致候。かねて江見水蔭兄との約も有之候ゆゑ、急ぎて停車場に至れば、兄先づ待受け居られ候、手を

携へて汽車に上り、見送りの人々と別れて、二人西の宮に下車致候、直に恵比酒の宮に参詣、それより大坂に至り、築地多景色樓の歓迎會に臨み申候、南翠先生をはじめ、水蔭、霞亭、幽芳、好尙、秋渚、浩々、柳水、不孤諸兄あり、殊に此席にて思ひ設けず、小波、蘭雪二兄に逢ひたると、不思議といふも餘り有之候、われ京を出で、四十日、毎夕土地を異にすれば、新聞も續けては讀む事叶はず、殆んど山中曆日を知らざることなども有之候、その際偶然の出會、たゞ一驚を吃し申候。

此夜蘭雪兄が堂島の寓居に泊りしに、角田浩々兄翌朝未明に訪はれ申候、共に車を聯ねて、梅田停車場に至れば、何ぞ圖らむ、盛

文館の早川氏在りて、昨夕の終列車より、今朝にかけて、われを待受けたりといふ。われは乃ちその網に罹り、再び備後町に擲となりて、またも館上に微酔の客と變じ、その九時幾分再び坂鶴鐵道によりて、丹後探勝の客と相成申候、これ十五日なり。扱池田伊丹より生瀬までは、相識の地、左までの好風景とも感ぜざりしが、生瀬より三田町に至るの間、山水奇絶、天下多く有らざる好風景に御座候、されど丹波の篠山より群峰隆起、他奇無き所、面白からず候、福知山より乗合馬車にて、富津港まで急がせ申候、途中由良より海に沿ふて進めば、薄月雲にかすれて、山影黒く、馬の息のみ白く相見え、夜は更け申候。

十六日所轄警察署より警衛の角袖巡查一名われに隨行、天の橋立の好風景を寫真いたし候、そは過て要塞地を撮影し、刑に觸れむことを慮りて、署長のわれの請ひを容れ、特にこの巡查を證人として附せられたる好意に候、依て切戸の文珠より進んで、松林の中に入り、一里の天橋を渡りて、遺憾無く撮影いたし候。風景は流石に日本の三景、松島、宮島など、趣を異にする所は至妙に御座候、たゞ日本海邊の名所とて、淋しき景色は、是非も無之候。この日六時の汽船あり、越前の敦賀に行くべしといふに乗込候ところ、大風濤のため、一夜は若狹小濱の沖一里ばかりの處に漂泊し、翌朝無理に出帆せしめ候處、若狹國常神といふ小村の、

しかも一つ家より外、他に人の住むべき庵だも無き、怪しの入江に碇泊して、また明日の日和を待つべしといふ、然るにその折の風雨を、土地の天候に明るき者に問へば、そは裏西といふにて、七日七夜も續くべしとあるに怖ぢ、われ獨りその陸に上り、人夫を頼みて、越前敦賀まで急行、夜の十一時に着き申候、その間、路程十里、四里餘は馬も通はぬ深山幽谷を、雨を衝いて徒歩いたせし困難御察し被下度候、此夜米七といふに泊り、再生の心地いたし候。

翌十八日は金崎宮に征西將軍尊良親王の御遺跡をたづね、松林に武田耕雲齋等の墳墓を見、轉じて福井市に橋本左内の墓をたづ

ね、愛宕山に登りて、城下を一目に見申候。この夜は陰曆十三日、月出で、白山靄にかくれ、夜更けて金澤の寒、骨に徹するを覺え申候。停車場を出づる人を見れば、いづれも二重外套に襟巻、われのみ獨りフロックを着のみ着のまゝ、一枚の白毛布を命の親と頼みて、こゝ百萬石の御城下、霜の如く月の冴ゆる往還を迷ひ行く身の味氣無さ、御慰察奉仰候。宿は北州館といふに泊り申候。

十九日早朝犀川の畔、古今亭に伊藤侯を、鏝甚に渡邊子、末松男、金子氏を訪ひ申候。槐南氏にも日高氏にも久し振にて逢ひ申候。それより轉じて兼六公園に入り、撮影中、渡邊子の園内を逍遙せ

らるゝに逢ひ申候、子微笑を帯びて、われの勉強をお賞め下され候。この夜能登に出で、七尾より和倉の温泉に一泊仕候。途中伊勢崎村にて、村の祭禮有之、男と女の盆踊するを見申候。影黒き木立の蔭、月に遠慮の頬冠りせる手拭の白く、雪を欺きて、黒勝なる手織の木綿衣と照應し、その誰なるやを辨じ難き、淡き戀と戀との影が、手を舉げ足を爪立て、踊り狂ずる具合、詩的に御座候。聞けばこの村には、今も泣女といふがありて、人の死せる時、米五升三升位にて、忌中の家に雇はれ、三升泣き五升泣きとて、値によつて泣き叫び、口を糊する者ありとぞ、その怪しむべき風習の存りある土地柄とて、言葉の訛り、聞き苦しきこ

と、言ふに忍びず候。和倉は實に北國の華清池、温泉水滑にし  
 と長恨歌の一句を想起致候、後には高からぬ山、前には波靜な  
 る海、屏風ヶ崎の日本海の荒波を抑へれば、こゝは不斷の風、  
 夜は鮫釣る漁火の水を射りて、晝は輪島通ひの汽船の煙を殘して  
 行くなど、三日位は京の人も湯治の出來得べき處に御座候。辨天  
 島景又妙。

二十日午前十時直江津行の汽船に搭じて、伏木まで行く、夜に入  
 りて大雨驟り、一同室内に籠る、煙草の煙、濛々として人酔はん  
 とす、越中の魚津といふ港にて大風暴雨、流石に日本海、思ひ切  
 つたる大激浪騒ぎ立ち申候。汽笛五六聲、漸く一艘の端船参り候。

然るに直江津は大風雨にて、直航危しとの電報來れりと、船長  
 の云ふが儘に、急ぎ上陸を欲するもの、満船の乗客五十幾名、そ  
 の混雜、言語の外に御座候。瀧の如き反吐をつくもの、眩暈して、  
 他客の肩に倚るもの、醜又醜、怒濤一葉の舟を醜弄し盡して、漸  
 く岸に着きたりと思へば、忽ち流星の如く、沖中に煽り出さるゝ  
 など、たゞ濱邊に點せる無數の提灯の、高く低く上下せられて、  
 あうく懸聲するを聴くのみに候、かくすると甘分ばかり、漸  
 くにして乗客は夫々の宿引に脊負はれ、首尾よく上陸、弗と胸を  
 撫でたる向も有之候。われも混雜紛れに何人かの肩に上り、岸の  
 上に立ちて、さてその負ひ呉たるは誰ぞと見れば、茶屋勘といふ



弓張を熱せる妙齡の女子の腰部は悉く潮水に浸されて立てる美人なりしに、また吃驚いたし候、依てその女と共に宿に着き、命拾ひの酒二三杯傾け申候。

二十一日雨霽れたれど波高くして船出づ可らず、かねては昨夜の事に懲りたれば、今日は船をすて、陸行と定め申候。時しも朝は未だ早く、十六日ばかりの月の残りて、影白き頃、車を立て、行く、この段の光景は正に是。晨鷄再鳴、殘月没。征馬連嘶行人出。とでも云ふべく候。三日市を過ぐれば、悉く日本海岸の蟹家漁村に御座候。境といふ處は、字の如く越中越後の國界、市振より親不知の嶮を探り候に、寔や十月の荒海、その名に背かず、

昔はさぞと思ひやられ候。糸魚川町より夜に入り、また四里許を車にて、こゝ能生といふ一漁村に着き申候。日落ちて潮聲悪しく、山峙ちて月影到らず、海漫々たる邊、風萬里を渡る處、一輛の車に提灯點して、とぼくと進む有様など、戦とするほど物凄く候。御推量下され度、今宵の宿も棒のやどり、海荒れて波の音枕に近く、家傾きて、風度る毎に、震動する如く覺え申候。神經昂りては、容易くは寐られぬ儘に、隣室の客の齒切り物凄く、こも瀧に障る種となりて、大勇猛心を起し、この通信一回書き認め申候。明日は直江津より新潟、それより碓氷嶺を越え、廿五日には必ず歸京可致候敬具。(十月廿一日越後國能生村中の茶屋にて)

拜啓、門外千里、旅より旅と日をかさねて、郷信を聞かざるもの  
 四十餘日に相成申候。實に北國の秋の夕、月明かく候ても、雪に  
 白山の嶺、さては越中路に入りて、綿帽子かぶれる立山の、蒼  
 旻にヌツと峙ちて、麓の村の枯木立、氷にやなるらむかと疑はる  
 と霜夜の景色、雁の棹の黒く渡り候など、就中腸を斷つは、こ  
 れ冬に近き旅客の情に御座候。京にまします父母の、如何遊ばし  
 候にや、家に残れる妻の近况如何など、さすがに望郷の念も起り  
 申候。別けて廿一日の宿は、日本海邊の荒ら家、怒濤廂の下に通  
 ひて、柱斜に檐傾き、小生の臥したる部屋などは、寝返りする

毎に、小震動を起し申候。かゝる家にも、なほ寝られねばこそ、  
 物も思はれ候道理にて、夜一夜うつら／＼の境を辿り、窓白むま  
 ゝに床を跳ね起き申候。朝食もどく／＼宿を出で、村外れに至り  
 候に、白山神社といふがあり、前に蒼溟を湛えて、白浪雪の如く  
 碎くる處に、辨天島も有之候。海道筋をとぼ／＼行けば、空は陰  
 に曇り、雲は咫尺に迫りて、例の日本海岸の名物なるさんご時雨  
 の、颯と降り出で申候。小泊といふ漁村の物淋しげなる、前には  
 萬里際涯無き大海原を控えながら、船一ツだも見えず候。藤崎の  
 女夫松、雨にシッポリと濡れたる、色陸ましく相見え申候。筒石  
 といふ小村は、小高き丘にて、風あたり一入烈しく、斷崖百尺、

怒濤その下に吼ゆるも、屹然として長松雲に聳えたる、面白き風景に候。名立村は二百戸ばかりの一小市、聞けばこの村、二百餘年前に埋没して、こゝに生きとし生けるもの、悉く地下に葬られたりし事有之候由、今も赭山峙ちて、行人の膽を冷させ申候。石不動の瀧、虎が頸、四海波など稱する名所あるも、時雨に宿を急ぎ候まゝ、車上母衣の中から眺めやり候のみ、有間川、長濱を過ぎ、五智に入りて、有名なる如來様を拜み申候。直江津松葉館に着きて、電信爲替を受取らんとするに、生憎の日曜日、氣拔けしたやうになり申候。されども泊るのも業腹なれば、大雨を事ともせず、なほ汽車に乗るべき錢あるを幸ひ、新潟までの赤切符買

ふて、汽車に乗り移り候に、官線と北越との相違、斯うも違ふものかと呆れ申候。また官線の私設の旅客を取扱ふ事の不親切なる、殆んど継子扱ひせられ居候、柏崎より夜に入り、雨さへ降りしきるに、新潟は沼垂の停車場より程遠しと聞くからに、性急の小生のいかで猶豫なるべき、長岡にて下車せむかと存じ候ひしが、いやく三條の町には古き知人のあり、別れてより十二三年、無事にてあらば年の頃も七十に餘れる筈、身代も其地に隠れ無き家なれば、夜陰に訪ふても、左迄の迷惑ともならざるべしと、猶り極めして、さてその家を尋ね申候。爐の端に端坐し、吊洋燈の火にて書讀み居られ候は、髪こそ白うなりたれ、正しく尋ぬる其人に

候のみか、彼方は不意の珍客に驚きて、まア〜ようこそと、眼鏡外して喜ばれ申候。この老人名を吉井兵右衛門と申候て、幼少の折に、小生の生家の本家に奉公し居られたる因も有之、且つは奥羽地方に手広く行商して、年が年中、小生の家に宿り居られ候砌、小生を教訓して、冬の爐邊の百物語、怖いものは馬鹿と借錢、お化けの出るのは、奢る平家の屋敷跡よ、立身出世は勤儉の二字にあり杯、鷹山公を手本にしての説法せられ候事を、今も小耳にはさみ、その老人の徳を慕ひ居候に、今宵計らずその人に逢ひて、嬉し涙に咽び申候、固より手堅き商人の家なれば、酒も肴も料理屋にて調ふるものとは違ひ候へども、奥様嬢様心を籠めて

の響應、たゞ感服の外無之候。世には時めく官人などの爲めに、心にも無き輕薄笑ひして、山海の珍味を自から卑下し三鞭酒をわざと盃洗に溢して、御馳走振を見する人などあれど、いざ翌日となつて、榮華は夢の間、さて昨日の割前ほど、發起人同士が額に青筋を立合ふやうな御馳走は、考ふれば旨いものには無之候、それよりも御志は松の葉。娘が手料理のお口には適ふまいが、面白う呑んで下され的の響應こそ、旅には嬉しきものに御座候、この夜はその老人と枕を並べ、寝物語に更闌くるも不知罷在候。廿三日、亡父の命日なれば、朝だけ精進いたし一番汽車にて新潟に乗り込み申候。沼垂より車を飛ばして、信濃川を渡るに、萬代

橋上の斜雨、桐油の不完全なるために、胸から上は露佛となりて、寒いやら冷たいやら、母衣の中に小さくなつて、ほろ／＼涙に呉れ申候。宿は古町通のくし清、着くと直に毛布を天窓から引ッ被つて、市中を見物に出かけ申候。白山様評判ほどにあらざ、日和山は盛砂の盆石、湊は暴風にて、舟一ツだも無きぞ、悲しくなり申候。つまらぬ／＼を口癖のやうに云ひつゞけ、歸らうとする地藏堂の曲り角にて、圖書會社の村田五郎氏に逢ひ、ヤア／＼と互に吃驚せる時ばかりは、金澤訛を遣ひ申候。宿はと問へば二人とも一ツ家の表二階。そんなら上段の紳士は君か、次の間の寫真屋と匿名の美男子は貴公か。思懸け無きイヨ御對面と假聲など

遣ふて、一緒に宿に歸り候ところ、あばチャンといふ仲居の辭に、新潟は北國の色の湊、舟が／＼の無いは十月の荒海、野暮を云はずと、旅は親が／＼の無いお二人様、まア鍋茶屋へなど行んで、觸れば解けさうな雪女臈の、しかも鼻孺した越の國の踊でも見さんせといふ。それも尤と同意で、あばチャンに案内頼めば、實にこの第一樓とも思はるゝは鍋茶屋に御座候、やがて別嬪も参り候、いづれも圓ポチャの眼清しく、京女臈に似て居り申候。紅葉兄の樽砧を見せよと云へば、土藏に入れありとて、出さず。日暮宿に歸り申候。

廿四日曇天、二番汽車にて長岡に参り候。こゝは養父母の故郷に

候まこ、たい懐かしさに見物いたし候。製油所を中島に見、信濃川を長生橋上より眺め申候。また遠く彌彦の山を眺望いたし候。日本にたい二ツの彦山、北にこの彌彦の山、九州に英彦山有之候、その二ツながらの彦山を、一ツ旅路に眺め候こと、何より嬉しく感じ申候。又この肴屋にて妙見の鮭一尾を買ひ候ところ、目方二貫目近く有之、これを京に居ます父母、マツタ兄なる人に侷めんとて、生なるをわざ／＼持上り申候。三時廿分の發車に間のあれば、親戚なる星野、覺張兩家を訪ふに、兩主人とも停車場まで見送られ申候。この夜の内に長野に行くべき汽車の、二時間餘も遅刻したれば、官車の私設のを待たで出發せしため、吾も人も止む

なく直江津に泊る、いが權といふ宿は、心地よき家に候。廿五日晴天。昨日長岡にて妻の病んで褥中にあることを聞き知り候てより、歸心矢の如く、電報出して、返信來るをも待たで、一番汽車に乗り移り申候。高田を出づれば、妙高山は雪に白く、麓の野の景色面白う候、車窓より赤倉の村を眺めては、廿七年の夏、彼地に湯治して、南瓜の吸物を食はされたる事など思ひ出し、可笑しさに獨笑いたし候。長野はこの春伊藤侯に隨行して、振舞の酒に酔ふたるともありたる杯、山河草木、みな知己なるも妙に御座候。上田には親友金井氏あるも、這回は態と不訪。さて碓氷峠の紅葉。今が恰度見頃に候。隧道くゝる度毎に、景色一變、黄

なるあり、紅なるあり、錦襪に銀絲の刺繡せりと思はるゝ谷川の  
 水の白きがあれば、小袖幕より酔顔をマツと擡げしかと怪しまる  
 妙義の一峯、奇絶妙絶、實に天下の大觀に候。松井田を過ぐれ  
 ば、この奇なく、この妙なく、折ふしは後邊ばかりを振向かれ申  
 候。斯くして一日の汽車中、曉に妙甲の山を見、午下淺間の煙を  
 望み、夕陽影裏碓氷妙義の名山を眺め候こと、人生の快樂、こゝ  
 に足れりと申べき歟、旅に滞りて、故郷の風月如何、路胡地に  
 入り候ては、音信全く絶えて、子は親を不知、親は子を不知、千里  
 隔絶、交疎ならんとす。今や五十日の長途を了り、山にあらざ、  
 水にあらざ、その人情反覆の間を出で、慈愛の岸に着かん事は、

○  
 半日の近きに迫り申候。この書車中にて認め候が、高崎にて投函  
 いたすべく候。乃ちこの書の君の机邊に到らん折には、小生も亦  
 親の家に歸り候て、笑ひの聲に裏まるゝ頃なるべく候。興もあら  
 ぬ長しき通信、我ながら呆れ申候、それを御覽下さるゝ御方々、  
 今より御禮申上置候、いづれ其内お埋合せ可仕候、敬具。(十月  
 廿五日碓氷汽車中にて)

○  
 謹啓、時下秋冷の候、先以御多祥奉賀上候、次に小生事長途  
 の旅行を了へ、昨廿五日夜無事歸京仕候間、乍他事御安神被  
 下度候。

陳者其御地滞在中は、一方ならざる御優遇を蒙り、難有仕合に奉  
 存候、右御禮申上候、乃ち小生は九月九日の夜東京を出發し、  
 畿内、東海、山陽、南海、西海、山陰、北陸、東山諸道の一部を  
 周遊して、各地都鄙の山水風俗を、遺憾無く觀察し得たるは、偏  
 に尊臺を始め沿道各位の御高庇に依れる儀と鳴謝仕候、不取敢  
 安着の御報旁々右御禮迄如此に御座候。敬具。 (明治卅二年十月  
 廿六日東京にて)

予は右の如くにして長途の旅を了りたるにて候。烏兔匆匆、年こ  
 とに改りて、卅三年の二月と相成り、鳥謳ひ、花も笑ひ候へど

も、空しく世事に醒醒して、帳場格子の裏に籠居し、春を餘所に  
 いたし居り申候。今にして曾遊を回顧致候へば、茫として夢のや  
 うに御座候、その多忙なる中にて、此頃少しの餘暇を偷み、耶馬溪  
 に關する古今の書冊など、一ツ二ツ展讀いたし候。就中備中の  
 人古松軒の西遊雜記には、彦山を下りて、羅漢寺を經、宇佐に出  
 でたる道の記有之、また西華坊支考が梟日記には、中津より日田  
 におもむける記の中に「山頭によぢのぼりて、五百尊を拜す、誠  
 に飛花の春におどろき、落葉の秋をかなしめるならひ、是も無風  
 雅の佛達にはおはさくらむ、山は萬重にけはしく、巖は千丈にそ  
 ばだちて、清淨や、人の膚をあらふ、ありかたき佛場也。葛の葉



の秋まぢかほや羅漢達」など、筆を舞はし有之候、其他南谿の東西遊記、三千風の行脚文集などにも、記文有之候へども、兎も角も山陽が、耶馬溪圖卷の序ほどのものは無之候。近年に相成候て、生田子精氏が、畿道巡回日記に「十月九日、發中津、抵樋田、山漸迫、水漸急、聞耶馬溪之勝在近、舍車而歩、崖腹有隧道、長一町餘、穿方穴取明、出隧道、即耶馬溪」とあるは、青村の隧道の事に候、そのつゝきに「崖上奇巖矗立、拔地如筭、松竹薜蘿、横生倒植。岌業相倚、雲繞其歛處、勢欲飛動、崖下溪水縈回、色如靛藍、河身皆巨石、錮立嚙水、濺々亂人語、有茶店數戸、供遊客休憩、山陽先生寓宿之處云、此間爲豐後日田之街

道、牛洩馬勃、臭穢塗地、頗害風景、距此數里、有羅漢寺、寺據山、山骨皆石、鑿山作洞壑橋梁狀、安五百羅漢、亦爲絶勝云、以道迂不得造觀焉、道路沿溪、屈曲遞進、兩邊多奇石、路窮處穿隧道、便行旅、十里餘無一峻阪、抵守實、投中野屋、是日、行程十里餘、經驛三、曰樋田、曰口林、曰宮園、など有之も、遠く路を轉じて彦山に詣でたる紀行は、皆無の姿に御座候、されば彼の頼山陽すら、その記文に既經肥薩隅、還寓豐後隈邑、臘月五日入豐前、遇一水北來、蓋發源彦山者、沿而東數十里とありて、これも日田より中津町に出でたる而已に候故、彦山の記事は更に無之候、然れども其文は古今の絶調、實に

耶馬溪は全く山陽の筆によりて、開拓せられたるものに相違無之候、文に曰く余嘗て昔人の畫を讀み、其山貌の太だ奇峭なるを疑ふ、恐らくは天壤間有る所に非らず、畫人一時、輿到て其筆墨を鼓舞する耳と、豊の耶馬溪を觀るに及んで、乃ち知る、造物の奇怪、畫手も亦寫し到らざる者有る也を、歳の戊寅、鎮西に遊ばんとして海を過ぎ、南彦山を雲際に望み、已に其異有るを覺ゆ、既にして二肥薩隅を經、還て豊後の隈邑に寓し、臘月五日、豊前に入る、一水北來するに遇ふ、蓋し源を彦山に發する者なり、沿ふて而して東すると數十里、昏黒左右の峰巒、皆凡に非るを覺ゆ、山溪相迫る處は山腹を鑿つて衢を作り、人、牖を穿つて明を取る、

余炬を買ひ以て入る、牖に遇ひ月溪水に在て朗然たるを窺ひ見て民家に宿す、翌大霧霽る、を待ち乃ち發し、復た溪に沿ふて東す、愈よ東すれば愈よ奇、群峯水を夾んで攢竦し、春笋の矗立する如し、土石を載する者、石、土を挾む者、全石なる者、全石破裂して洞穴を成す者、兩石相鬪ひ、其一仆れんと欲する者、石數層、累なりて夏雲の狀を成す者有り、而して樹、石罅よりして横生縱生、倒生して而して上指し、叢生して石を蔽ひ、石と勢を争ひ、而して之れに勝んと欲する如く、石又樹中より奮躍して而して出づ、而して石蔭皆苔、紫緑相间はる、或は石の半面を没し、或は全身を没し、又樹を援けて石を攻むる者の如し、大抵峯勢石皴董

巨が刻意の圖の如し、時に窮冬、多くは老木葉脱し、槎牙瘦古皆  
 倪黃の筆法、而して苔の枯蹙蒼渴せる者、王叔明也、古人の筆墨  
 吾を欺かず、梯阪に至り、孤店に憩ふ、店、石壁の數丈なるに面  
 し、飛泉懸る焉、仰げば則ち更に高峯あり、其幾十丈なるを知ら  
 ず、余急に佩ぶる所の酒瓢を釋き、命じて之れを燗めしむ、竈突  
 蕭然、會々一獵師、新に豪猪を獲たり、割て而して之れを煮る、  
 肪脆、水の如く、數大白を連引す、又行く、溪又數曲、峯勢に隨  
 つて上下す、或は激雷噴雪、或は淳膏凝碧、峯影之れが爲に或は  
 碎け或は全く、水山を妬んで而して其影を亂すに似たり、屈智林  
 に至る、溪稍開け、小村有り、一橋を過ぐ、此よりして溪北に行

く、開くる者益す開け、十數里にして古城の正行寺に詣る、寺主  
 舍公は余が故人なり、余を埃つと既に久し、余先づ詫して曰く、  
 君が州の山水大に奇なり、舍公曰く、更に奇なる者有り、子をし  
 て之れを目せしめんと、居る二日、舍公と南行して田塍の間を行  
 き、仙人巖に至る、巖石山頂に突立す、舍公指て余に示す、余甚  
 だしくは賞せず、其明、又田塍を経て、羅漢寺に至る、寺山に据  
 す、山を鑿つて洞壑橋梁の狀を作し、五百像を安ず、余復た甚だ  
 しくは賞せず、寺前の逆旅に宿し、燈を挑して而して談ず、余曰  
 く、山は水を得ざれば生動せず、石は樹を得ざれば蒼潤ならず、  
 余が馬溪を賞し、而して仙巖を賞せざる所以なり、羅漢に至ては

則ち人工耳、然も皆馬溪の支裔矣、且つ馬溪は、溪山相迫り、田  
 塍目を礙ぐる無く、而して其路坦夷、真に遊ぶ可き也、然れども  
 二豊の通道なる爲め、過ぐる者皆慣看す、况んや公等此土に生長  
 す、宜べなり其奇を見ざるや、余は則ち再遊期す可からず、將に  
 復た之れに溯り、以て之れを諦觀せんとすと、舍公袂を奮つて與  
 に偕にす、早發、一水を過ぎ、北して馬溪の口に出づ、峯容樹色、  
 忽ち迥かに別なるを覺ゆ、淺より深に入り、平より奇に入り、前  
 きに數曲せし者に沂ぼる、一曲は一曲より奇にして、諸れを前途  
 に比するに、更に喜ぶ可き也、復た絶壁の下なる孤店に至る、店  
 主余が面を識り、驚て曰く是れ前きに猪を喫せし客也、何の幹有

て再び此に來る耶と、余曰く、山を看んと欲する耳と、曰く、山  
 何の好看有る、吾れ子が看るを禁せざる也と、遂に溪畔に席し、  
 舍公と瓢を傾け、一醉して山寺に宿す、明、雨ふり、轎を借りて  
 西還す、山峯雨を得て、皆變幻、態を作す、或は前に以て一山と  
 爲せし者、分つて數峯と成し、群仙肩を駢べて其半身を露はし、  
 萬松、鬣を振ふて雲中に鼓濤する如く、又廿五菩薩の樂を奏して  
 而して至るが如き也、還つて屈智林に至る、舍公吾酒の盡くるを  
 慮かり、預め家僮を戒め、樽を馬に駄し來り、醉を取て阿保村  
 に宿し、翌、寺に還り、又三日にして辭し去り、海を踰えて東歸  
 す、海雲の中より、鎮西の山岳を願望するに、其豊前に屬する者

は、皆別態あり、彦山其尤も大なる者、耶馬の山脈水理、蓋し彦山より發す、故に獨絶なる耳、余足跡殆ど海内に半す、弱冠東遊して妙義山を得、以て無雙と爲す、今馬溪百里、妙義の如き者、幾十峯なるを知らず、之を海内第一と謂ふも、或は誣ひざる也、この譯文は遅塚麗水氏が其著日本名勝記に、抄出せられたる儘に御座候、山陽の文中「海内第一」と賞讃せる一語、予は左までの溢美とも思はず、或は當れるものかと、暫時頭を傾け申候。さてまた豊前の人松田竹園氏の耶馬溪真景畫帖といふ書は、自畫自讃せる真景畫卷に有之、圖數も五十景ほど挿みありて、やと完全なるものに候、されどその畫と真景とは、少しく異なり居候や

う見受られ申候。其書の自序に余僻住馬溪、以耕樵爲活、自幼好繪事、而未レ能從師學之、每暇日出溪把毫以山爲師、近濃遠淡雨色雪容、一寫一改、曠日累月不知彌久、不覺積勞、只欲得其妙訣耳、蓋馬溪者發源干彦山、沿焉而東數十里、群峯駢起、千岩競秀、其間一溪百折、一折奇一折矣、得着余凡筆耶、所獲真景唯寫其髣髴而已、不能使余腕若余心、可謂遺憾一矣、と謙遜しあれども、左までにも無之候、一松氏の豊前名所案内記にも、耶馬溪の事を簡明に記し有之候、中に後藤基次の墓の記事あり、一寸面白き探索に御座候。また詩の妙なるものには、廣瀬淡窓が「青帘往々賣新醅、杜宇花紅夏已回、一〇〇

唯○隨○瀾○轉○、十○三○郵○總○背○山○開○、危○峰○拔○地○尖○於○筍○、瘦○樹○纏○巖○短○  
 似○苦○、怪○得○旅○窓○疇○昔○夢○、劔○門○關○下○策○驢○來○、とは梯坂邊などの、  
 奇○景○を○謠○ひ○候○もの○に○や、彦○山○を○賦○したる○長○篇○に○て○は、村○上○佛○山○の○  
 「法○螺○吹○起○一○聲○長○、道○士○導○我○攀○羊○腹○、上○宮○儼○在○最○高○頂○、危○欄○縱○  
 眸○晚○八○方○、是○山○是○水○都○不○辨○、四○國○九○州○青○茫○々○、斯○時○神○氣○自○軒○舉○、  
 欲○下○把○我○詩○一○問○、彼○蒼○上○高○聲○唱○出○兩○三○聲○、驚○殺○天○狗○天○際○翔○、萬○壑○松○杉○  
 忽○震○動○、怪○風○捲○雨○奔○更○忙○、須○臾○雨○晴○雲○亦○散○、秋○爽○三○千○八○百○房○、  
 とは、實○況○に○有○之○候○、彦○山○は○實○に○海○抜○一○千○百○七○十○米○突○、銅○製○の○大○  
 華○表○あ○る○處○よ○り、絶○頂○ま○で○は○四○十○二○丁○有○之○、頂○上○の○眺○望○、此○上○な○  
 く雄○大○に○御○座○候○、豊○前○坊○は○彼○の○草○雙○紙○に、岩○見○重○太○郎○が○劔○法○の○秘○

術○を、天○狗○よ○り○授○か○り○し○所○に○御○座○候○、耶○馬○溪○は○そ○の○裏○山○の○溪○澗○に○  
 して、直○ぐ○麓○な○る○毛○谷○村○よ○り○以○東○數○十○里○、景○色○絶○美○、予○は○今○も○な○  
 ほ○忘○れ○難○く○候○、そ○の○溪○壑○の○情○、夢○寐○の○間○に○通○ひ○候○て、忘○ら○れ○ぬ○  
 ば○こ○そ、日○常○山○積○し○來○れ○る○俗○務○を○も、五○月○蠅○が○ら○ず○處○理○致○居○り○候○  
 な○れ、予○は○全○く○の○賈○人○に○あ○ら○ず、ま○た○全○く○の○文○人○た○る○を○得○る○能○は○  
 ざる○今○日○の○境○遇○、御○愍○察○被○下○度○、他○日○再○び○彦○山○に○登○り○て、日○暮○天○  
 壇○人○去○盡○、香○煙○散○作○數○峰○雲○て○ふ、奇○なる○風○物○を○見○ん○は、そ○れ○何○の○  
 年○な○る○べ○き○ぞ、畢○竟○榮○達○と○山○水○と○は、相○親○し○む○能○は○ざる○もの○に○候○  
 や、お○互○様○に○月○給○貰○ら○ふ○身○は、何○彼○に○つ○け○て、足○の○裏○の○飯○粒○、心○  
 地○悪○し○き○浮○世○に○御○座○候○、敬○具○(○明治三十三年二月一日東京にて)

九州遊了、歸京有作

夢繞九州々盡頭。

由來身世似浮鷗。

疎鐘半夜霜當白。

月冷丹楓黃稻秋。

耶馬溪終



明治三十三年二月六日印刷  
明治三十三年二月十日發行

定價金四拾錢

不許複製

發著者兼

乙羽生事

大橋又太郎

東京市小石川區戶崎町六十二番地

印刷者

石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六番地

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

大取次

東京市神田區表神保町  
大阪東區備後町四丁目  
博多 積善館支店

東京 盛文堂  
中津 野依曆三

(本製部濃美)





# 乙羽十種

侯爵伊藤博文君題字 饗庭篁村君序文  
伯爵土方久元君題詞 乙羽生著

近刊



全壹冊袖珍總  
クロース美本  
紙數七百餘頁  
正價金五拾錢  
郵稅 拾錢

寫眞銅版——色刷風景百廿景挿入

東洋古來第一の美本として、内外の喝采を博したる千山萬水は、其紀する所の地、東北に止まりしを、烟霞の癖は更に著者をして、東海畿内中國西南より北陸諸州を跋渉せしめぬ。是に於てか續編あり、之を初編に比するに、經る所廣告に従ふて寫眞に上れる絶景亦頗る多し。装頓の美麗亦優るとも劣ることなし。左に饗庭篁村翁が本書に贈られし序文を掲ぐ。

## 饗庭篁村君の序文

仙家に縮地の術ありといへども、近江八景も瀟湘八景も、一皿へ盛りならへては景色に飽くべし、乙羽氏の遠遊の癖ある山の奥、谷の底、景地勝跡足かならず實地を踐む、往つ返りつ上りつ下りつ辛苦艱難容易にあらずと、屋根から少し飛んで見やうかとおもふ仙術修業中の我輩、二萬分の一、五萬分の一の地圖を擡げて頼杖と縮地ですます足惜みから見れば、俗士の道途に劣る事よ生立ながら貸し中さんと云ひたきはゞなり、然るにて乙羽氏また一大幻術あり、其一望一景古へを懐ふに足りり今を賞するに足るるに到れば、一個の怪しき小箱を取出し、不思議の手付をなす等しく、天下の名山大川は忽ち吸取られて其箱の中に在り、恰かも西遊記中の金角大王が大干世界を一胡蘆の内うちに盛り入れ終るに似たり、茲に至りては我が仙家の縮地の術の遠く及ぶところにあらず、此幻術の上にもまた筆端より雲霧を生じ、妙文たちごころに花を點く、見る者讀む者駭然として、身もただ其箱の中に吸入れられたるが如し、嗚呼乙羽氏もさより大いなる羽ありて人を乗せて大千世界を瞰下さしめんとするなりけり、我術いよく及ばず、我羽ますく用をなさず、羽を翳つて筆を結び、此序をこゝに書くことなり。

(子の初春廿日發行)

大橋乙羽生著

(二月廿日再版)

# 初子集

全壹冊袖珍洋裝  
クロース紙敷六  
百餘頁金文字入  
正價金四拾錢  
郵税八錢

○極彩春景美人……………水野年方筆

小説  
○新出世大黒  
○鬼  
○浮田一蕙  
○戀の今様

説  
○捨扇  
○邪正一如  
○西鶴是非  
○其磧と自笑  
○戯作者  
○戦捷の春  
○樽拾ひ  
○富士越の龍  
○倭モルトケ  
○正直の神戸  
○凱旋兵士

## 目

## 次

筆  
○富士の山  
○耶馬漢  
○左甚五郎  
○江戸紫  
○初茄子  
○新年行事

評  
○大むかふ  
○文壇七福神  
○油地獄  
○金波樓淨瑠璃集  
○鎌倉武士

論  
○歴史讀本  
○文使と聖天權  
○筆はじめ  
○美人彈琴  
○向島春景  
○壯士芝居

歌句  
○水遠山長  
○寒山拾得

著者の錦心繡腸は、花鳥集發刊の後、更に幾多の美文となりて、子の初春の初子集となりぬ、得意の輕妙なる雜筆、洒脫なる小説、奇趣ある社會觀、一家特得の散文となりて、初子の松の引けども盡きぬ妙味あるべし。

伊藤侯爵直話 乙羽生筆記



全壹冊袖珍洋裝  
美本紙數三百頁  
金文字入正價金  
參拾錢郵稅六錢  
（寫眞像挿入）

寫眞 一 侯爵夫妻 ○ 侯爵一家 ○ 侯爵の母堂と令息  
銅版 一 ○ 末松男爵夫妻 ○ 侯の筆蹟

邦國纔に三十年、内には憲法を制定し、外は大邦に戦ひ勝ちたる者、聖天子至高の明德に因るは勿論ながら、之を翼賛し奉りたるは、時の總理大臣たる大勳位伊藤博文侯にあらずや、本書は維新以前侯が猶微々たる一俊介として、國事に従事せられたる情况より、赫々たる元老として、無前の功業を樹てられたる今日に至る迄の、經歷を親しく口授せられし儘を、筆記せる者、音容髣髴、流讀一過せば、侯と睦を交へて、歎息するの想あるべし。

文學博士男爵末松青萍君序 乙羽生著並寫眞(新刊)



全壹冊袖珍洋裝  
美本寫眞銅版  
五拾景挿入  
正價金四拾錢  
郵稅 八錢

賴山陽をして『耶馬の溪山天下に無し』とまで絶叫せしめたる豊の寫眞とに因りて本書とはなれり、從來斯勝を髣髴する者は、獨り山陽の紀文に因て、神魂馳するのみなりしに、著者は山陽の未だ到らざりし所迄到り、其未だ寫さざりし奇勝とを寫し、猶且山陽の記を附したれば、斯書を一讀せば、復た溪を訪ふを要せず、再讀せば遊意勃興、好嚮導を得たるを謝せざる可らず。

近衛公爵題字伊藤侯爵題詞井上文料大學長序文、(石版眞筆)  
紅葉、露伴兩君序六十五翁橋本雅邦翁、武内桂舟君極彩色口繪  
乙 羽 生 著 (本書評判記三十二頁入)

賜天覽



小説あり、紀行あり、一種の眼光と一家の筆致とを以て社會觀を描  
寫し、風俗を記述したる雜文あり、小品大作、蔚然として羅集し、  
以て著者の全集とも見るべきもの、花笑ひ鳥啼き風薫し雲湧く、晴  
雨雨讀、以て著者を悉すべく、以て清閑を消すべく、又以て南船北  
馬の佳伴たるべし。

總クローズ洋裝美本  
四六版紙數千三百頁  
正價金壹圓郵税二十錢

高露さあ 小 説 くらひ  
利小 史 傳 老 公  
貸袖山川 松元鷹近 祿時代と英一 軒 鶴蝶公公

小出當赤男夏女忠霜捨か貧一鬼狐一人  
世の十錦の二畫の身みの筋の  
孝のた夜の世の福  
再版

大菅加 逸話 五種十題  
公石 藤清正公畫像 雄辨像  
衣風俗 食住  
紀行 好行 雨奇  
晴 此は地理上の所説、或は紀行等を集む  
沿革、古今年中行事などあらゆる風俗  
を眼前に暗るが如し

右出版いたし候、用紙製本の美麗、印刷口繪の鮮明なるは、著者得  
意の大手腕を揮ひ、大意匠を凝らせるものに御座候、是非一本御買  
上被下度、さすれば看板にいつはり無き證據は上り可申候



紀行あり、小説あり、美文あり、韵文あり、小品に俳句に、  
 新作舊編、著者が得意の作は容れて可憐なる此一籠の中に  
 あり、春の野にわがれて摘み溜めたる千種の若菜、秋夜  
 春晝の玩びには、之に過ぎたる佳品あるまじ、御評判く、

乙卯年



全壹冊袖珍美本  
 紙數三百二十頁  
 正價金二十八錢  
 郵 税 四 錢

若菜の春(表紙廿遍刷)  
 下村觀山書  
 美人聽鶯(口繪卅遍刷)  
 富岡永洗書

小 説 ●春の夜 ●世話女房 ●鎗持勘助  
 ●犬さくら ●子煩悩

雜 筆 ●不老泉 ●淡粧濃抹 ●田家風月  
 ●小照錄 ●點景山水 ●望郷臺

新體詩 ●園ひの梅 ●柳がもと ●浮世の影

紀 行 ●富士登山 ●木曾路の春 ●鹽原の夏  
 ●江楓漁火 ●雪のふる郷

俳 諧ながれの末

第五版……………出來

從一位勳一等  
八十五翁  
久我建通公題字  
乙羽生著

第四版出來



袖珍洋裝頗美本  
總クロース金字入  
紙數三百餘頁  
正價金參拾錢  
郵税金六錢

田中猪太郎製版 伊藤侯と山縣侯の筆蹟  
亞鉛銅版着色 侯と大隈伯  
繪 舶來光澤紙摺 夫妻○橋本雅邦氏○紅葉氏○露伴氏○動物園の虎

著者の寫真癖は獨り名士の風采を撮影するに満足せず、高談雄辯奇言快話を靈筆に寫して、遂に此書の著とはなりぬ、卷頭の寫真に風采を知悉して而て後朗誦一過すれば、宛も諸賢と一堂に會して握手歎語するの妙あるべく、其讀去つて興味盡きざる、實に近來の奇書なり、

目次

- 山縣侯爵の園藝談
  - 伊藤侯爵の滄溟閣談
  - 伊藤侯爵の美術談
  - 勝海舟伯の洗足軒話
  - 同伯の古今小説談
  - 同伯の雅俗談
  - 同伯の經濟歷史談
  - 大隈伯の園藝談
  - 福羽子の王政振興談
  - 渡邊昇子の俳諧一家言
  - 渡邊國武子の支那談
  - 石黒男爵の茶の湯談
  - 末松男爵の文藝學談
  - 佐藤少將の日清戰話
- 
- 福地櫻痴君の懷舊談
  - 西村茂樹君の幕末談
  - 小崎利準君の芭蕉の話
  - 栗本鋤雲君の身の上話
  - 尾崎紅葉君の詩人の話
  - 幸田露伴君の修文談
  - 前田香雪君の意匠の話
  - 橋本雅邦翁の丹青小話
  - 黒田清輝君の洋畫問答
  - 看守人某の動物園の話

▲ 附 錄 ▼

● 著者の素人寫真談  
● 同 木曾道中談

本書評判記  
……十六頁入



新版

全壹冊袖珍  
總クローズ美本  
新案寫眞版入  
紙數三百二十頁  
正價金三十五錢  
郵稅六錢

口繪—極彩色密畫—清風美人圖……水野年方筆  
 文壇睡れり、著者獨り三伏の炎天に晝寝もせず、夜も深更まで  
 目を覺まして、少しの間にも、ソラ散文、ソラ韻文、新聞讀む  
 外は三分の隙も惜みて、作る程に書く程に、又も此冊子はなり  
 ぬ。一本を手にして、山に行く人、海に遊ぶ人、旅宿のゆふへ、  
 書齋のあした、繙く所として、風清く月白からんものなり。

第三版 出來

六元發兌 東京日本橋區本町三丁目 博文館	<b>筆</b> ○娘姿十五區 ○鷹の羽 ○美人八景 ○送漣山人辭 ○勇み肌	<b>小</b> ●袖時雨(新作) ●こぼれ梅 ●京屋娘	<b>紀</b> ○京の雪 ○夏の夜 ○團洲別墅 ○酒地肉林 ○日光結構記 ○駒場の秋 ○麥藁帽子 ○神田視機關	<b>新</b> ●おぼろ月 ●夏の川 ●暮の秋 ●古關の雪	<b>俳句</b> ○俳諧算盤珠 <b>漢詩</b> ○涼榻詩味
	<b>雜</b> ○娘姿十五區 ○鷹の羽 ○美人八景 ○送漣山人辭 ○勇み肌	<b>行</b> ○京の雪 ○夏の夜 ○團洲別墅 ○酒地肉林 ○日光結構記 ○駒場の秋 ○麥藁帽子 ○神田視機關	<b>詩</b> ●おぼろ月 ●夏の川 ●暮の秋 ●古關の雪	<b>俳句</b> ○俳諧算盤珠 <b>漢詩</b> ○涼榻詩味	



公爵 二條基弘君 侯爵 黒田長成君  
 伯爵 勝安芳君 子爵 福羽美静君  
 子爵 長岡護美君 男爵 石黒忠憲君

題辭

(石版眞筆)

井上文學博士、肝付少將、高山文學士、大町文學士、朝比奈知泉、幸田露伴、尾崎紅葉、佐々木信綱、大岡長峽、野口珂北、川崎紫山、巖谷小波、廣津柳浪、齋藤緑雨、高橋太華、中内蝶二、三宅青軒、田山花袋、野口寧齋、岸上質軒、柳井綱齋、中村桂軒、桐生法學士、鳥谷部春汀、坪谷水哉、林微笑、宮川雲外、森鳥城、奥村不染、上村左川、長谷川天溪、猪波曉花、武田櫻桃、竹林巖、

以上諸家  
 題辭序文  
 跋批評

乙羽生著

★ 累卵之東洋

第六版 出來

全壹冊洋裝袖珍  
 中村不折君諷刺畫  
 正價金十八錢  
 郵税四錢

岌々乎として、將に累卵よりも危からんとする者は、東洋刻下の形勢に非ずや、茲に於て印度洋畔奇男兒出で、雙手頽瀾を既倒に廻さんとを謀る、悲壯淋漓慷慨辭勃、天破れ月駭き、風闇く花泣く、半誦朗誦すれば鬼神も爲に壯烈に哭せん、見よ、見よ、日本の快男子、

發兌元

東京市神田區表神保町  
 東京市日本橋區本町三丁目

東京 博東  
 文京 館堂

3/10/1900

# 乙羽十種

完  
成  
廣  
告

右續千山萬水、耶馬溪、初子集、藤侯實歷、風月集、  
花鳥集、名流談海、千山萬水、若菜籠、累卵之東洋、  
を總稱して、乙羽十種と申候、いづれも一冊讀切の  
美本、著者が半生の心血を絞りたる、美文に有之、  
是非御愛讀願上候、以上

## 版元

東京日本橋區  
本町三丁目

## 博文館

Blank white label on a dark background.